
ソードアート・オンライン 舞えない黒蝶のバレリーナ (現在修正中)
彩月エリー/Saizuki.Ellie

暁～小説投稿サイト～ By 肥前のポチ

<http://www.akatsuki-novels.com/>

注意事項

このPDFファイルは「暁く小説投稿サイトく」で掲載中の小説を「暁く小説投稿サイトく」のシステムが自動的にPDF化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「暁く小説投稿サイトく」を運営する肥前のポチに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ソードアート・オンライン 舞えない黒蝶のバレリーナ（現在修正中）

【作者名】

彩月エリー／Saizuki・Ellie

【あらすじ】

※現在修正中。

ゆっくりと、しかし確実に近づいていた崩壊の足音は……。

*

溢れんばかりの才能を見せ、「天才」と呼ばれた一人の少女がいた。人並み外れた高い能力を持つ彼女は周りから一線を引かれていたが、親友たち、そして兄と双子の姉に支えられながら、苦しくも輝く日々を駆け抜けていたのだった。

しかし、その日々は「ある出来事」を境に瓦解してしまう。

それから4年後、中学生になった少女は、あるオンラインゲームを手にするようになる。

決して揺らぐことのない、「目的」を心に秘めながら。

『向こうの私は、もう死んでいるのよ』

そう言って、彼女は静かに笑う。

【連絡用】

もし何の予告もなしに長期間更新が止まるようなことがありましたら、下記のTwitterアカウントにてご確認ください。

→@Ellie_novel

【更新予定日】

2016年7月

1日、4日

※18時。

※全て予約投稿済。

注意事項と作品の修正について（必読）

【注意事項】

●更新は亀よりも遅いです。

なかなか時間が取れないことや、私自身文字入力が遅いせいもあり、定期的な更新が出来ません。

平気で2〜3ヵ月更新が無いことが多々ありますので、ご了承のうえ読み進めていただきたいと思います。

長期間、暁での活動（小説・イラスト・つぶやきの投稿）が無い場合でも、作者はツイッターにも生息していますので、そちらに出現しているかどうかもお確認ください。

→@Ellice_novel

『早く更新しろ、このクソ作者！！』とツイッターにてテレパシ―を発信してくだされば、必ず対応いたします。

むしろ作者自身が急かされないと駄目なタイプのため、そう言っていたらとちよっとはスピードアップする……かも？

●この作品に戦闘シーンを期待しないでください。

『戦闘シーン少なくてね？』と友人に突っ込まれたこの小説。

そう言われてしまうほど、この小説に戦闘シーンは少ないです。

また、出てきたとしてもすぐ終わります。

S A Oに戦闘は付き物ですが、この作品は全く当てはまりません。予めご了承ください。

●もともと『シリーズ』に分類されるだろう原作に、「暗い」という要素を何乗もしています。

よって、作者自身が『うわ〜』と引く程暗いです。

たまに明るくしようと頑張っていますが、完全にスベっています。悪寒を感じましたら、すぐさま防寒具を身に付けてください。

●SAO1〜16、プログレッシブ1までを参考に執筆しています。ですが、プログレッシブ2巻以降の設定は完全無視の方向で進めていくつもりです。

※階層の設定等、作品自体に大きな影響を与えないものは取り入れる可能性があります。積極的に使うことはないと思われます。

●作者はアクションゲームが苦手なため、RPG等のゲームは全くプレイいたしません。

MMOやモンスター等、その辺の知識なんて皆無の状態で連載をスタートさせました。

そのため、RPGの常識というものが欠けている可能性があります。

一応この作品を書くにあたって一通りの情報は読んだつもりですが、それでも補えていない部分があるかとも思います。

RPG的にありえない事が作中にありましたら、お手数掛けますが作者までお伝えくださいませ。

●作中にS A Oの設定と食い違うものがあった場合は、オリジナル要素としてスルーしていただくか、作者までお伝えください。

●タイトルに『バレリーナ』と入っていますが、積極的にバレエの要素を出していくつもりはありません。

作者は約9年間バレエをやっていましたが、離れてから時間が経ってしまい、知識の劣化がどうしてもあるからです。

また、バレエについて全く知らない人にも理解してもらうために『どこまで書いて、どれくらい言葉を削っても大丈夫か』という問題にもぶち当たってしまったので、『バレエの描写はなるべく避けよう』と決めました。バレエの事をよく知らない方がほとんどだろうと考えた結果です。予めご了承ください。

バレエ要素に期待してここまで来てくださった方、大変申し訳ございませんでした。

●アンケートについて。

暁にアンケートが実装される前に、作者が別サイトにて作成したアンケートがあります。

時間の経過で割合が変わるかと思っておりますので、15話置き位に小さくQRコードだけ張っておこうか考えています。1台のPCから何度でも回答できるよう設定しておりますので、一度回答した方でも大丈夫です。

また、必須項目はすべて選択式、回答者の所要時間を見るとだいたい3分〜4分くらいで終わることが出来るようです。

「オリジナル要素」

● スキルスロットの増加について。

※原作にてすでに否定されていますが、これを用いて登場人物の設定を組んでしまったので、この作品に限って適用させていただきます。

以下、修正前の文章。

ネット情報で『上限12』としか分かりませんでした。

よって、レベルupの際に増加するスロット数は、5の倍数になった時に1つ増える、という設定にしたいと思います。

また、スキルスロットから外した際は、熟練度は下がらない、という設定もつけたいと思います。

● プレイヤーネームについて。

当たり前かもしれませんが、"同じプレイヤーネームは存在出来ない"という事を、ここで明記させて頂きます。

【作品の修正】

2015年6月25日より作品を非公開にし、大規模な修正のための準備をしていました。

以下より、その説明をしたいと思います。

2014年の時も非公開にして、三話構成だったもの（以下の画像参照）等の話数を変えたりしましたが、今回は第一話からの修正をすることにいたしました。

△i2683—14692▽

ですが、内容を改編するものではなく、あくまで文章構成を修正するものです。具体的な例を上げますと、三点リーダーの数、段落わけ、誤字脱字の修正です。その他読みやすくするために描写の変更をしたり、内容が不足していた箇所の加筆を行っていく予定です。話の大筋は変わりませんので、修正が全て終了した後読み直す必要はありません（※）。

また、話の順序通り（下記の順番）に修正を加えていき、終わったものから公開を再開していきます。

ただ、修正が終わるまでは作品の更新は一切いたしません。申し訳ございません。

けれども、余裕があれば短編のようなものも追加するかもしれません。

※個人的には読み直しが無いように修正をしていたのですが、作者的には読み直しをおすすめする部分がありました。今後も同じような状況になることも考えて、『読み直し推奨』の話には、話数の後に『☆』を付けておこうと思います。

【進捗状況】

※文字数も載せてありますが、スペースや挿絵の埋め込みコード等の文字数も含まれています。

● 本編

プロローグ

変更点：

段落わけ・三点リーダー、誤字等の修正。

一部描写の変更。

第1話 黒猫

変更点：

段落わけ、三点リーダーの修正、描写の変更、加筆等。

文字数／修正前：8877字，修正後：14994字

第2話 ☆ 歓喜する魂

変更点：

段落わけ、三点リーダーの修正、描写の変更、構成の変更、大幅な加筆等。

挿絵を新しく2枚追加。

文字数／修正前：7925字，修正後：23620字。
読み直し推奨。

第3話 狂っているモノは何？

変更点：

段落わけ、三点リーダーの修正、描写の変更等

挿絵：1枚削除

文字数／修正前：6235字，修正後：9893字

第4話☆ 非情なセカイ

変更点：

サブタイトルの変更、話数の変更（全3話）、段落わけ、三点リーダーの修正、描写の変更、構成の変更、大幅な加筆等。

挿絵：削除2枚，追加2枚

文字数／修正前：17397字，修正後：38049字（10835字＋12890字＋14324字）

読み直し推奨。

第5話 壊れたマリオネット

変更点：

サブタイトルの変更、段落わけ、三点リーダーの修正、構成の変更、話数の変更（全2話）等。

挿絵：描き直し1枚有。

文字数／修正前：20376字，修正後：33739字（1263
9字＋21100字）

――以下未着手――

第6話 木漏れ日の下で

第7話 共鳴する心

第8話 緋色の男（前篇）

第9話 緋色の男（後篇）

第10話 哀愁の虹（1）

第11話 哀愁の虹（2）

第12話 哀愁の虹（3）

第13話 哀愁の虹（4） ※サイドストーリー（1）

第14話 哀愁の虹（5） ※サイドストーリー（2）

第15話 哀愁の虹（6） ※サイドストーリー（3）

第16話 哀愁の虹（7） ※サイドストーリー（4）

第17話 哀愁の虹（8） ※サイドストーリー（5）

第18話 哀愁の虹（9） ※サイドストーリー（6）

第19話 哀愁の虹（10） ※サイドストーリー（7）

第20話 哀愁の虹（11） ※サイドストーリー（8）

第21話 哀愁の虹（12） ※サイドストーリー（9）

第22話 哀愁の虹（13）

第23話 哀愁の虹（14）

●過去篇

第一話

第二話

第三話

第四話

第五話

以上、『注意事項と作品の修正について』を終わります。
よろしければプロローグの方へ進んでくださいませ。

2015年8月19日

プロローグ

昔むかしあるところに、黒い翅を持つ美しい蝶がおりました。

その蝶が舞う姿は大変優雅で、可憐で、誰からも愛されている存在でした。

しかし、その右の翅は根本からそがれ、左の翅は使いものにならなくされてしまいました。

そのため、蝶は、二度と舞うことが出来なくなってしまったのです。

すると途端に、蝶のことをある者は避け、またある者は見向きもしなくなりました。

蝶は嘆き、悲しみ、痛みに苦しみながら、生きることをやめました。

悲しいのなら、苦しいのなら、何も感じないようにすればいい。

もうどうしようもないのなら、忘れてしまえばいい。
狂った歯車は、心は、戻らない。

忘れろ。忘れろ。忘れろ。

——…そう、何度も、何度も願っているのに。

どうしても忘れられない。考えてしまう。

だって、今でも好きだと自分自身が訴えているから。

好きなもの程、嫌いになろうとするのはつらいし、苦しい。

“そこ”へ戻りたい。

…戻りたい。戻りたい。戻りたい——…!!

………。

…ああ、いくら願ったって“無駄”なのに。

もう、壊れてしまったんだ。

戻れないなんて、自分自身がよく理解していることのはずなのに。
いくら泣いたって、楽しかったあの日は、輝いていたあの場所は、

もう存在しない。

それを認識してしまっているからこそ、思い出すたび叫んでしま
いそうになる。

———……そうだ。

ぜんぶ、捨ててしまえばいい。

気持ちも、思い出も、何もかも。

そうしないと、私は壊れてしまうだろうから。

理想と幻想と現実の狭間で、粉々に碎けてしまうから。

羽がもげた蝶は、もう舞うどころか、生きることさえ出来ないの
だから。

———存在出来る場所はもう、ないのだから。

捨てろ。

捨てろ。捨てろ———……！！

影も形も無くなってしまいうまで。

存在していたことすら、忘れてしまいうまで。

底が存在し得ない奈落に、残さず捨てろ。

喜びも。

悲しみも。

苦しみも。

……怒りさえ。

ぜんぶ、全部、一緒に。

輝いていたものは、すべて。

これらは、私が持つことが許されなくなったものだから。

……真っ暗な世界。

突き刺さるほど冷たくて、皮膚がめくれる程熱くて、……けれど何も存在していない虚空。

ただひたすらに、黒で塗りつぶされた世界。

……ああ、落ち着く。

もう、何者にも干渉されない。害されない。……視られない。

自分自身でさえ、己の姿が視えない、わからない。

きっと私は、「心」も捨ててしまったから。私は血が通っていない化け物になってしまったから。

だから、もう、やめて。

暗く、冷たい、その瘴地獄の炎のように熱い、……そんな闇だけが広がる空間で、誰かが泣き叫んでいる。

延々と、泣き続けている。

声だってもう枯れているのに、「心」だけ叫んでいる。

それは、ひどく私を不快にさせるもので。

ただそれだけが、落ち着くこの空間で唯一いつまでも逆らっていないで。

ただ、泣いている。

それだけ、……のはずなのに。

もう声は出ていなくても、やけに響く。干渉される。乱される。

……うるさい。だまれ。やめろ。

やめろ!!

もう、何もかもが「無駄」なんだ。……「無駄」なんだよ。
それくらい、あなただって、分かっているはずでしょう——！？

第1話 黒猫

――2009年9月。

男は、車を動かすべくキーを回した。同時にモーターが動きだし、車体全体が小刻みに震え始める。

日はとっくの前に落ちていた。先ほど居た建物の明かりがわずかばかりにこぼれてきているが、車のヘッドライトだけが今は頼りだ。目の前には鬱蒼とした森林だけが広がっていて、人間の介入を拒絶しているようにも感じられてしまう。それがひどく、男を不安にさせた。

すると、そんなものを打ち消すように後部座席のドアが開いた。

同時に見えた人物の姿を確認して、無意識に顔がほころぶ。

「手伝おうか？」

「いいえ、大丈夫。ありがとう」

そう言いながら、今しがたドアを開けた女性――男の妻である彼女は、朗らかに微笑んだ。そして車内に上半身だけを入れ、抱きかかえている子どもを、気を使っているのがありありと分かる程丁寧に、チャイルドシートへ降ろす。彼女はシートベルトが着いたかをしっかりと確かめると反対側へ回り込み、後ろのドアをゆっくりと開け、車内に乗り込んだ。

そんな愛しい妻の姿を目で追いながら口を開く。

「……ずいぶん嬉しそうだね？」

「ええ。だって、2人で描いた夢へまた一步近づいたのよ」

「それもこれも……、"彼"のおかげだな」

「ええ、そうね。まだあんな歳なのに……」

途端憂いと情けなさが入り混じったような光を帯びさせ、妻は目を細める。苦しさが溶け込んだような表情をする妻をルームミラー越しに見た男は、唇を引き締めてすでに装着していたシートベルトを外した。体ごと後ろへ乗り出し、優しく脆いその女性のしっとりとした肌に、自身のゴツゴツとした手を寄せる。視線が絡み合い、もう少しで吐き出す息が掛かってしまいそうだ。

「気にすることない。＂彼＂は強い。良く出来た子だよ」

「＂彼＂は特別な才能を持っているのよ。私たちが思っているほど、簡単な子ではないわ。いつか、何かが起きそうで怖いのよ……」

「……ならば、そうならないように見守ってしよう。この子の成長と一緒に」

強い口調で言い切ると、不安そうに瞳の奥を揺らしながらも彼女はコクリと頷いた。男は微笑み、妻の頬をもう一度撫でると、ちらりと横で眠る息子を見る。

ああ、愛おしい。決して失いたくない。

腹の底から湧き上がる強い思い。グラグラと視界が揺れそうなほど、体中の血液が駆け巡る。

……今度こそ、守るのだ。自らが未熟なせいで犯してしまった罪は、もう消せはしないけれど。

男は妻に悟られぬよう拳を握りしめると、体を前へ戻した。体勢を整え、再びシートベルトを締め———そこでハッと今朝の会話を思い出す。

「そうだ。翠さんはどうなった？」

「ああ、そうそう！ あなたには言っていなかったわね」

彼女の様子を窺いながら話題を変えると、打って変って空気が明るくなった。この切り替えの早さが彼女の良い所だ、と男は苦笑い

を浮かべる。しかし彼女は男の下らない心情に気付く様子は無く、代わりに身に纏う雰囲気を一層優しいものに変え、まるで自分のことのように穏やかな声音で、

「さっき翠の旦那さんからメールが来たのだけれど、無事赤ちゃんが生まれたんですって。双子の可愛い女の子だそうよ」

「良かったじゃないか！ ずいぶん心配していたからな」

「ええ！ 本当によかったわ。……名前ももう決まっているらしくて、上の子が直葉ちゃん、下が紅葉ちゃんですって」

彼女は徐に鞆を探り、携帯電話の画面を開いて寄越してきた。数センチ程の長方形のそこには、2人の赤ん坊の姿が映しだされている。画面の光のせいなのか、それともその神秘的な雰囲気のためなのか、妙に目が痛い。

「それでね、その子たちを見ていたら、……和人も来月で1歳なんだなーって思ってた」

ふわりと口元に笑みを浮かべながら、彼女はチャイルドシートですやすやと気持ちよさそうに眠る息子の頭を撫でる。和人は嬉しそうに、妻の手に顔を摺り寄せた。

男はそんな愛する2人の光景に、心が和むのを感じながら、視線を前へ戻した。そして、アクセルを踏み込む。

「早く、埼玉に戻ろうな」

「はい。早く、翠の幸せそうな顔が見たいわ」

その返答に、男は僅かに首を縦に振った。まあ、少しの異変も見逃すまいと、フロントガラスの向こう側を睨むように見ながらだが。そして、もうすぐ下り坂だな、なんて思いつつブレーキを踏み込んだ。――つもりだった。

「――！？」

すぐその異変に気が付いた。ガラスの向こう側ではない、……車自体に。

しかし、それを否定すべく何度もブレーキを踏む。ガタガタと鈍い音が響いているが、構わず同じ動作を何度も、何度もする。

すると、後部座席に座る彼女も異変に気が付いたようで、「どうしたの!？」と悲鳴に近い声をあげた。けれども、それに応える余裕はない。

スピードは一向に変わらない。むしろ、坂に入ったせいか、少しずつ速くなっていく。

それでも、諦めずに踏む。意味がないと分かりつつも、サイドブレーキを思いきり引いた。

———やっど。

やっど、なんだ。

こんなところで……。

目の前に、カーブが見えた。その瞬間、思考が弾け飛ぶ。

白で塗りつぶされてしまう。

———そして、そんな最中でも頭に浮かぶのは、和人と、"もう1人の我が子"の姿だった……。

△ i 6 0 7 | 1 4 6 9 2 ∇

愚者よ、後ろを振り返ってはならない

たとえ、己の身を滅ぼす結果になろうとも

――2018年 12月。

日本最大の芸術専門の大学。その隣には、付属の芸術教室があり、バレエや演劇、歌唱、絵画などを部門別に習うことが出来る。

そこに、私――桐ヶ谷紅葉は通っている。

私はバレエと演劇部門を掛け持ちしているのだが、今日も大人と混じって――別に小学生のみのクラスもあるのだが――バレエのレッスンをしていた。

そして今、来年の7月にある発表会での役が発表されたのだが――少し、……否、かなり気まずい。

「――紅葉ちゃんがオデット。いい？異論はないですよね？」

「……まあ、小学3年生にもかかわらず、このクラスで一番上手で

すし」

——このクラス。

そう、ここは私以外全員が大人。しかも、将来を有望視されている人たちばかりだ。

その中に、私一人、小学生。

それはとても不思議な光景で、なんで私だけ、と口には出さずとも思っている。そして、天地がひっくりかえったとしても、この空間で浮いた存在であることは絶対に変わらない、とも理解している。ちなみにオデットとは、『白鳥の湖』に出でくる、魔法によって白鳥に変えられてしまったお姫様のこと。

この役は、オディールという役との1人2役をしなければいけない、とても難しい役なのだ。……単刀直入に、簡潔に言ってしまうば——主人公になる。

だから、何度でも言おう。

なんで私なの、と。

普通なら、小学生と大人では出来るはずがないのだ。身長差があり過ぎるのだから。

けれども、幸か不幸か私は同年代の子たちよりも頭一つ分以上身長が高い。1つ年上の兄よりもちょっと高いのだ。よって一緒に舞台の上に立っていても、ギリギリ通用してしまうのだった。

……けれど、問題はそこではないのだ。

この役は、非常に難しい役なはずなのだ。とても高度なテクニックを要求されるから、到底私みたいな子どもが出来るはずがない。本来なら、私よりずっと経験のある人がするべきなのに……。

「じゃあ、これでレッスンは終わりです」

私が、拒めるわけがない。

そんな意味を込めながら視線を先生に送っていると、いつのまに

か話がまとまっていたようで、その一声でレッスン終了になってしまった。

私は部屋の隅に畳んで置いていたカーディガンを取りに行こうと、大人たちの波に逆らって歩く。するとその途中で、立ち止まって話す2人の女性とすれ違った。

「———あの子、演劇部門の方でも主役になったそうよ」

ドクン。心臓が飛び上がった。

グラグラと地面が揺れた気がして、思わず歩みが止まる。……しかし、その間も容赦なく会話は続いていく。

「ええ〜？ 本当？」

「うんうん、本当。そろそろ芸能界からお声が掛かるんじゃないかって噂もあるし」

「まったく———恐ろしい子ね」

「本当ねえ。……しかも、あの子いくつ教室に通っていると思う？」
片方の女性が立ちすくむ私をチラリと見やる。その口元が弧を描いた。

……ああ、近くにいろのを分かっているのに会話しているのだ。
わざと聞こえるように話して、なんて嫌らしい。

「え……、バレエと演劇だけじゃないの？」

「それが違うみたいなのよね〜。絵画とか、あと弓道と剣道も他の教室で習っているみたい」

「ええー、嘘おー。じゃあ、いつ勉強しているの？ 頭も凄く良いって噂でしょ」

「それはアレよ。『天才少女』だからねえ」

「まさに文武両道ってことかあ。あーあ、私も才能が欲しかったあ」

「リノは今のままでも十分素敵だよ。『普通』が一番！」

「そうね〜！」

きやらきやらと、笑い声が耳を劈く。

私は好きでやっているのに。どうしてこんな事を言われなければいけないのだ。

こうやって疎まれ、あるいはその逆に異常にすり寄ってくる人たちもいる。しかも厄介なことに、全員に当てはまるものは上辺だけの好意だ。

こうやって自分のプライドが傷つけられれば、わざと聞こえるように嫌味を言うくせに、普段は優しい大人の仮面を身に着けている。いっそ女優や俳優にでもなってしまえばいいのに。きっとお似合いだ。

そう内心毒を吐いてしまうくらい、私の周りにいる人たちはみんな、気持ちの悪い好意を顔に張り付けている。

芸術教室の人たちだけじゃない。クラスの子も、学校の先生も、近所の人たちも。

けれど私は、そんなものはいらない。

私は、「普通」なのだから。

……「普通」、なのに。

————他の同い年の子達と、何にも変わらないのに！！

石のような足を引きずりながら歩き出した。まるで背後の笑い声に追い立てられているみたい。……私は、何も悪くはないはずなのに。

鬱々とした気分のまま教室の扉を開けて廊下に出た。カーディガンの上から、ヒヤリとした空気が肌を刺す。なんとなく、この空間までもが自分の敵のような気がしてきた。圧倒的な破壊力を持った強烈で鋭い竜巻が、私の胸に穴を空けて行き、ぽっかりと空いたそ

ここからドロドロと液体が漏れ出て行く。突き抜ける痛みと強い漂流感に、ぎゅっと両手を握りしめた。顔の筋肉が強張り、あまりの空虚さに足を進めることが出来ない。足が樹の幹になったみたいだ。筋肉が仕事を忘れたと言わんばかりに動かなかった。

濁流が治まるのをただひたすらに耐えようと、私は背中を丸める。

——しかしその時、打ち消すように肩に軽い衝撃があった。

「もーみじっ」

「あ……、待っていてくれたの？」

サッと、目の前の景色が晴れた気がした。それはもう、太陽の光が差し込んできたみたいに。体の硬直が嘘のように、すうっと消える。

……私の周りには嘘を口ウで固めたような人たちばかりだけれど、こうして純粋な好意を向けてくれる人もいるんだ。

私は、胸がじんわりと温かくなるのをハッキリと感じながら、目の前の人物——如月幸歌をまじまじとみた。

幸歌は、笑窪がよく似合う笑顔を浮かべながら、

「って言っても、私もさっきレッスン終わったばかりだよ？」
と、イタズラっぽく言った。

私は、その笑顔に釣られるようにして笑う。

幸歌は、私より3つ年上の小学6年生にもかかわらず、対等に接してくれる。親友だと、胸を張ってはっきりと宣言できる存在でもあるだろう。

彼女は少し前まではバレエ部門にも入っていたので、そのつながりで仲が良くなった。今でこそ声楽部門の方に専念するためバレエはやめてしまっているが、関係が崩れたわけではない。

むしろつながっている糸が、太く、強くなったようだ。

そして、今日もいつものように、レッスン終わりで疲れたと悲鳴を上げている体をなだめながら、2人で廊下を歩く。

「幸歌、発表会のやつ、ソロに選ばれたんだって？」

「あーうん。……そうなんだけど、ね……」

めずらしく歯切れの悪い言葉に、私は首をかしげた。

幸歌の表情を見れば、眉根を寄せ、どこか困ったような顔をしている。

しかし、唇を1度ギュッと引き締めると、覚悟を決めました、と言わんばかりの雰囲気ですぐ口を開いた。

「実は私、断っちゃった」

「へ……っ、ええっ!？」

イタズラを告白するみたいで軽い調子でとんでもない事を告げられ、思わず大声を上げた。廊下で反響し前を歩く人たちが振り返るが、構ってなどいられない。

————全く予想していなかった。

断るなんて、そんな。あんなに発表会を楽しみにしていたのに!! 衝撃的な事に口をあぐりと開け棒立ちしていると、依然として何でもないような涼しい顔をしている幸歌が、早口にまくし立てるような口調でさらなる爆弾を投下する。

「あはは、そんな驚かないですよ。紅葉には話してなかったけど、私来年引越すんだ。だから、来年の7月なんてもうここにはいないの」

……は？

続けざまに大爆発が起きて、私の頭が上手く言葉の意味を拾ってくれなくなってしまった。自然と眉間に皺が寄って行き、つい問い詰めるかのようなキツイ物言いと固い声になる。

「ねえ、幸歌。もう一度言ってよ。私、聞こえなかったみたい」

「ええ、この距離で聞こえないの？ ……もう、仕方がないなあ。本当は、そんな何度も言いたくないのに」

幸歌ののんびりとした話し方と柔らかな声音が、今日ほど苛立たく思ったことはない。……けれど、私を焦れさせていることくらい幸歌なら気付いているだろうに、彼女は決して笑顔を崩さなかった。

そして、その優しい微笑みを湛えたまま、ひどく残酷で決定的な一言を私に突き付ける。

「引越すの、私。もうこの教室には通えないような、遠いところへ」

深く太いため息が意図せずとも口からこぼれた。目を固くつぶり、手の平に爪が刺さるくらい両手を握りしめる。

「……どうして、もっと早く言ってくれなかったの？ 急に決まったことではないんでしょ」

……私に言う時間なら、たっぷりあったはずなのに。

さっき温まったはずの体が急速に冷え込んでいく。塩を入れた氷水を頭から被ったみたいだ。さーっと、どんどん、どんどん冷えていく。痛いくらいの寒さに全身が包まれる。

「ごめんね。……でも、別に意地悪をしてたわけじゃないよ。今年が終わるまでには、ちゃんと伝えようと思ってた」

「……だけど！」

「あのね、紅葉。私だって、離れたくないよ。紅葉が大好きなんだよ」

切なげな幸歌の表情が辛い。私は、そんな顔をさせたいわけじゃないのに。耐え切れなくなって、私は目を逸らした。

でも、すぐさま私の頬に差し伸べられた温かい手が、それを許さ

ない。

「……っ」

「私はずっと、紅葉の親友だよ。それは何があっても絶対変わらない。……だから、紅葉のことを遠く離れても応援するよ。ずっと、ずっと応援しているよ。あなたならきっと、素晴らしいバレリーナになれるもん」

———だから、負けないで。

そう言って、幸歌は儚く笑った。

*

「う~~~~っ。さ、寒ーいっ」

「もー、寒い寒いなんて暗示かけるから、ほんとに寒くなっちゃうんだよ」

「……わ、わかってるもん！でも、実際、さむいでしょっ」

「い、言わないでっ」

さすが12月。まだ6時過ぎだというのに、この寒さ。加えて、あたりはもう真っ暗だ。

1月にもなればさらに寒くなると思うと、恐ろしい。雪は降るのだろうか。

——と、そんなことを思いつつ隣の幸歌を盗み見る。彼女は、マフラーに顔をうずめ、手袋をはめた手を擦っていた。

……あのあと、無理やりに話題は変えられてしまって、それ以上聞くことは出来なかった。

言ってやりたいことは山ほどあるけれど、もう決まってしまっていることならば仕方がないのだ。私たち子どもは、大人に対してあまりに無力だから。だから、もう覆せないことにこだわるよりも、幸歌と過ごす時間一分一秒を大切に、少しでも楽しい日々を過ごす方がいい。

幸歌が遠くへ行ってしまいう前に、何か出来ることはないのだろうか。唯一無二の親友に、何か残せるものはないのか。

……それに、応援すると言ってくれたのに、私は何も言葉を返せていない……。

まだまだ長く続くと思っていた日常に急に終わりを告げられて、思考は絡んで衝突して落下して……、まるでジェットコースターに乗っているみたいにモミクチャだ。ぐるんぐると回って、あちこち体が振り回されて、内臓がフワリと浮かぶ。ありえない、もうやめてくれと、いたる所で悲鳴が上がった。

ちらりと幸歌の横顔を見る。彼女は全く気にしていないみたいだ。どうして、そんな風にいられるんだろう。私は今も、辺りを駆けずり回って、叫んで、地団太を踏みたい衝動を抑えているのに。

何だか悔しくなってきた、幸歌をじいっと見詰める。とことん見詰める。テレパシーを送信し始める。気付け気付けと念じながら、眉を寄せて幸歌の頬に穴が開きそうな程見詰める。

すると、ふいに幸歌がこちらを見た。私が送信したテレパシーを受信したとも言うのか。反射的に幸歌から視線を外す。苦笑する

ような気配が微かにあった。

バクバクと、心臓がうるさい。黙っている、幸歌に聞こえてしま
う。

「あー、早く帰りたいねー」

「そうだね。寒いもん」

さっきとそう変わらない単語を言い合い、お互いの顔を見つめ合
って笑う。手をこすり合わせ、一方的に体を襲う寒さに耐えた。

私は背後を振り返りため息をつく。白い息がふわっと広がって消
えた。

実は、教室の建物の玄関先からは一歩も動いてはいなかったりす
る。

電車に乗ってこの教室に通っている人もいるくらいに、各所から
集まっているのだけれど、幸歌とは偶然にも帰る方向が全く同じだ。
……そして、その「偶然」に当てはまる人がもう一人いるのだ。

すると、バタバタと五月蠅い足音が近づいてくる。幸歌と同時に
振り返った。一つの人影が、私たちに突進してくる。

「————遅れてごめんっ」

「遅いよ、伸一！」

開口一番、謝罪の言葉を口にしながら駆けてきた私と同じ歳の
男の子————長田伸一に言った。

彼はゲーム好きという一面を持ちながらもバレエ部門に通う、ち
よっと変わった子だ。しかも、学校では同じクラス。

本当に、偶然って恐ろしい。

「だから、ごめんってば。紅葉ちゃんに頼まれてたやつ、ラフ画ま
でだけ描いたんだよ」

「……もう！ 明日学校でいいよって言ったじゃん！」

「……ラフ画？」

すると、それまでの会話を聞いていた幸歌が、首を傾げながら聞いてきた。寒いので、歩きながら説明を入れる。

「うん。……私、ちょっと前に、絵画コンクールで入賞したでしょ？」

「あーあの、全国はやつ？たしか、最優秀賞取ったよね」

「……ま、まあ、それは置いておいて……。――それでね、なんかその時の絵が目に残ったとかで、茅場晶彦……って言ったかな。その人が、今構想を練っているゲームに出すモンスターのデザイン案を30体くれないかって」

「さ、30！？……あ、それで長田君に頼んだんだ。ゲーム好きだもんね」

「う、うん」

私と幸歌の会話に自分の名前が出てきた所為か、伸一は少しどぎまぎしつとも相槌を入れた。

「そ。伸一に、5体頼んだ。それで、あと1体なんだけど――」

「へえ……それは大変。――あれ？」

ふいに、幸歌が立ち止まる。私と伸一も釣られて足を止め、何だろうと顔を見合わせる。すると、微かに人の泣き声が――、うん、人ではない。

これは……、猫？

「あ、あれだ！」

伸一が指差したと思ったら、急に走り出した。私たちも、慌てて追う形で走り出す。

真っ暗な道には、定期的に街灯があるのだが、その中の一つに、ガムテープで閉ざされた段ボール箱があった。側面には、ありきたりな『拾ってください』の文字。

鳴き声の発生源は、たしかにこの中だ。

最初に走り出したのは伸一にもかかわらず、手を伸ばしたのは幸歌だ。……そういえば、伸一は猫が苦手だったような気がする。

「……わぁ、かわいい」

ガムテープに手をかけ、はがした幸歌が漏らす。私が覗き込むと、そこには――、

「黒猫」

……黒猫。なんて、ふきつな。

そう思ったのは私だけではなかったらしい。伸一も、少し眉根を寄せている。けれど、幸歌は全く気にしていないようで、

「かわいそうに。こんな、寒いところで」

風に浚われてしまいそうな程小さい声でそう呟いたかと思うと、ダンボール箱で丸くなる黒猫を抱きかかえて立ち上がった。そして、私たちを見てにっこりと笑う。

「この子、私の家で飼うよ。ちょうど、猫ほしいねって、家族と話していたから」

「……え、でも」

「黒猫って、不幸を呼ぶとか言われてるけど、私は違うと思うんだ。実際、黒い蝶には幸せもらったし。私の名前に「幸」ついてるし」

……理由がよくわからない。

そもそも、黒い蝶なんて……、と思ってしまうけれど、ふわふわと幸歌が笑っているのでもよくなる。

私は黒猫を指差した。

「じゃあ、名前、「リュヌ」ってどう？「Lune」って書いて、フランス語でそう読むの。「月」って意味だよ」

「月？」

「うん。その子、完全に真っ黒じゃないよ。…ほら、右側のおなかあたり。三日月みたいな白い模様が入ってる」

「ほんとだ」

幸歌は猫の体を器用にずらし、覗き見る。そして、また笑った。

——その笑顔を見て、ひらめいた。

「あ……。さっきのモンスター案、残りの一体、この子モデルにしようかな」

ポロリと口から出る。それを聞いた2人は、「え」と小さく声を上げた。私は2人のその反応に、眉を八の字にする。

「……だめ、かな」

「う、ううん。いいと思うよ。てゆうか、嬉しい。……倒されるのは、かわいそうだけど」

慌てたように片手を左右に振りながら言う幸歌に、あはは、と笑ってから、

「ありがと。さっそく、家に帰ったら頑張るよ」

そう宣言してから後ろ向きに軽くスキップする。そんな私に、幸歌は笑みを浮かべながら、

「ところで、そのゲームの名前は？」

そう問われ、足を一旦止め、記憶を探る。たしか、依頼内容が書かれたプリントに、**「仮」**となっていた名前があったはずだ。———と思いながら記憶を引っ掻き回すと、意外にも早く、引き出しから言葉が出てきた。

「**「ソードアート・オンライン」**、……だったかな」

*

「じゃあね、紅葉」

「うん」

私の家の前で、いつも私たちは別れる。幸歌の家は、もう少し歩いた先にあるからだ。

ちなみに、伸一とは少し手前で別れた。

「……ねえ、幸歌。さっきの黒猫のモンスター、 $\wedge$ ノワール $\vee$ って名前、どう？これもフランス語で「黒」って意味なんだけど。――

――希望があれば、名前もつけていいんだって」

「黒？」

「うん。……なんか、あの黒猫見てたら、兄さんの好きな色って黒だなーって思ってた」

兄さん――和人のことだ。黒が好きなのか、いつもダーク系の服を着ている。しかも、私の髪の色と同じ漆黒の髪と瞳のせいで相乗効果が働き、「黒」というイメージがどうしても強い。

そんな理由でいったのだが、幸歌は、なぜかクスクスと笑いだす。

「ほんと、お兄さんっこだねー。今度紹介してよ。顔、かわいいんでしょ」

「それ、本人気にしてるから言わないであげて……」

「あはは、気を付けます。――えーと、いいんじゃない？かわいいし、おもしろいし」

私はそれを聞いて、「うん」と頷く。

そして——幸歌の左腕を、掴んだ。幸歌がビクリと肩を揺らし、目を見開いている。

けれど、言うなら今しかないから。少し油断をしていた、今しか。私は、彼女の黒い瞳をしっかりと捕え、そして声を潜めていった。

「……さっき、幸歌は「応援してる」って言ってくれた。なら、私は「約束」する。——私、フランスにあるコンセルヴァトワールに入る。それで、絶対世界一素敵なバレリーナになるよ」

それに、おじいちゃんが許してくれたんだし、といたずらっぽく付け足すと、いつの間にか真剣な表情になっていた幸歌が口元に笑みを作り、表情が柔らかくなった。

「だから幸歌も、歌やめないでよね。私、幸歌の歌大好きなんだから。……でも、私が独り占めするのにはもったいないからさ。……がんばってよ？」

「……うん。誰かを幸せに出来る唄が歌えるように、頑張る」

幸歌は、猫を落とさないようにしながら、器用に手袋から手を抜き取る。そして、手袋をしていたのに、氷をさわっているのかと錯覚するほど冷たい指先を、私の指を絡めた。

「「約束」」

2人の声が合わさったので思わず吹き出すと、幸歌の腕の中にいる猫が、「にゃお」と小さく鳴いた。

まるで、この猫までもが指切りをしているように。

*

私は荷物を部屋に放り投げたあと、道場の方へ向う。

少し開いた扉の隙間からこぼれてくる人工的な光と、聞き慣れた声に安堵した。

中からは「せいっ」だとか、「はっ」という、頑張っているということがハッキリと伝わってくる覇気のある声がしている。私は邪魔してはいけないなと思いつつ中に滑り込むように入った。

「……どうしょ」

思わずそんな言葉がポツリと漏れる。入ったのはいいものの、本当に、どうすればいいか考えていなかった。

右手をあてもなくブラブラする、というのを何回か繰り返す。しかし、いつまでもこうしているわけにはいかないので、意を決して口を開いた。

「————す、スグ？」

「……え、モミ？」

直ぐに動きを止めたスグが、クルリとした大きめ目をこちらに向けた。そして、数回パチパチと音がしそうな程目を瞬かせ——ハッとしたような表情になる。

「も、モミが帰って来てるってことは……、て、わあああ！ もう7時！？ な、なんで誰も教えてくれなかったの！」

「あ、うーん……。多分、お母さんたち、映画観てるからじゃないかな。忘れてる、とか」

「あの録画してたやつ！？ あたし、楽しみにしてたのに！」

今にも木刀でさえ放り投げそうな勢いで、スグが詰め寄ってきた。

その剣幕に私は体がのけぞる。口元が引きつりそうになるのをなんとか堪えながら、両手で軽くスグの体を押し返した。

「……う、うん。あ、じゃあ、私が消さないでって、言ってくるよ」

「うん、お願い！ さっさと片付けて、着替えた後そっちに行くから！」

そう言い終わるや否や、パッと身をひるがえしバタバタと駆けて行った。

「……あ」

ドタツという盛大な音とともに、こけた。

*

スグは一応、私の双子の姉だ。けれど、2人の間では、さほど上だの下だのを気にしていない。

——生まれ落ちた時間の差はほんの数十分。

違うのはそれだけで、あとは何も変わらない。

今まで過ごした時間、日々は同じだ。

だからこそ、姉だとかは意識出来ない。むしろ、そうやって縛りをつけてしまう方が息苦しく感じてしまうかもしれない。

そんなのことをスグと生真面目に話したことはないけれど、多分、考えは一緒だと思う。

実際、スグがそのことを言ってきたことはないし。……いや、小さい頃から「姉」なんて単語を使って話しかけたことはないから、当たり前すぎて、思いついてすらいないかもしれない。

私とスグは、本当に双子なのかと思うほど、性格が見事に正反対だ。スグを「動」と表すなら、私は「静」。

……といっても、フォローはしたりされたりで——特にイタズラをしでかした時なんかは、息はピッタリだ。

……うん、やっぱり、私たちは、いくら正反対でも、根は一緒なのかもしれない。

ふっと口元が緩んだのが、自分でもわかった。慌てて気持ちを入れ直し、引き締める。

——と、いつのまにか居間の前まで来ていた。考えながら歩いてきたため、周りのことを確認するのがおろそかになっていたのかもしれない。

内心ヒヤヒヤとしながらも、ドアの取っ手に手をのぼし——そこで、わずかに隙間があることに気が付いた。何となく、そうっと押し広げ、室内を覗き込む。

「え……、兄さん？」

どうしたんだろう。兄さんがソファに座る両親の後ろに立っている。その表情は見たことがないくらいに硬く、唇はきつく引き結ばれていた。両親は背後に立つ兄さんに気付いている様子は無い。

そのただならぬ雰囲気、私は自然と、半歩下がった。心臓がぎゅっと驚掴みされたみたいに息苦しくなる。

——ここに、居てはいけない。この先の光景を、見てはいけない。

頭のなかで、私がそう叫んでいる。

警笛を鳴らしている。

今すぐ踵をかえして、とにかくここを離れたい。

……そう思っているのに——これ以上足が動かない。まるで足が、強力な接着剤によって床へくっつけられてしまったかのように。

さっきと同じだ。大きな孤立感を感じて足が張り付いてしまった時と。……けれど決定的に違うのは、その時よりも深くて重い。

……底なしの沼に足をつっ込んでしまったみたいだ。逸る気持ち、思考を揺さぶる。

早く、早く！　ここから離れなきゃ！

そう思っているのに、足は床とピッタリと張り付いている。目は縫い止められているかのように両親と兄さんの姿から外すことが出来ない。手と声は封じられ、耳は今にも兄さんの呼吸音が聞こえてしまいそうなほど敏感になっている。

……体のすべての神経が、目の前の異質な空間に完全に飲み込まれてしまっていた。

ズブズブと体が沼へ沈んでいき、足も腕も絡め捕られて抜け出すことなど叶わない。

——だから、聞いてしまった。

兄さんがそれを口にした瞬間を、頭に焼き付けてしまった。

「オレの、本当の両親のことを教えてほしい」

「……え？」

吐息のように掠れた音が、自分の口から漏れ出る。

———本当の、両親。

私はその意味を、すぐに理解してしまった。

呼吸が浅く速くなっていく。息がしにくい。手で首を圧迫されて、気道が塞がれているみたいだ。キーンという音が耳元で響く。さあーと、身震いする冷気が全身を一気に撫でていった。

けれどそれに反して、自分の心臓の音が聞こえそうなほど高鳴り、体温がどんどん上がっていく。

———いや。やめて。それ以上、言わないで。

けれど、音になっていない声なんて届くわけがなく。

次々と、耳を塞いでしまいたくなるような真実が兄さんに——

ー、否、兄さんと私に告げられていく。世界を遮断してしまいたい。

「直葉と紅葉は、あなたの従妹よ。……和人」

イトコ。

それはつまり、私たちは———。

……ああ、「兄さん」って誰なんだろう。

ぐわんぐわんと頭の中が揺れていて、もう、何が正しいかわからない。

———私の中で、何かが壊れた。

そう、直感的に認識した。

目の前が真っ暗になる。視界ごとグラリと揺れ、次の瞬間には膝

に痛みが走った。

「……あ」

やけにかすれた声。

それが自分のものと認識するのに、時間がかかった。私が3人の前に転がり出てしまったという事実に気が付くのに。

私はチカチカと光って眩みそうになる視界の中で、何とか力の抜けた足を引きずった。見上げた先で “兄さん” の瞳を捕える。

「……にい、さ……」

「……ッ」

「ねえ、にいさん……？」

否定してほしい、という消え入りそうな希望を抱きながら覗いた2つの光は異常に暗く、『これが現実だ』と、言葉はないのにもかかわらず言われているようで。

「にいさん……、兄さん、お願い……ッ」

嘘だよ、って言うって。兄さんが言うなら、信じられるから。明日には綺麗に忘れてしまうから！！

私はふらつく両足を手近な椅子の背を持つことで支え、立ち上がる。痛ましそうに顔を歪める両親と、振り返った体勢のまま目を見開いて顔を青ざめさせる兄さん。

……認めたくない。こんなの、認めたくない！！

「——ね、兄さん。今日ね、来年の発表会の役が発表されたんだよ」

……笑って。

「ほらっ、兄さんも毎年楽しみにしてくれてるでしょ？ 発表会が終わるたびに、“早くモミのバレエが観たいな”なんて言ってる……」

それで私は決まって、“兄さんは気が早いんだから”って返すん

だ。

「また、観に来てくれるよね？　いつもそうだもんね？」

ねえ、笑ってよ。

いつもみたいに、笑ってよ！！

「……………にいさ……………、どうして……………」

どうして、笑って『発表会が楽しみだな』って言ってくれないの？

「……………う、う……………」

いつの間にか、双眼からボロボロと涙がこぼれていた。止まらな
い。けれど、拭おうとは思えなかった。

私は滲む視界の端に居るお母さんに顔を向け、

「……………ね、ねえ、お母さん。今日の夜ご飯は何だっけ」

「も、紅葉……………」

「あ、あれー？　朝確かに聞いたはずんだけどな、忘れちゃった」
今日の朝の出来事を思い出す。

いつも通り目覚まし時計で目を覚まして、隣のベッドで寝るスグ
を揺り起こす。部屋を出たところで、大きな欠伸をしながら部屋か
ら出てきた兄さんと鉢合わせして。そのまま一緒にリビングに行っ
て、久しぶりに海外から帰ってきたお父さんと朝食を食べて。今日
は休みだからと微笑むお母さんに見送られて登校する……………。

……………変わらない朝だった。普通の朝だった。

……………確かに今朝は幸せな日常があって、兄さんは笑っていた
のに。

「あっ、思い出した！　エビフライだったよね、お母さん！」

「……………」

「ねえねえ、何やってるの。もうすぐ、スグが来ちゃうよ。早く夜
ご飯の支度しようよ」

……………ほら、兄さん。笑って。

「発表会の話もしたいんだからさ！」

視界が霞む。唇は震えていた。膝は今にも崩れ落ちてしまいそう。でも、私頑張るから。

我慢するから……。

「……も、もうー、どうして黙ってるのー？」

ボロボロ、ボロボロ。

口の中に涙が入ってきちゃったよ。しょっぱいなー。

「お、おかしいよ、なんで何も言わないの……？」

———本当におかしいのは。

「……ひっく、……う、なんで、なんで……」

崩れ去った嘘に、まだ縋っている私。

「……じゃ、じゃあさ、私もう一回リビングに入って来るよ。お母さんたちが楽しそうに話しているリビングに、もう一回入ってくるからさ」

お父さんとお母さんが映画を観ていて、その真ん中で兄さんが笑っていて。そんな明るいリビングに私が入って行く。『ただいま』、『おかえり』って言葉を交わして、戻ってきたスグと夜ご飯にするんだ。

———ね、これで元通り。

幸せな時間に戻れるよ。

「い、良い考えでしょ？ そうだよね……？」

誰も反応しなかった。お父さんも、兄さんも、茫然と私を見詰めている。お母さんといったら、口元を押さえてすすり泣いていた。

……どうしてだろう？

———あ、そっか。私がこんな顔をしているからだね。

だったらこの涙を止めなくちゃ。

でも、変だな。涙の止め方が分からないよ。

「……う、……うっ」

何故だろう。笑おうとしているのに、喉から引きつった音が漏れる。

「……にいさん……、兄さん。……私は、私たちは……」

私は笑う。精一杯笑う。

「私たちは、仲の良い兄妹だね？」

兄さんが喉を詰まらせる音が、シンと静まり返るリビングの中心に大きく聞こえた。私は何とか氣力を振り絞って、血の氣が引いた顔で目だけをこちらに寄越す兄さんを見詰める。その噛み締められた唇は細かく震え、何かをためらっているように見えた。

「……にい、さん？」

どくん、と心臓がいやに大きく打った。兄さんが、口を開く。

「なあ……」

そして――――、

△ i 2 6 4 1 | 1 4 6 9 2 ∇

「モミ……、――――紅葉」

『ごめん』、そう声にはならない言葉の後、そっと、けれども冷酷に、――――目がそらされた。

――――目ガ、ソラサレタ。

ガラガラと壊れていく音が、明瞭に聞こえた気がした。

「――――あ、……ああ……っ、あああああああああああああ
ああ――！」

気づいた時には、玄関のドアを思い切り開け放っていた。鈍く刺さる外の冷たい風も、どこか遠く感じられる。

「モミ……ッ!？」

聞き慣れた女の子の声が聞こえたけれど、誰だか分からない。

……分からない。分かりたくない。もう何も受け付けたくない。私の中でグルグル渦巻く全てのものが、ぼんやりと靄がかかってしまっていた。目や耳に入ってくる情報を、体が拒絶する。

けれど、そんな中でも射抜くような光だけが、妙にハッキリして
いて。

何度目かの声が耳に届いた時、ぼんやりと、それを認識した。

———けたたましいクラクションと、ブレーキの音を。

「……あ」

———世界一素敵なバレリーナになるよ。

そう言った自分の声が、やけに鮮明に蘇って。
同時に、視界は黒で塗りつぶされた。

∧ i 6 1 4 | 1 4 6 9 2 ∨

第2話 歓喜する魂

—————2022年11月。

最近のテレビは、もうすぐ発売のゲーム—————ソードアクト・オンラインの話題で持ち切りだ。

……まあいつもの私なら、ゲームなんて無視するだろう。興味なし、と。

けれど、4年前のあの日、私は変わった。……否、変わらざるを得なかった。

—————左足の自由と、右下肢。

それがあの事故で失ったもの。

ただ、右足は神経信号こそは守られたため、今は金属製の義足を装着している。左足に関しては麻痺が残り、動かすことも出来ない。

……これは、バレリーナとしての死を意味する。

今の私には、バレエでのポジションの1番—————両足のかかとの裏どうしをつけ、足の付け根から左右に開いて立つ立ち方—————さえ出来ないのだから。基本中の基本あり、バレエをやっていない人でも出来ることなのにも関わらず。

それでももしかしたら、手の振りだけでも何か表現出来るのではないかと、最初は色々と試していた。

けれど、何かが違う。私がやりたいのは、もっと、もっと全身を使う美しいバレエ。

左足に関してはリハビリ次第で日常生活で支障が無いくらいには

回復するだろうと、医者には言われた。だが、それでは意味が無いのだ。

……左足が動かせるようになって、義足を装着したとしても、あの頃には戻れない。

あの頃のように踊れない。

ならば、私が存在を許されている場所はどこなのだろう。

「天才少女」であることを望んでいた周囲の者は離れていく。煩わしいくらいに張り付いてきた学校や教室の生徒は影で噂話をしたり、見下すようになった。両親は一見変わっていないように見えても、ふとした瞬間に腫物を扱うように接する。……「天才少女」にポジションを奪われていた人たちは同情するように泣いていたが、その裏では一体どんな声で笑っているのだろう。

……私は悟った。

もう、あの日のように舞うことは出来ない……、つまり、私には何も残っていないと。価値など無いんだと。

バレリーナとしても死んだけれども、あの日、「桐ヶ谷紅葉」も死んだのだ、と。

その事実、あの事故の前と後の周囲の温度差を比べたら火を見るよりも明らかだった。

だから、足掻くことをやめてしまった。……いや、正確に言えば、やる気力すら湧かなかったと言う方が正しいかもしれない。

……それはバレエだけではなく、絵も、演劇も、弓道も。かつての「紅葉」が好きだったものすべてのことに対して、以前のような高揚感が無くなっていた。

頑張るだけ、願うだけ「無駄」だと思ってしまったから。

そして一度気づいてしまうと、延々と意味の無い時間が続く希薄

な毎日になった。

何をして、どこにいても。

いつも『こうじゃない、何かが違う』と誰かが泣き叫んでいた。
鬱陶しいくらいに、いつも、いつも。……その正体はよく視えな
いけれど。

ふっと、幼い頃によく聴いた童謡が頭をよぎる。まるで池に落ち
たドングリみたいだ。山に帰りたいと泣いて、戻れるはずのない場
所を望んだドングリみたいだ。

「……はあ」

私は大きなため息をついた。深く、長く、細く。

——あれから4年の月日が流れた。

残酷で、空虚な、宙に漂うような日々が続いて、こんな所まで来
ていた。

ただまあ、車椅子で過ごさなければいけない生活になったとはい
え、部屋に引きこもったりはしなかった。というのも、事故後はス
グに無理やり連れ出されるようになったのだ。

『色とりどりの景色を見て、空気を吸って、今しか出来ない経験を
しようよ！ ずっと家に居たらさ、腐っちゃうよ。あたしがモミの
足の代わりになるから！！』

そう言って、スグは私の車椅子を押した。当時小学4年生になっ
たばかりの彼女にそれは重かっただろうに、両親の反対を押し切っ
て、一步一步、ゆっくりと街の中を進んだ。

事故が起きた日は身が凍るんじゃないかと危惧するほど寒かった

というのに、もう外は青々とした葉が木々を彩っていた。

「きっと、もうすぐ梅雨になるね。嫌だなあ」

「……そう、だね」

「もう、もっと楽しもうよ！ ……あ、ねえねえ、ゴールドエンウ
イークはどこに行く？」

「……………」

私は俯いて、自分の手先を見る。自然と両の太ももが視界に入ってきた。右足の質量はスカートの上から全く感じられなくて、見る度に現実を突きつけられる。

思わず視界を外したけれど、今度は目の居場所がなくなった。

しかし、まるで私の思考までも読み取ったかのようなタイミングで、

「モミ、見てみて！ 綺麗な花がいっぱい咲いてるよー！！」

スグの弾けるような声に釣られて顔を上げた。目の前に白い花が飛び込んでくる。

「あの花、名前はなんだろうね」

「クチナシ」

疑問を口にするスグに、間髪入れずに答える。すると彼女はコテンと首を傾げ、

「……クチナシ？」

「そう。……あと、さっき通った庭にカーネーションが咲いていたよ。ザクロの木とか、ゼラニウムの鉢もあったかな」

「へえ」

スグが嬉しそうにニコニコと笑いながら、感嘆の声を上げる。両手を合わせる彼女の表情はイルミネーションの光のように輝いていた。何がスグをそうさせているんだろう。

「やっぱりモミは物知りだな」

「そんなことないよ。ちょっと記憶力が良いだけ」

「ええー、そう？ ……じゃあ、家に帰ったら漢字の練習しようよ。
来週小テストがあつてさー」

「……ちょっと、それ私が小テスト解けて言うの」

「正解！」

「正解じゃないよ、もう！」

「あははっ」

明るく大きな笑い声に、私も思わず吹き出す。途端に、彼女がこれ以上にならないほど顔を綻ばせた。私は目を細めて、

「……スグ」

「何？」

「ありがとね」

一瞬、不意を突かれた時のような間の抜けた顔になった。でも、すぐに歯を見せて笑う。

「こんなのお安い御用だよ！」

キラキラと輝く眩しい笑顔。何も変わらない澄んだ表情。

落下していただけだった“私”の体に、いつの間にか一本の糸が巻き付いていた。

———それから、スグと一緒によく外出をするようになった。もしかしたら、事故の前よりも頻繁に出掛けるようになったかもしれない。

本当に、色々な場所へ連れ回された。動物園や水族館等の定番スポットはもちろんのこと、博覧会やプラネタリウム、ミュージカルからクラシックコンサートまで。果てには絶景を望むことが出来るハイキングコースや公園、何百種類もの花が咲き誇る美しい花園にも連れて行ってもらった。

『色とりどりの景色を見て』と言った彼女は、本当にその言葉通りにしてくれたのだ。

一体どこでそんな場所を見つけてきたんだと、首を傾げてしまうほどの情報量だった。しかも私の体の事を考慮してか、完璧にコースを作り上げて。……自分の時間を切り裂いて、私のために。元々パソコン関係は苦手で、学校の授業以外で触ったことなんてなかったはずなのに、必死にローマ字表と格闘して覚えてしまうまでキーボード入力をしていたことを私は知っている。

……ただ、スグには申し訳ないけれど、以前のように楽しいと純粹に心が躍ることは無くなった。どこへ行っても、どんなに美しいはずの景色を見ても、胸に穴が開いているみたいに感情がすり抜けていく。

それはスグも分かっているようで、必死に私を楽しませようとフオローしてくれた。諦めずに、何度も、何度も私を外の世界へ引っ張ってくれた。

———そのおかげもあってか、気付いた時には車椅子での移動にはずいぶん慣れていたのだ。一人で十分行動出来るくらいに。

ちなみに、短時間の移動ならばロフストランドクラッチ———前腕部支持型杖とも呼ばれるもので、前腕を通すカフとグリップで体重を支えるもの———を右手で使用している。だが、外へ行くにはやはり車椅子を使わなければいけない。杖の支えがあるとはいえ右足で全体重を支えなければいけないので、義足の接続部への負担が大きい。よって、長時間の移動をすることには向いておらず、せいぜい家の中だけだ。

しかし、私をこんな風に行動出来るようにしてくれたのは他でもないスグだろう。

彼女には感謝してもしきれない。

「モミ、入ってもいい？」

するとそのスグが、声を伸ばしながら軽くドアをノックしてきた。私は浮かべていた笑みを慌てて消し去り、膝の上に乗せていた小ぶりのバッグを机の上へ置く。

「いいわよ」

「はい」

声と共にドアが開き、中学校の制服を身に付けたスグが顔をのぞかせた。今日は土曜日だが、おそらくいつものように部活へ行くのだろう。

「スグ、どうしたの？」

「ほらっ、今日も出掛けるんでしょ？ 途中まで一緒に行かない？」

「いいけれど……、私、もう少し時間が掛かるわよ」

「大丈夫、大丈夫！ あたしも手伝うし！」

そう言うが早いか、手慣れた調子で私の外出の準備を始める。こうなってしまったら、もうスグは止められないだろう。素直に手伝ってもらった方が早く終わる。私は苦笑いを作り、肩をすくめた。

「今日もあそこに行くんでしょ？」

「ええ、そうだけれど……、今日はその前に人と会う約束をしていて……」

「人と会う約束？」

スグがバツと私の方を振り返った。目を丸くさせ、驚いたような表情で私の顔を凝視してくる。けれどすぐに、

「……ああ、なるほど。幸歌さんか」

私が補足を入れる隙もなく一人で解決させ、ポンと手を打った。

「そう、幸歌よ」

「会うのは1年ぶりくらいじゃない？」

「そうね……、去年は私も幸歌もバタバタしていたし、4月に入ってから忙しかったから」

ハンカチとポケットティッシュをバッグに入れながら口にした。

———今でも思い出せる。

幸歌が事故を聞きつけて病室に駆け込んできたとき、泣きそうな顔をしながらも言ってくれた言葉を。

それは頭にしっかりと焼き付いていて、離れない。

『大丈夫だよ。私がいるから』

頭を優しく撫でながら、私の傍にいてくれた。

私の瞳を、まるで逃すまいとでも言うように、ずっと見てくれたのだ。

そんな幸歌は、告げていた通り私の事故の翌年———学年が変わる頃に引越して行った。けれどそれまでは、ほとんど日をおかずにお見舞いに来てくれたのだ。看護師さんに私の家族だと勘違いされてしまうくらいに。

詳しいことは知らないが、幸歌は直前まで引越すことを渋ったらしい。私の傍を離れたくないと泣いて、彼女のお姉さんを困らせたそうだった。

結局、幸歌のお姉さんとスグが連絡を取り合い、私と幸歌が文通出来るようにするということで落ち着いた。

それからは、お互い携帯電話を持ちメールが出来るようになって、少しくらい忙しくても、途絶えさせずに文通が続いている。幸歌からの手紙はそれだけで束を作れるようになり、物がほとんど無い殺風景な私の部屋で、確かな色を放っていた。

「幸歌さんっていい人だよ」

「ええ、そうね」

いつも文頭で、『困っていることはないか、体調を崩していないか』と聞いてくる。優しくて心配性な、掛け替えのない大切な親友だ。

「……まったくモミったら、本当に幸歌さんが好きなんだね」

「もちろんよ。幸歌は私の大事な友人だもの」

「はいはい。……もう、そこまでハッキリ言われると複雑だわ……」

「……は？」

「なんでもありませんーん」

ひょいと肩を上げるスグを私は不思議に思いながら、部屋の壁に取り付けられた時計を見上げた。思っていたよりも時間が過ぎていて、慌ててスグの手を止めさせる。

「もう大丈夫よ。これ以上時間を取らせるのは悪いわ。今日も部活があるのでしょう？」

「そんな……、平気だよ」

「駄目よ。時間は守らなくてはいけないわ」

不服そうに唇を尖らせるスグの背中を、手を伸ばしてポンツと軽く叩く。私の動きが制限されていることをスグは十分理解しているから、強く理由を主張して背中を叩けばそれ以上粘ることはしない。スグは荷物を肩に掛けると、ゆっくりとした足取りで扉に近づいて行った。しかしドアノブに手を乗せたところで私の方へ振り返り、「ねえモミ、今度友達が入っている吹奏楽部が大会に出るんだけど、日曜日だし3人で応援に行かない？」

「……3人？」

「そう！ あたしと、モミと、お兄ちゃんで！」

「————スグ」

先ほどまでと口調は変わっていない。しかしその声の裏には、ど

こか願うような力強さがあった。ちょうど七夕に短冊へ願い事を書くみたいに。

私は無意識に目をそらす。

「……………悪いけれど」

「モミ…………」

ガッカリしたように、悲しそうに、スグの声音が微かに震える。

「……………こ、今回は断らせないんだからね！」

「……………スグ」

「……………何でよ、どうして。あたしたち、あんなに仲良かったじゃない！」

「スグ！」

「モミだって、あの日3人で交わした「約束」を覚えてるでしょ！？」
「……………」

スグの必死な表情を見ていられなくて、顔をそらした。唇を噛み締める。

「……………覚えてる。」

私は、私とスグは覚えている。……………けれどそれは、「あの人」も同じように覚えている確証には決してならない。

そもそも、仮に「彼」も覚えていたとしても、あの「約束」がすでに崩れ去っているのは現然たるものだった。

「……………色々な理由を付けて3人で行きたがらないよね。小さい頃みたいにお兄ちゃんとふざけ合うこともないし」

スグは知らない。

「……………スグだけが、私たち「兄妹」の真実を知らないのだ。」

私は、なんて残酷なことをスグにしているのだろう。あと数年経てば両親から知らされるからと、先延ばしして、隠し通している。

……………きつと、怖いのだ。畏怖しているのだ。他でもない、「アイ

ツ」が邪魔をするのだ。いつも、いつも、枯れて潰れた声で叫び続けて、私を不快にさせる　「アイツ」が。

「……そんな、もうふざけ合うような歳でもないでしょう？」

「そうだけど……、そうだけど、あたしは……っ」

「スグ。私たちはもう、無邪気な子どもではないのよ。……少なくとも私は、ただ純粹に日々を過ごしていた頃には戻れないわ」

膝の上に乗せていた両手を握りしめた。ロングスカートに皺を作る。

翅を失えば、どんなに美しかった蝶であっても、生気を完全に喪失した醜い死骸に過ぎないのだ。

「……悲しいな。モミがあたしを置いて、先へ行ってしまったみたい」

「私はもう戻れないわ。ならば、先へ進むしかないのよ」

たとえそれが、体の肉を少しずつ切り刻まれていくような激痛に、この命を終えるまで苦しめられる道であったとしても。美しい過去に縋り付くことは、私には許されていないのだ。

愚かな罪人は、てらてらと光る猛毒が塗られた裁縫針の上を、素足で歩むしかない。数えることなど不可能であると言い切っても良いくらい針の先が迎え撃っていたとしても。立ち止まることも、駆け抜けることも、助けを求めることも出来ない。ただただ無慈悲で、冷酷で、孤独なのだ。

「けれどね、スグ。あなたまで急ぐことはないわ」

苦しみもがくのは、歯がガチガチと音を立てるくらい寒い。光を望むなんて滑稽に思えるほどの、果てしなく広がる暗黒の洞窟が続く。歩いても、歩いても、……歩き疲れて息が絶え絶えになっても、出口はおろか行き止まりさえ見つからない。いつ終わるのか、それすら分からない。自分がどこへ向かっているのかも分からない。

そもそもどうしてこの場所に居るのか、その理由を見失いそうになるのだ。

「……モミ、それってどういう……？」

「分からなくて良いわ。けれど、これだけは覚えていてちょうだい」眉間に皺を寄せて、口をぎゅっと引き締めるスグへゆっくり近づいていく。腕を伸ばして、彼女の肩に手を置いた。

「……あなたには、太陽の光がさんと降り注ぐ場所で生きて行っほしい。」

そう願うことだけが、私に出来る最善のことだった。

「——来なくても良い場所だってあるのよ」

スグの表情が一層険しいものへと変わっていく。

「来なくても……、良い場所？」

「考えなくてもいいわ。ただ、覚えているだけでいいのよ」

「何それ。意味が分からないよ」

「……自分が幸せになれると思った道を、ちゃんと選り取るだけで良いの」

いつか、私が取り返しのつかないことになったとしても。スグまで追いかけて来なくても良いのだ。

スグは優しい。……けれど、それだけ危うさもあるのだ。

「……や、やだ。何なの、まるで遺言みたいじゃない！」

肩に置いていた手が、バツと振り払われた。すぐさま視線を戻すと、スグがわなわなと体を震わせ、ギッと目尻を吊り上げている。

「それに、その「来なくても良い場所」にモミがいるってことじゃないの!？」

顔を真っ赤にして激昂する彼女を、「私」は静かに見つめる。何も言わず、視線も動かさず、表情も変えず。するとそんな私に痺れを切らしたのか、スグが飛び掛かってくるような勢いで私の両肩

を掴んだ。力加減が出来ないほど感情が高ぶっているのか、爪が肉に食い込む。

しかし、「私」はそれでも、何の感情も動かさない。スグの整った顔が歪んだ。

「何がモミを苦しめているの！？ 何がそうさせているの！？ ……やっぱりあたし、分かんないよっ！ ちゃんと教えてよ！！」

ハラリと舞った雫が、私の頬を濡らした。苦痛に満ちた、絞り出すような声が落ちてくる。

「3人で笑っていたあの頃に、戻りたいよ……っ！！」

肩を掴む両手が、フルフルと細かく震えていた。私は短くため息を吐き出すと、そっとその手を降ろさせる。

「…………スグ」

俯き加減だったショートヘアの少女が、ビクリと体を跳ねさせた。恐る恐るといった風に、顔が上げられる。

「スグ」

赤くさせた両目が、私の両目とぶつかった。瞬間、悔しそうな、何かを察して諦めたような、それでいて縋るような…………、そんな感情が複雑に入り混じった面持ちになる。

私は息を吸うと、目を細めて冷たく言い放った。

「スグ、学校へ行きなさい。もう予定時刻をとくに過ぎているはずよ」

「モミ、あたしは……」

「行きなさい。私は、やるべき事を全うしない人間とは話したくないわ」

「……うん、分かった。ごめんなさい」

さっと顔ごと視線が外された。一言も発さないまま、背を向けて部屋から出て行く。

ボタン。その乾いた音が、この空間を淡い光から完全に切り離れた。途端、重い空気が体に押し掛かってくる。

———私は、先へ進まなければいけないのだ。

大多数の人間と大きく考えが違っていようが、私には関係ない。奇妙に見られても、疎まれても、嘲笑されても、私は別に構わない。何とでも言えば良いのだ。

机の隅に置かれた黒いノートパソコンを見やる。自由に動けなくなった私のために、両親が買い与えてくれたものだ。元々インターネットにはあまり興味が無かったが、せっかく気を使ってくれたのだからと、私はネットで色々な情報を見るようになった。

そうしてしばらくたった頃、あるゲームの名前を再び目にしたのだ。

剣の世界———ソードアート・オンライン。

それは、私がモンスターのデザイン案を提供したゲームだった。ゲームなどには一切見向きもしない私だが、この時は違った。忌々しい出来事も思い出すことになったが、どんな作品に自分のイラストが使われたのか気になり、ゲームの紹介をしていたブログのリンクから公式ホームページへ飛んだ。

そして私は、衝撃を受けた。

この世界の中で、生活出来るということに。

———「生きる」ことが出来るということに。

生物学上、私は生きている。けれどもう、私にとってこの体は死んだも同然だったのだ。

川に落ちた一枚の葉のように漂い、いつか朽ちるのを待つ存在。私の事を支えようとしてくれた人はもちろんいた。しかし、存在

しても良い場所も、自身の価値も見出せなかった。

……けれど、この世界に行けたらどうなのだろう。

モンスターを狩って生活し、家を持ち、釣りをし、畑を耕す――
――。そんな日々を過ごすことが出来る。

ある程度のルールはあるが、それはこちらだって行動を制限するものはいくらでもある。それを考えれば、この世界は遥かに自由なのだ。

ならば、自分の価値を自分で作り上げることが出来るのではないか。

自分の脚で歩いて、走って、跳ねることが出来るだから。何物にも、私は縛られないのだから。

――もし、この世界を「もう一つの現実世界」に出来るなら、時間だけが浪費するように進むなかで、置いて行かれた私が先へ進めるなら。

私は、もう一度生きることが出来る。この世界で死んだのなら、そちらの世界の住人になればいい。それで私が生きることが出来るのなら、……たとえニセモノだらけの世界だとしても構わない。

ただ、これの意味することはすなわち、今の世界で「生きる」とをやめるといふことなのだ。しかしすでに私自身が、今生かされている世界を拒絶している。

もちろん、スグや幸歌、伸一の顔が浮かばなかったわけではない。だが、迷うことはなかった。

たとえ「もう一つの現実世界」から「己の生きる世界」と認識が変わり、破滅への一途をたどったとしても、後悔はしないだろう。

そもそも、すでに私は毒針の道を進んでいるのだ。多種多彩な花が咲き、光り輝いている道はもう踏み外しているのだ。

今以上の暗闇に突き進んだとして、何が変わるのだろうか？

※ソードアート・オンラインの予約は無事に済んでいる。あとは数日後に届くのを待つだけであった。

心躍る、なんていうことは特にない。ただその日を待つだけだ。小ぶりのバックを膝の上へ乗せ、車椅子の車輪の外側に付いたハンドリムを操作する。私の部屋は1階へ移動させてもらったので、部屋の外に出れば玄関は目と鼻の先だ。

———なんだけれども。

私の動きは、自然と止まった。

「……あ、紅葉」

玄関の方向から歩いてきた人物もこちらに気づき、私の名前を呼んで足を止めた。

……そう、玄関に近いということは、それだけ「彼」と鉢合わせをする確率が上がるし、引き返すことも出来ない。

私はろこつに嫌な顔をして、わざと見せつける。

「2人の時にその呼び方はやめてって言っているでしょう？」

何か言葉が返ってくる前に、ドスを利かせて刺々しく言っていた。

「———和人さん」

△ i 3 6 4 2 | 1 4 6 9 2 ∇

「……ごめん、紅葉さん」

もともと逸らされていた視線が、さらに落ち込む。私は口に馬鹿にするような笑みを作り上げると、ハンドリムを操作して和人の方へ近づく。彼の肩が、少しだけ揺れた。

「恐れ入りますが、そこを通して頂けませんか？」

「あ、ああ、ごめん。……ごめんなさい。あの、手伝おうか？」

「いいえ、結構です。慣れていきますので」

彼の体が脇へ逸れたのを確認して、車椅子の操作を再開した。だが和人とすれ違った瞬間、声が掛けられる。

「いつものところに行くのか？」

「あなたには関係のないことだわ。……いつも言っているでしょう。私に関わらないでいいですから」

私は嫌悪に顔を潜めながら、冷たい声で素っ気なく言い放つ。

痛いほどの静寂が包んだ。

この空気を作っているのは私だと、十分理解している。けれど破ろうとは思わない。

背後にいる和人の様子はもうわからない。……といっても、彼はいつものように目を逸らして、顔を俯けているだろうから、分かるはずもないのだが。

怒りか、悲しみか、はたまたそれ以外の感情か。

私には、もう確認する術はない。

だがどんな感情を抱いているとしても、もう関係ないのだ。

私は追いつきかけをかけるべく、必ず傷つくと分かっている言葉を投下する。どんな事よりも、苦しいものと知っているから。

「本当の兄じゃないくせに」

これ以上の会話は時間の「無駄」だ。

さらに反応が返ってくる前に手早くハンドリムを操作した。玄関付近で車椅子の車輪に付けたカバーを外す。そして感情が出ないように玄関のドアを開け、そっと、けれど後ろは振りかえずに閉めた。私の後を追いかけてくるものは、当然のことながら誰一人としていなかった。

——しかし、門を出たところで待ち構えている者はいた。

「あら……、伸一じゃない」

全く予想していなかった人物に、私は目を丸くする。それは向こうも同じだったようで、人の家の前で何やら難しい顔をしていたくせに、ビクリと小動物のように跳ね上がる。

「も、紅葉ちゃん」

「そんな、まるで幽霊でも見たみたいな反応をしないでちょうだい」
「ご、ごめん」

しゅんと肩を落とす彼に、私は表情を柔らかくした。尖っていた感情が、雪解けのように穏やかになっていく。

「まあ、いいわ。……それで、ウチに何の用かしら。あいにくだけど、スグは部活に行ったわよ」

「そ……っ、そんなじゃないよ!!」

顔を真っ赤にさせて間髪入れずに言い返してくる伸一に、私は苦笑いを作った。

「あなた、まだスグと話せていないのね」

「う、うぐっ……」

声を詰まらせたかと思うと、彼は明後日の方向を見て、

「……いいんだよ、見ているだけで」

「同じようなことを、もう何年も言っているわよ？」

「うう……」

ついからかってやると、拗ねたように口を尖らせる。彼は気づいていないが、私や幸歌以外にはこんな表情はしない。微笑ましくなり、私は笑みを浮かべる。

「伸一のことを信頼しているから言うけれど、出来るならあなたにスグを守ってほしいわ」

「へ？ どうして」

「スグは、私にとって大切な人のうちの一人よ。そう思うのは当然だわ」

「そ、そうじゃなくて。……どうして僕なの？」

本当に分からないようで、伸一が間の抜けた顔で私の目を見詰め返してくる。私は小さく息を吸った。

「……私が今心から信頼しているのは、幸歌と、スグと、……伸一だけだもの」

「ええっ!？」

「どうして驚くのかしら。当たり前じゃない」

伸一が啞然とした表情で、口をパクパクと開閉させている。思わずクスクスと笑うと、彼はフリーズから立ち直ったのか、頬を赤くさせたまま頭をガシガシと掻き、

「紅葉ちゃんってさ、よくそういう恥ずかしいこと言うよね……」

「どうして恥ずかしいのよ。本当のことじゃない。嘘は言っていないわ」

「分かってるよ! ……だから、余計恥ずかし——ああ、もういいや」

「何よ、はっきりしないわね」

口元を手で押さえてそっぽを向く伸一に呆れ、眉をひそめる。だが、同時に違う可能性が頭の中に浮かんた。

「それとも、あなたにとって私のこの気持ちは重いのかしら」

刹那、伸一が顔を上げる。ギョツとしたような顔だった。彼は私
が口を挟む間もなく早口で、

「そんなことない！ 嬉しいよ。……僕も、紅葉ちゃんは大切な友
達だって思ってるんだから！」

「……そう。ありがとう、私も嬉しいわ」

——人間とは残酷で、嘘をつく生き物だ。どんなに正しさを
貫く人物でも、自己中心的になる時はある。聖人のような人などご
く一部だ。すなわち、『清く正しく、どんな人に対しても差別せず
に優しく』などほぼ不可能だと言ってもいい。

しかしそれでも、目の前にいる彼は、少なくとも私にとっては「
優しい人」だ。

確かに教室に通っていた頃と比べれば、伸一とは少し疎遠になっ
ただろう。けれどもこうして会えば対等に接してくれるし、私も躊
躇いなくそう出来る。

「普通」に話してくれる数少ない友人だ。

「……そうだ、伸一。これから幸歌と会う約束をしているのだけ
れど、あなたも来る？ きっと幸歌も喜ぶわ」

「う、うーん……」

「この後何か予定でもあるのかしら」

「そ、そういうわけじゃないんだけど……」

「それだったらいいいじゃない。もう少し伸一と話したいわ」

思案する表情になる伸一を見詰める。彼は目を泳がせたが、やが
てコクンと一つ頷いた。

「じゃ、じゃあ……」

「決まりね。さ、行きましょ？」

伸一が私の横に並んだのを確認して、ハンドリムを操作し始める。

はじめ彼は歩幅を小さくし歩行スピードを緩めようとしてくれたみたいだが、車椅子の操作に慣れた今となっては一般的な人が歩く速度とそう変わらない。彼の優しさに感謝しつつ、私たちは進む。

「そういえば、伸一。この前駅でバレエ教室の先生にお会いしたのだけれど、あなた教室をやめたんですってね」

「……うん、やめたよ」

「……どうして、と問い詰めたりしないわ。何をしようが伸一の勝手なもの。けれど」

「そんな深い理由はないよ。ただ……」

「ただ？」

一瞬黙り込む彼だったが、意を決したように口を再び開く。

「僕さ、たとえクラスがバラバラになってしまっても、3人で夜の帰り道を歩けるのが楽しかったんだ」

「……そうね。＂私＂も楽しかったわ」

「うん。――――紅葉ちゃんがバレエの楽しさを教えてくれた。……幸歌ちゃんが、躍ることの嬉しさを教えてくれた」

あの頃の時間は、色鮮やかだった。

私もそれを思い出して、軽く目を閉じる。

「紅葉ちゃんはいつも凄く厳しくて怖かったけれど、紅葉ちゃんがバレエを好きなのはよく知っていたから、僕も精一杯頑張った。……たとえ上手く出来なくても、頑張ること自体が凄く楽しかったんだ」

伸一が立ち止まった。見上げれば彼の目はユラユラと切なげに揺れていて、私は何も言えなくなる。

「けれど幸歌ちゃんは引越して行ってしまっていて、紅葉ちゃんは……バレエが出来なくなってしまうって、僕があ教室にいる意味はなんだろうって思ってた」

「それで……、やめてしまったの？」

「……うん、そうだよ」

……これはきっと、彼の優しさ。弱さ。

細い息が自身の口から漏れ出る。眉を八の字にしながら言葉を探し……、しかしどう言えばいいのか分からなかった。

私は押し黙ったまま、ハンドリムの操作を再開した。知らず知らずのうちに、ポツリと言葉が漏れ出る。

「馬鹿ね」

それを聞いた伸一も泣きそうな表情で苦笑いを浮かべ、

「ごめん」

震えた声だった。深い、深い、暗い底を覗き込んだような、悲しみを孕んだ声音だった。

「本当、馬鹿だわ……」

「うん。知ってる」

「もう……」

私は瞑目し、——しかしすぐに目を開けた。

「でもね、私、あなたのそういう所も嫌いじゃないわ」

伸一が両目を見開く。私は何も言わずに笑みを作り、彼から目を外して前を見据えた。

*

駅から一番近い大きめの公園。時刻は14時をちょうど刻んだ頃

だ。

滑り台や鉄棒の周りでは小学校低学年の子どもたちが笑い声を上げながら走り回り、広い砂地では親子がキャッチボールをしている。賑やかで穏やかな空間だ。私は口元を緩ませる。

視線を巡らせれば、大きな木の下に設置されたベンチに人影があった。読書中で顔は俯けられていたが、雰囲気は全く変わらない。今日会う約束をしている幸歌だ。ピンク色のワンピースを着ている。私は伸一と顔を見合わせると、ゆっくり近づいて声を掛ける。

「久しぶり、幸歌」

少女の顔が上がる。ふわりと髪が風に舞った。

「あ、久しぶり紅葉——って」

私の顔を見て笑った幸歌だったが、背後に立つ伸一を見て動きを止めた。ボンッと小さい爆発が幸歌の顔で起きる。顔をゆでダコのように真っ赤にさせ、ガバッと勢いよく立ち上がった。

「な、ななななな、何で長田君が……っ」

「あら、駄目だったかしら。来る途中で会ったから、せっかくなら3人で、って思ったのだけれど」

「ううん、別に駄目じゃなくて……、むしろ……う、うれし……」

「幸歌？」

「何でもない！」

ブンブンと顔を横に振ったかと思うと、両手で顔を覆ってトスンと再びベンチに沈んだ。本当に幸歌は可愛い。

一方、その様子を伸一はきょとんとした表情で見ている、何も分かっていないご様子だ。さすがに呆れてくる。私は眉を吊り上げながら、肘で彼の脇腹を小突いた。

「なっ、何、紅葉ちゃん」

「別に何でもないわ」

私は大きなため息をつき、幸歌の細い肩に手を置いた。

「幸歌、驚かせてごめんなさい」

「ううん、ありがと……」

手を退けた彼女は、ふにやりと笑う。桃色に染まった頬が愛らしい。

あいかわらず彼女の笑顔は朗らかで優しかった。柔らかな声が、耳によく馴染む。

彼女も今までと変わらない視線を向けてくれる一人だと、そう素直に思える。

「ごめんね。大変だったでしょ」

「いいえ、大丈夫よ。そもそも、今日も外へ出るつもりだったから」

「そう？ ……あ、長田君も、ええと、ありがと」

「い、いや……」

チラリと視線を向けられた伸一が、ぎこちなく言葉を返す。幸歌もあちこち目をやり落ち着かない様子だ。だが、ベンチの横に置かれた紙袋を見た時、「あっ」と短く声を上げる。

「そうそう！ 今のうちに渡しておかなきゃ」

きつとどこかの雑貨屋でラッピング用のものを購入してきたのだろう。パステルブルーのチェック柄が可愛らしく、幸歌らしい。

彼女は高らかに手を打つと、宝物を手にするかのような手つきでその紙袋のヒモを掴む。そして私に向かって差し出し、

「はいこれ、お祝い！」

いきなりのことで私は面食らった。咄嗟に言葉が思いつかない。

「……え、お祝いって、まさか」

「そうそう、そのまさかだよ。直接渡したかったから、半年以上遅れちゃったけどね」

「……合格？ ……って、何？ 紅葉ちゃん、何か資格でも取った

の？」

すると、ただ一人状況を飲み込めていない伸一が首を傾げて問うてくる。幸歌は目を丸くすると、私の顔を凝視して、

「紅葉、長田君に話してないの!？」

「ええ。……だって、わざわざ言うようなことでもないでしょう？」

「そういう問題じゃないよ……」

呆れたような声を出すと、ガックリと幸歌が肩を落として脱力した。私はどうしてそんな反応をされるのかよく分からず首を傾げる。

「な、何なんだよ。早く説明してよ」

我慢の限界になったのか、伸一が急かした。幸歌にチラリと目配せすると、彼女は諦めたように苦笑いをし、

「ほら、3年くらい前に外国の教育方法を取り入れるってことになって、飛び級制度が日本にも出来たでしょ」

「……あ、ああ、そういえばそんな制度が出来たような———って、それって!？」

「そういうこと!」

幸歌はまるで自分の事を自慢するかのように胸を張り、

「紅葉は小4の秋に一回目の試験を受けて、ええと、……何年生に進級したんだっけ」

「中学2年生よ」

「そうそう、中2!」

さらっと補足をすれば、幸歌は笑顔で両手を打った。

「……あ、だから紅葉ちゃん転校しちゃったのか……」

3年の時を経て知った真実に、伸一が遠い目をして深く息を吐き出す。それを見た幸歌が一瞬つらそうな表情をしたが、すぐに消し去り、

「それで去年二回目の試験を受けて、また合格したんだよね。国立

大学の1年生だっけ」

「ええ。理学部物理学科に入学したわ」

「ひ、ひえー……」

「もうさ、私より3つも学年が上だなんてヒドイよね」

「そんなこと言われても……。今打ち込めるものと言ったら、勉強くらいなんだもの」

「だからって、そんなに頑張らないでよ」

幸歌は、ぷうと頬を膨らませながらそう言った。そんな彼女を見て、一瞬、私は思う。

———優秀な成績を残したら自分の価値を見出せるのではないかと考えていた、と言ったらどんな表情をするのだろうか。

そしてもっとも大きな理由として、勉強は「私」が一番嫌いなことだったから一生懸命やっている、なんて教えたら……と。

けれど、その考えはすぐにそれは打ち消した。判断時間にして、ほんの数秒。その速さのおかげか、幸歌と伸一が気づいた様子はない。

私はほっとしながらも、表は崩さないように笑顔を作った。

「あ、そうだ、二人に相談したいことがあってね……。見てほしいものがあるのんだ」

幸歌は言うやいなや肩掛けのバックを探り始めた。彼女はおっとりとした性格の女の子だが、同時におしゃべり好きの面もある。私から話題を振ることはあまりないが、話題が絶えることはない。

私は笑みを作りながら見守っていると、やがて幸歌は目的のものは見つけたようで、パッと顔が明るくなった。再びこちらを見てにっこりと笑う。

うすいピンクの花が舞っているメモ紙を手渡された。そこには、

何かのグループの名前なのか、数個箇条書きで書かれていた。

「……ええと、幸歌？ 何かしら、これ」

「うん。実は私、高校でパソコン部に入っているんだけど……」

「パソコン部？ 幸歌が？」

思わず聞き返した。途端、幸歌が「しまった」とでも言うような表情になる。

「あ、えっと、友達のお兄さんに誘われて……」

「……私、てっきり声楽部とか合唱部に入ったものだと思っていたのだけれど」

あの夜の約束を思い出す。

必ずそれぞれの夢を叶えよう、と誓い合ったあの日を。

私はそのすぐ後に不可能な未来へと変わってしまったが、幸歌は叶えるチャンスがあるはずなのに。

「幸歌、部活だって重要なアピール場所よ。それなのに……」

「そ、それは……」

幸歌が今日初めて目をそらした。同じだ、と咄嗟にその言葉が頭に浮かぶ。

何と、と考えるまでもない。引越す事を告げたあの時の表情とそっくりなのだ。

嫌な予感がした。ピリピリとした感覚が電流のように走る。私はすぐさま問おうとしたが、それとほぼ同時に、

「——あ、あの、紅葉ちゃん！」

伸一が大声を上げて割り込んできた。幸歌が目を見ん丸にさせる。私も突然のことに驚き、言葉を失った。けれどもすぐに気を取り直し、

「伸一、何かしら。今大切な話をしているのよ」

「だ、だけど」

「それともあなた、何か知っているのかしら」

「……な、何も知らないよ」

「そう？」

スッと目を細める。伸一は身を固くさせ、幸歌はオロオロとした様子で私たちの顔を交互に見ていた。誰一人として何も言わない。子供たちの笑い声が、急に大きく聞こえた。ザアザアと、葉の泣く音が私たちの間を流れていく。

私は深くため息をついて、知らず知らずのうちに入っていた体の力を抜いた。

……何をしているのだろう、私は。

幸歌がどんな部活を選ぼうが、彼女の自由だ。どんな将来を夢見て、どんな道を選ぼうが自由だ。

人は変わる。……変わらない人などいない。

当たり前のことだ。

幸歌も、伸一も、みんな変わっていく。私自身が良い例ではないか。

歌を歌っていてほしいなど、己の願望だ。それを押し付けるなんてどうかしている。

「……ごめんなさい、幸歌」

「え？」

「伸一にも謝らなければいけないわね。……ごめんなさい」

二人に頭を下げた。伸ばした黒髪が肩からさらさらとこぼれ、私の視界に影を落とす。

「ちよっ、ちよっと、紅葉ちゃん！ 謝らないでよ！」

「そうだよ！ 私、全然気にしてないから！」

「いいえ、そういうわけには……」

「大丈夫だから、本当に！」

「え、ええと、————ほら、幸歌ちゃん、相談事って何？」

「……あっ、うん！」

伸一が無理やり話の路線を変えた。幸歌がワタワタとしながらも話し出す。

「じ、実はね、部活の人たちでオンラインゲームをすることになったんだけど……」

「うんうん」

伸一が相槌を打つのを聞いて、そっと顔を上げた。すると、二人はホッとしたような色を顔に浮かべる。

「……それでね、すぐには作れないらしいんだけど、ギルドっていうやつを作ろうと思っているの。これが名前の候補なんだけれど、なかなか決まらなくて」

「あー、ギルドか。確かに名前決めは悩むかもね」

己の手の中にある紙に視線を落とす。

ギルド———事前にゲームについて調べた時に出てきたワードだ。確かチームのようなものであった気がする。……とすると、たしかにこれらの案は少し微妙かもしれない。高校名が入っていたり、個人の名前らしきものが入っていたり……、これは駄目でしょうと、つつこみたくなるものまである。

しかし、少々呆れながら視線を下に滑らせていくと、目に留まったものがあった。思わずそれを凝視し、気づいた時には声も出していた。

「《月夜の黒猫団》……？」

何か惹かれるものが、この名前のそこかしこにあった。

そろそろと紙からゆっくり顔を上げる。瞬間、幸歌の表情を見て

確信した。けれど、確かめる言葉が口から滑り出る。

「もしかして……、あの時の猫のこと？」

「あ、やっぱり分かった？」

「ええ。少し驚いたけれど。……ねえ、リュヌは元気かしら」

「元気すぎて困っているくらいだよ」

あはは、と幸歌は笑う。けれどもすぐに神妙な面持ちになり、少し眉を下げながら心配そうに言葉を発した。

「……ごめん、嫌だった？」

事故に合った日と同じ日だから、と続けなくともそう言いたいの
が分かった。だから私は、否定の意をこめて静かに首を横に振る。

「いいえ。……むしろ、嬉しいわ。思い出を大切にしてくれている
って分かるもの」

「そ……、そう？」

「ええ、もちろん。……じゃあ私、月夜の黒猫団に1票を入れ
るわ。可愛い名前だと思うから」

「ほ、本当！？ よかった！」

再び幸歌の周りにコスモスの花が舞う。それは優しい色の花びら
で、まぶしさに目が眩みそうになる。けれど私は視線をそらさず微
笑みを作りながらその姿を見て、静かに聞いた。

「ところで、そのゲームの名前は何なのかしら」

「ソードアート・オンラインっていうゲームだよ。今結構テレ
ビとかで騒いでいるやつ！」

「ああ、知っているわ。……それにしても、偶然ね。実は私もやろ
うと思っているのよ」

「そうなの？ 紅葉がゲームだなんて珍しいね。……あ、自分のデ
ザインしたモンスターが気になるとか？」

純粹な質問に、一瞬言葉が詰まった。

“珍しい”。

確かにそうだ。私自身でさえ少し前の己を思えば、そんな道楽に身を投じるなんて奇妙に感じてしまうのだから。……けれど、もう一つの世界にしたい”、なんて口が裂けても幸歌には言えない。ただ純粹に“ゲーム”を楽しもうとしている、彼女には。

……真っ白で美しい輝きを放つ彼らを、醜い色で染めてはならないのだ。

私はぐっと体に力を込める。口にすることは許されないと叫ぶ理性が、ギリギリと“自身”の身を縛り上げた。

ギリギリ、ギリギリ。

かつて“私”を落下から助けた3本の糸が、自重で食い込む。タラリと、どす黒く熱い液体がこぼれた。あちこちから止めどなく溢れ出る液体と混じる。

ボタボタ、ボタボタ。

ぐらぐら、ぐらぐら。

上も下も右も左も見えない暗闇。熱さが肌を少しずつつ焦がし、寒さが体を鋭く突き刺す場所。そこで宙ぶらりんの状態になっている“私”。

口元を綻ばせた。愛しい姉や友人の顔を思い浮かべながら、糸を自らの手で断ち切る。

「————ええ、そんなところよ」

落ちる、落ちていく。

……いや、一滴の白すら垂らされていないような黒の中では、その感覚でさえ失われていた。

落ちているのか、底まで来たのか、それともすでに底に居たのか。もう、分からない。

己の手すら視えない。

そして、誰も「私」が居る場所を知らない。

「……伸一は？」

「へ？」

ゆらゆらと揺れる思考を押しとどめ、数秒の間を置いた後、伸一の方へ顔を向けて尋ねた。間抜けな声が上がる。私はその反応に苦笑いをし、

「だから、あなたは『ソードアート・オンライン』をやらないの？」

「あっ、それは……」

何気なく聞いたつもりだったが、何故かチラリと幸歌へ視線を送る。彼女も伸一のそれを受け、気まずそうに俯いた。

その意味ありげな視線での会話を、不思議に思って首を傾げる。

「どうしたの？ 何かおかしい事でも言ったかしら」

「う、ううん。そういうわけじゃないよ」

「そう？」

「うん。……それで『ソードアート・オンライン』だけど、僕は落ち着いてから始めようかなって。買うのが大変そうだから」

「あら、珍しいじゃない。あなたがこんな話題になっている新作に飛びつかないなんて」

「親が勉強しろって五月蠅くてさ」

「……なるほど」

それならまあ、納得出来る。スグも中学に上がってから苦手な教科では苦戦しているようで、何度勉強を教えたことか。

「二人はプレイヤーネームもう決めたの？」

「ええ、決めてあるわ」

「うん、私も！」

「幸歌は『サチ』、かしら？」

「……え！ 正解！ なんでわかったの！？」

「ふふ、何でかしら？」

「もう！ そういう紅葉は何にするの？」

「"K i k a" って書いて、"キカ"にするつもりよ」

「キカ？」

伸一と幸歌が同時に声を上げた。

「……え、どうして"キカ"なの？」

「"M o m i z i" に "K" なんて入ってないし……」

「ふふふ、秘密よ。……でも、一つ目の理由はすぐ分かると思うけれど」

もう一つの現実世界での名前——、それは変えることが出来ないらしいし、ずっと使っていく大切な名前だ。だから、私はそれに "K i k a" を選んだ。

理由は2つ。

一つ目の理由は、私にとっては掛け替えのない、輝いている思い出の象徴から取った。それはとても大切で、絶対に失いたくないものだ。だからこそ、"もう一つの現実世界"にもその欠片だけでも持っていこうと思ったのだ。

そして二つ目は、私自身が己に科した戒め。この名を呼ばれるたびに痛みを感じて、決して許されない罪を思い知るために。

……とまあ、二つ目はともかく、幸歌ならきつと一つ目にはすぐに気が付くはずだ。と思っていたのだけれど。

「ええ！？ うそ……何？ 何かの単語？ フランス語とか？」

「さあ、どうでしょう」

本当に分からないらしく、うんうんと頭を押さえて唸りだした。その姿に心が和む。

続いて伸一の方を見ると、手を顎に当てて考え込んでいた。もしかしたら彼は気づくかもしれない。

「うーん、じゃあ、ゆっくり考えてもらおうかしら。……ちなみに、理由は2つあるわよ」

「もう、いじわるだなあ。……いいよ、後で辞書使うから」

「頑張ってください」

澄まして言えば、幸歌がむうと頬を膨らませた。まるでハムスタ―か何かのようだと思いついて見ていると、彼女がぷつと吹き出して笑い出す。伸一もそれに釣られたのか、笑顔を浮かべた。

「あ、ねえねえ、紅葉！……ううん、キカ！ 私たちのギルドに入らない！？」

「ギルドって、……さっき話していた《月夜の黒猫団》？」

「そう！ みんないい人たちだよ！ きっと仲良くなれる。私からみんなにお願いするからさ。……ね、どうかな？」

そう笑顔で誘ってくる彼女を、どこか遠い気持ちで眺めた。

——幸歌と同じギルド。

それはとても魅力的に感じられた。きっと、幸歌やその友人と共にとても素晴らしい時間を過ごすことが出来るだろうと確信できたからだ。

私は俯き、唇を噛み締めた。

「……とても嬉しい話だけれど……、ごめんなさい。遠慮させてもらうわ」

先ほど再認識したばかりなのだ。私と彼女たちの目的は明らかに違う。どう解釈したとしても幸歌たちのまっすぐな線とは交わることはない。

スタート地点から違うもの同士が真っ向からぶつかれば、どうなるかは目に見えていた。人間関係なんて、少しのすれ違いで、ほん

の小さなヒビで、粉々になって跡形もなくなってしまふ。どんなに仲がよくても、所詮硝子細工のように脆いのだ。

どちらも「リアル」での友人。優しい幸歌なら選び取ることが出来る、板挟みになってしまふだろう。

そもそも、私がいつかギルドに入る時がきたとしたら、間違いなく「現実世界」で全く交流の無い人にする。……むしろ、そうではなくてはならない。「桐ヶ谷紅葉」を知る人物が、一人でも居てはならないのだ。

「ごめんなさい、幸歌」

再度軽く頭を下げて謝る。ぼうっとしていた様子だった彼女は、慌てた様子で顔の前で両手を振り、

「だ、大丈夫だよ！ 私もいきなり過ぎたかなって思っているし、気にしないで！」

「そうそう、そういう事はゲームの中でも相談出来るだろうし！今はとりあえず、保留ってことにしておけば？ ≪SAO≫にログインしたら気が変わるかもしれないし」

「……ええ、そうね」

私の思考は露知らず、二人はまた笑って「気にしないで」と言う。申し訳なさが、胸を締め付けた。

「—————そういえば、紅葉、時間は大丈夫なの？ どこか行くって手紙に書いてなかったっけ」

「……あ、ああ、もうそんな時間になってしまったのね」

幸歌に聞かれて時刻を確かめれば、確かにもうそろそろ移動しなければいけない時間だった。子どもの人数が、先ほど見た時よりも増えている。

元々そんな長い時間会う約束では無かった。幸歌がこちらに寄ると言うので、電話で急遽交わした約束だったのだ。……ただそれが

分かっていても、名残惜しい雰囲気はもちろんあった。幸歌も何か察した様子の伸一も、浮かない顔をしたので、私は思わず、

「良かったら二人も来る？　ここからすぐ近くにあるから」

「……え、でも大丈夫なの？」

「そもそも紅葉はどこに行くの？　手紙でも電話でも、何も言っていなかったよね」

「児童養護施設よ。小学生に勉強を教えるボランティアをしているの。……本当は私の年齢では出来ないのだけれど、施設長の方が母の知り合いらしくてね。掛け合ってくれたらしいわ」

「……そういう施設ってさ、僕みたいな無関係の人間が行くのは難しいんじゃない？」

伸一が洩るような顔つきになった。幸歌も眉を寄せて、困ったような顔になる。

「そうね。……なら、私が今から電話してみるわ」

「う、うん」

やはり私も、少しでも長く二人と一緒にいたいという心理が働いているようだ。素早くハンドリムを操作しベンチから離れると、スマートフォンを鞆の中から取り出す。迷うことなく施設の電話番号へコールした。程なくして電話が繋がる。

『はい、弥栄学園でございます』

「私、学習ボランティアに参加している桐ヶ谷紅葉と申します」

『ああ、紅葉ちゃんね。どうしたの？』

「実は――――」

手短かに幸歌と伸一の事を話す。彼らがいかに真面目で、優しい性格であるかということも。

「どうだった？」

数分の通話を終え二人の元へ戻ると、すぐさま緊張気味な表情で声を掛けられた。私は笑みを作り、

「明日、11月生まれの子たちのお誕生日会があるそうなの。だから、その買い出しと準備のお手伝いをしてください、だそうよ」

「じゃあ、もう少し紅葉と居られるんだね！」

幸歌が満面の笑みを浮かべる。伸一もどこことなく嬉しそうな顔だ。

「よし、紅葉行こう！ 早く！」

「もう、そんなに急がなくてもいいでしょう？」

「え〜」

「じゃあ僕、紅葉ちゃんの車椅子押そうかな」

「伸一までそんな事言って……。大丈夫よ、一人で出来るわ」

「遠慮しないでよ」

「遠慮なんかしていないわ。伸一にやられると怪我しそうで怖いから言っているのよ」

「ひ、ひどっ」

「あははっ、紅葉〜、照れてるの？」

「照れる？ 私が？ どうして伸一相手に照れなければいけないのかしら」

「……紅葉ちゃん、僕もうそろそろ泣きそうだよ」

ボソリと伸一が呟くと、耐えかねたように幸歌が吹き出した。彼女は目元に浮かんだ涙をぬぐい、

「ね、今度さ、3人でどこか行かない？」

「あ、いいね！」

ゆっくり、ゆっくり私たちは進む。何だかんだ言いつつも、私は伸一に車椅子を任せていた。

「じゃあさ、水族館はどう？」

「……そういえば、来月リニョーアルオープンする所があるって聞

いたけれど」

「そうそう、そこ！」

「へえ、いいねえ！ 私、水族館は久しぶりかも」

「あ、そうなの？ じゃあ、冬休みにみんなで行こう！」

伸一が車椅子を押す手を止めた。その代りに、右手の小指を私たちに向かって出してくる。すぐに彼の意図を汲んだ幸歌が、その指に自身の指を絡ませた。

「ほら、紅葉も！」

「……まったく、この歳にもなってゆびきり？」

呆れた言葉を返しつつも、私も指を絡めた。

「「約束」」

今度こそは、絶対に。

何故かそんな言葉が頭の中に生じた。

*

木々に囲まれた児童養護施設。

カラフルな鉄棒や滑り台を横目に通り過ぎ、正面玄関の裏にある職員用の玄関から中へ入る。

「お姉ちゃん！ 紅葉お姉ちゃん！」

「みんなーっ、お姉ちゃんが来たよ！」

今か今かと待ち構えていた様子だった女の子二人が声を張り上げる。バタバタといくつもの足音が楽しげな笑い声と共に近づいてきて、瞬く間に周りを囲まれた。

「みんな、走ってはいけないわよ。危ないわ」

「大丈夫だよ！」

突進してきた子どもたちにそう注意すると、小学4年生の男の子が歯を見せて笑った。私も「仕方がないな」と思いつつも、笑みを浮かべる。

△ i 3 6 4 3 | 1 4 6 9 2 ▽

「紅葉ちゃん、凄い人気者だね」

「いつもこんな感じなのよ。どうしてかしら」

「紅葉が優しいからに決まってるでしょ！」

間を置かずに幸歌にそう断言されたが、あまり納得は出来なかった。飲み下せず、もやもやとした感覚を残す。

優しい？ 私が？

こんな冷酷な私を、優しいと形容してみ良いものなのか。私より、幸歌や伸一の方が断然優しいと思うのだけれど。

私は思わず後ろを振り返ろうとする。だがその行動は、視界に飛び込んできた何色もの折鶴に阻まれた。

「……え？」

「お姉ちゃん、これあげる！」

差し出しながらニコニコと笑うのは、私がいつも担当をしている女の子だ。戸惑いながらも、それを受け取る。

「これ……、千羽鶴じゃない。どうしたの？」

「えへへ、みんなに手伝ってもらったの！」

体と羽のバランスが悪いもの、頭と尾が捻じれてしまっているもの……、形はけて綺麗とは言いがたかったが、それらは間違いなく折り紙で出来た鶴だった。全く予想していなかったものを渡されたことに驚き、言葉を吞む。

一体、どれだけの時間をかけて折ってくれたのだろう。

……そして、一体何をこの子たちは祈ったのだろう。暑くもないのに、手のひらがじっとりと汗ばむ。声が震えそうになるのをなんとか堪えた。

「大変だったでしょう？」

「ううん、そんなこと無かったよ！」

「前にお姉ちゃんが折鶴の折り方を教えてくれたから、お礼に渡したかったんだ！」

「これで、きっと紅葉お姉ちゃんの脚も治るよね！！」

———嗚呼。

私は静かに両目を閉じた。

子供たちの真っ直ぐで穢れの無い願い。他意など無い願い。

けれどこの両脚は、願ったところで治らないのだ。描いた夢は塗り潰されたのだ。

願っても、“無駄”なのだ……。

「……紅葉さん、ごめんなさい」

すると、重い足取りで奥から歩いてきた少女が、辛そうな表情で

私に謝罪をしてきた。私より3つ年上の紀子さんだ。その向こうには、同じような顔をした中学生や高校生の人たちが立っている。

「私たちや先生たちが説明したのですが、分かってもらえなくて……」

「紀子ちゃん、どうして謝ってるの……？」

「そうだよ、別に悪いことはしてないでしょ？」

紀子さんや彼女の後ろの人たちの顔がますます暗くなっていく。

私は、そんな紀子さんたちを安心させるように微笑みを作った。

誰も悪くない。悪くは無いのだ。

脚が治るようにと願った幼い子供たちも、理解させることが出来なかった紀子さんたちも。

「ありがとう、嬉しいわ。大切にするわね」

「本当？ 部屋に飾ってくれる？」

「ええ、もちろんよ」

子供たちの頭を優しく撫でる。一体、どれほどの痛みをこの小さな体で受けたのだろう。一体、何度夜を泣いて過ごしたのだろう。

私には、推測することしか出来ない。実際に苦痛を受けた者にしか、理解など出来ない。

だから私は、せめて彼らを受け止める。それが、私に出来る最善のことだと信じているからだ。

「紅葉お姉ちゃんのこと大好きなの？」

後から様子を窺っていた幸歌が、そう子供たちに問いかけた。子供たちは少しも迷う素振りは見せず、

「うん！ 大好き！」

「当たり前だろ！」

「紅葉お姉ちゃん、いつも色々な事教えてくれるもん！」

純粹な好意を一斉に向けられた。今まで経験したこともないそれ

らに、築き上げてきたあの決意が瞬間的にグラリと崩れそうになる。私は咄嗟に顔いっぱい笑顔を張り付け、何とかそれに耐えた。

「ありがとう。……みんな、本当にありがとうね」

子供たちはエヘへと照れくさそうに笑う。先ほど千羽鶴を手渡ししてくれた女の子も、両の瞳を輝かせて言った。

「紅葉お姉ちゃん、どこにもいなくならないでね！ 約束だよ」

「……ええ、もちろんよ」

どうか、掠れそうになった声に気付かれませんように。

*

私は神も運命も信じていない。

けれども、私が交わす約束とは真逆に突き進むように運命が出来ているのではないかと、本気で思えてくる。

……ここまで来ると、そう考えてしまうのは仕方がないというものではないか。

馬鹿馬鹿しいと一蹴出来なくなってくる。

その日、ゲームの世界はゲームでは無くなった。

憤怒、憎悪、悲嘆、畏怖、焦燥、自棄、絶望、後悔、困惑、諦念……、そんな負の感情が2つの世界を同時に覆い尽くしたのだ。あらゆる者がそれに飲み込まれ、衝撃のあまり言葉を忘れる人々が多

くいた。

けれど私はその中でただ一人、笑っていた。周りからすれば、"狂気"として受け止められていたかもしれない。突き付けられた現実

しかし、実際は全く違う。正反対だ。

——歡喜。

「狂氣」ではないのだ。もし言うのならば、「狂喜」であろう。

嗚呼、なんて素晴らしいことだろう！

嗚呼、この身を焦がすような喜びは何と言い表せばいいのだろうか！

願いは完璧な形で叶ったのだ！

「もう一つの現実世界にしたい」……、これ以上の形で実現することなど不可能なはずだ。「もう一つの現実世界」を実現させるための策は、これの他には存在し得ないはずだ。

——否、もう「もう一つの」ではない。この世界は、もはやニセモノではないのだ。

ここはすでに、唯一無二の現実なのだ！

この上なく完璧だった。言うことなど一つもない。

私には到底到達出来ない域にあったものを、彼は――茅場晶彦はやり遂げてしまったのだ。

全身が震えた。

両手を胸に当て、ただ身を震わせた。背中がぎゅっと縮こまる。

私はひたすら愉悅に浸った。体の中が掻き回されているみたいに揺さぶられる。

こんな風に頭へどんどん血が上り詰めていくような激しい感情は、覚えている限りの記憶を探っても見当たらない。

逆らうことはせず、感情に身を任せた。狂おしいほどの喜びに、湧き上がるこの世界への愛しさに。

……ああ、愛おしい。この世界が愛おしい。

私は笑っていた。

真っ赤な空を————ローブを纏う巨大な死神を見上げ、笑っていた。

……笑っていた。

けれど、一つだけどうしても不可解なことがある。
頬に伝うこの涙は、一体誰のものなのだろうか？

第3話 狂っているモノは何？

地を這うような叫び声の大合唱。怒号や嗚咽も混じり合い、ほんの一時前まで明るい声で満ちて、穏やかだった場所と同じ空間とは思えない。

冷たい石畳の上で体を丸め込んでいたり、虚空を見詰め茫然と立ち尽くしていたり、あるいは神に祈りを捧げるかのように天を仰ぐ人々を横目で見やりながら、私は小さく『馬鹿らしい』と呟いた。そんな事をしていても、何も変わらないというのに。自分で歩かなければ、どうにもならないというのに。

冷めた気持ち吐き出すかのようにため息をつきながら空を見上げた。血を垂らした如く赤く染まっていたそこは、今はいっそ清々しいほどの青空だった。しかしあと数時間もすれば、夜が訪れる。この「現実世界」での、初めての夜が。

「ねえ、キカ」

花壇の隅に腰かけていた少女から声が掛けられた。親友の幸歌——否、サチだ。なるべくなら彼女とはここでは会いたくなかった。……救いだったのは、同じく大切な友人である慎一までもが巻き込まれていなかったことだろうか。

「どうしたの？ サチ」

優しい声音になるよう気を付けながら問いかける。彼女は私にとって特別だ。絶対に失いたくない。

だからこそ、《ソードアート・オンライン》を高校の部活仲間とプレイするのだ、と事前に彼女から聞いていた私は焦った。私は良い。赤の他人が死のうがどうなるうが構わない。しかし、彼女だけは。私の掛け替えのない、親友の幸歌と慎一だけは……。

慎一がゲームでよく使っているプレイヤーネームでインスタント・メッセージが送れなかった時は、心の底から安心した。発売日には買わないと明言していたが、どうしても不安だった。あとは、幸歌がログインしていなければ良い。そう、思っていたのに。

「……もみじ……」

大好きな少女の姿に、私は運命というものを呪ったのだった。

「ホンモノ」になった世界を、この時になってようやく呪ったのだった。

「サチ」

紙のように白い顔に、両手をそっと添える。冷たい。指先で撫でながら彼女の存在を確認した。

「サチ、部活の友だちとは連絡が取れたの？」

「……うん」

「そう、分かったわ。……私が様子を見てくるから、あなたはここの花壇に座って待っていて」

おそらく、パニック状態に陥っているこの街で誰かと落ち合うのは大変だろう。ただ幸いにもサチが、友人たちが使用する予定のプレイヤーネームを覚えていたため、連絡を取り合うことが出来た。しかし、彼女のこの精神状態では歩けない。私は何とも思っていないが、狂気に包まれた人々の間を縫って進むのは彼女のためにならないだろう。……そう思い待っているように言ったのだが、サチに止められてしまった。

「どうしたのか」とゆっくりとした口調で聞き返してみたが、答えは無い。私は訝しみ、彼女の前に膝を付く。

「サチ？」

「……ないで……」

「え？」

「……置いて、いかないで……」

か細い声だったが、今度はしっかりと聞こえた。私はぎゅっと唇を噛み、ほろほろと涙を流すサチの手を握る。

「……ごめんなさい、サチ。一緒に行きましょう」

「……………」

無言で俯くサチの手を引いた。幾度も繋いだその手がいつも温かったが、今日は氷みたいだ。

「……かえりたい」

「……………」

うわごとのように落とされたその言葉。それは矢のようで、私を鋭く射抜き、縫い止めた。サチの手を握る手に、思わず力を込めてしまう。

この場に居るほとんど全ての人が、同じようなことを呟いている。だが、私にとって彼女の言葉は重みが違った。胸が締め付けられ、呼吸が苦しくなる。

「……サチ」

「なんで……、こんな。どうして……っ」

「サチ、落ち着いて」

「いやだ、かえりたい。こわい、怖いよ」

「サチ」

足を止めて振り返った。涙でぐしゃぐしゃになったサチの顔を認め、一層胸が痛む。

「……きか？」

「サチ、大丈夫よ」

細い体を掻き抱いた。周りの目など気にするものか。どうせ、正常な思考をしているものなどほとんどいないのだ。

「キカ……」

私の肩口が濡れていく。それでも、彼女を離さなかった。……離せなかった。

このまま体がひとつになってしまえ。呼吸も、心臓も、体温も、何もかもひとつに。サチを、大切な親友を支えられるなら、どんなものでも惜しくない。

「だいじょうぶ」

私が、この世界を終わらせてみせる。

たとえそれが、私にとっての「死」だとしても。彼女のためならば、惜しくない。

私は、この世界に「ホンモノ」を望んでいた。「もう一つの現実世界」にしたかった。しかし、そこには大きな壁があるということも理解していたのだ。

「生」があるならば、「死」も存在する。それは至極当たり前のことだ。生と死は、絶対に切り離せない関係にある。

だが、ゲームである限り、これは適用されない。存在しないのだ、本物の「死」というものが。意識が消え、肉体が減ぶ、その終わりが「ゲーム」には存在していない。これでは、いつまで経ってもホンモノには成り得ない。永遠にニセモノのままだ。

死を迎えたとしても、生き返ってしまう。何度も、何度でも。それはあまりに重要性の低い命ではないか。本物の世界にしたいのならば、それは在ってはならないことだった。「現実世界」ならば、死神に見初められた時、あっけなく生を終えるというのに。ニセモノの世界には無い、本物の死が待っているというのに。

——しかし、しかしだ。この世界……、《ソードアート・オンライン》には、その死神が存在しているというではないか。

……ああ、それはなんて、なんて素晴らしいことなのだろう。

これで私は、本当の意味で「生きること」が出来る。今私が握っているのは、仮初のものでは無い、本物の己の命なのだ。

HPが0になれば死ぬ。そこに不純物は一切混入していない。ここはすでに、私にとって現実世界なのだ。世界は在るべきだったはずの形を変え、代わりに私の望んだ通りの姿となって動き始めた。ありえるはずがない、と思っていた世界に、私は今居る。

おそらく私は、かなりエキセントリックな人間だろう。泣き叫び、怒号を飛ばし、蹲り震える人々を理解出来なかった。不思議でならなかった。なぜ、という疑問ばかり渦巻いて、行き着く場所も無く私の中に積み重なっていく。

一体、何が狂っているのだろうか？

私か、私以外の約1万人のプレイヤーたちか。

向こうの世界か、 $\wedge$ ソードアート・オンライン $\vee$ か。

もちろん、私にとっては、向こうの世界の方が狂っていた。

私から何もかも奪っていくのだ。損なわせることしかせず、与えられるものなど何もない。

一方、この世界はどうだ？

何かを奪われる時があったのならば、それは自らの力不足のせいだ。弱いから失うのだ。力が及ばなかったから奪われるのだ。よって、少なくとも自分自身の命に関しては、理不尽で失うことは無い。それは相手がモンスターでも、プレイヤーでも、その他エトセトラのダメージであっても変わらない。

その時——、死神の鎌が振り落とされ首が飛んだ時は、私は己の不足分を呪う。

そして、死を甘受するのだ。

……ただ、それでも。それでもサチだけは、絶対に亡くしたくない。

彼女は、……彼らは私の光だ。あの狂った世界で、私を見失わんとして手を引き続けてくれた。サチはその中の一人。

そんな彼女を、彼女自身が望んでいない世界で死なせたくない。

実のところ、いわゆる世界からの解放——つまるところ攻略なんて、私にしてみたらどうでもいい。むしろ、その逆を望んでるらいる。

ようやく己が「生きること」が出来る場所に来ることが出来たのだ。なぜ、自らその場所を削るなんてことを思えるのだろうか。

だが、単に「生きる」と言っても、何もしないのでは実につまらない。空しく真っ暗な生活など真っ平御免である。落ち葉のように重力に従って落下し、水のようにただただ淡々と過ごす日々など、そんなもの生きているとは言えない。向こうの世界で過ごした時間と、何が違うと言うのだ。目標の無い生活なんて、ただ疲れるだけなのだ。

周りに望まれるまま虚像の「生」を引き延ばされた。私の意志は伴わないまま。起きて、食べて、寝る。それを作業のように繰り返していた。

だが、今は違うのだ。己が望んだものを手に入れたではないか。せっかくもう一度「生」を掴みとれたのに、向こうの世界と同じように漂うなんて、そんなことはしたくない。

ならば、本来のこの世界の姿に乗っ取り、最前線でモンスターと戦い続け、上を目指そうではないか。

何よりサチがそれを望んでいるのだ。叶えるためなら、どんな代償も惜しくない。過程で死んだとしても悔いることはしない。

私が、サチを解放する。この世界を壊すのだ。

そして、《ソードアート・オンライン》が消滅した時が、今度こ

そ私が死ぬ瞬間だろう。

この世界が消えれば、生を受けた私も消えるのだから。

至近距離に顔があるサチに悟られぬよう、吐息とともに嗤った。

———結局、どこへ進もうが、どう歩もうが、どんなに足掻こうが、私に待っているのは死だけなのだ。

*

突き抜けるような晴天。頬をくすぐる風を感じながら、何度目かのため息を飲み込んだ。

あの日から、約一ヵ月が経った。

現在第一層フロアボス攻略会議に私は出席しているわけなのだが、あまりにも相応しくない議論を繰り広げるプレイヤーに、呆れを通り越して尊敬の念すら抱いてしまう。

だいたい、ベータテスターがどうのこうのなど、今話すべきことでは無いのは明らかだろう。そんな下らないものを、大勢を巻き込んでやらないでいただきたい。

「馬鹿らしい……」

そんな言葉が漏れてしまうのも仕方がないはずだ。本当、やってられない。

石段に座った状態で折った膝に頬付けを付く格好は、さぞかし不真面目な印象を与えているだろう。しかし、これくらいは許してほ

しい。

それに私にしてみたら、今は攻略会議どころでは無いのだ。正直言って、即刻この場を立ち去りたい。そして一刻も早く対策を練りたいというのに。

自制していた溜め息が、今度こそ漏れた。

しかし顔を俯かせる姿勢を保ち、自然に長い黒髪が顔を隠してくれるように身をよじる。

……まったく、ここまであなたと被りたくはないのに。

ちらりと目だけを動かし、後方にいる「彼」の姿を見た。その姿を再認識して、また溜め息が出そうになる。

まさかね、とは思っていた。だが、そのまさかが現実になるとは思わなかった。

彼は私の事故の後から、どっぴりとゲームにはまりだした。そんな彼がこの世界に目をつけたのは、何らおかしいことではない。

だがそれにしあって、まさかこんなことになるなんて。

というか、今の今まで「彼」もこの世界に來ていることを知らなかったのだ。本当にどういうことなのだろう。幸運の女神とやらが、私にもまだ微笑んでくれているのか。……ああ、もう面倒くさい。億劫だ。そう考えよう。考量すべきはそこでは無い。

それに、私が主街区まで出てきたのは数えるくらいだ。今までの一か月間、ほとんどを迷宮区近くの村で過ごしていた。おそらくその影響が大きかったのだろう。別に狙っていたわけではないが、結論としては大変好ましい。

まあ何にしても、今日はシステムの補正でもかかっているのではないかと本気で思ってしまう。

なぜなら、今現在「彼」は、石段を後ろから数えた方が早い場所——つまり、かなり後ろの方にいる。対して、私は最前列。し

かも、[♪]エギル[♪]というプレイヤーをはじめた屈強な男たちに囲まれている構図だ。

まず、この状態でバレルことはないだろう。この先のことを考えたら、何か手を打たなければならないが。

「……それにしても」

たった今、そのエギルが目の中の茶番に加わり、場を収め始めた。正直これ以上続けられたら、私が飛び出してしまいそうだったので、安堵の息をつく。

私の嫌いなものベスト3は、下から順に、「しつこい」、「うるさい」、そして「無駄」。あの男は、めでたくこの上位2つに当てはまっていらっしゃる。

こういう会議は静かに、なおかつ迅速に進めていくもの。ああいう必要のない「無駄」な発言は場を混乱させ、やる気を削ぎ、また内容によっては疑心や怒りを生む。

今回も例に漏れず、現在この場の全員に不安が生まれているだろう。それは、上手く収束できれば良いことだが、悪ければこの場が瓦解する。

……すなわちそれは、この世界では「死」を意味するのだ。

本当、「無駄」なことに、いいものなんて何ひとつ存在しない。

「……おつかれさま」

「おう」

上手くあの男を丸め込んだエギルをちらりと認めて、ねぎらいの言葉をかけた。それに短く返事を返してきた彼は、どかりと私の横に腰を下ろす。

その姿を確認した青い髪青年——ディアベルは、小さく頷き、髪をなびかせながら再び中央へ歩いて行った。そして、ようやく会議が再開される。

どうやら、先ほど寸断されてしまったが、パーティを組むようだ。この場にいる全員が移動を———と思ったが、たいして動くことは無かった。……まあ、かくいう私も、例によって全く動いていないのだが。

彼らとは、数時間前に主街区とフィールドを分けるゲートで出会った。今回のボス攻略に参加すると聞いたので、私もパーティを入れてもらえるよう事前に相談していたのだ。予想に反し快諾してくれたおかげで、私は何の心配も無くここにいる。もし余るなんて事態に陥っていたら、必然的に後方の「彼」と顔を合わすことになっていただろう。ハッキリ言ってゾツとする。

「キカ、お前、武器は曲刀だったよな」

私が思わず二の腕を擦った時、他のパーティメンバーと話していたエギルがひよいとこちらを見て問うてきた。街中では私は武器を装備していないので、こうするしか確かめることが出来なかったのだろう。それでも覚えていたのだから称賛する。

私は笑みを作り、首肯しながら、小さな声でこう付け足した。

「そうよ。……一応、ね」

*

「無駄」。

それは、私の嫌いなものの最上位に位置するもの。合理的に進め

ていきたいのに邪魔にしかない。

向こうでのその対象は、「話すこと」だった。言葉を交わさなくても、何も損なうことはない。ただ時間を浪費するだけの、無意義な行動でしかなかった。

そして、その考えは事故後一層強固なものとなった。

私と話しながら、憐みの色を瞳に浮かべているのだ。そんなことばかりで、正直うんざりしてしまう。……それでも、スグと幸歌とだけは、有意義な時間を過ごせていた気がしていたが。

まあそれはともかくとして、この考えはこの現実世界に来て変わった。

「話すこと」——すなわち「情報収集」。これはこの世界で生き抜くための重要な要素だ。この現実世界で生き抜くためには、情報が己の命綱となる。モンスターを倒すにも、売買するにも、移動するにも、何をするにも情報は必要不可欠なものであった。ただ、向こうで鍛え上げられてしまったコミュニケーション能力の低さがあったため、「あること」をして誤魔化してはいるが。そうまでして補わなければならないほどに、「会話」は重要な行動であると私は認識を改めた。

一方で、重要性のレベルを下げた部分がある。その項目の一つに、「食べる」という行動が含まれていた。

食事という行為は、この世界では必要のないものである。装備やポーション類を揃えるために金を使った方が明らかに有意義だと言えよう。ちなみに、そう判断したのはこの世界が生まれた日と同日だ。今では空腹というものがなかったのか、と疑問に思うほど全くそれらしいものを感じない。

そのことに対して、さほど不安感を抱いていない。これで良いのだ。 unnecessaryなものは排除すべきなのだから。

「——そう、思っていたのだけれど。やはりこの思考回路は、常人のそれと大きく食い違ってしまいうらしい。」

「……会食？」

「ああ、そうだ」

会議が終わり各自解散ということになって、彼らと必要なことだけを話してこの場から離れよう、と思っていた矢先のこと。

ボス戦は一日おいた明後日に実施することになったのだが——

「親睦を深めるためにな。キカと俺らって、会話らしい会話をほとんどしてないだろ？」

「……ええ、まあ、そうだけれど……」

「それに、明日、ボス戦前に一度は戦っておきたいから、その相談も兼ねて」

エギルが、ニカリと歯を見せて笑う。後ろの方へ視線をやれば、パーティメンバーである男4人も一様に笑っていた。

私は、波打つ感情を抑えるために、ふうと小さく息をつく。

「……私も、あなたたちといきなりボス戦で闘うのは不安が残るので賛成です。けれど、会食の方は遠慮させていただくわ」

迷いはなく、それをはっきりと口にする。エギルは断られるとは思っていなかったのか、一瞬間の抜けた顔をしたが、すぐにフレンドリーな笑顔に戻る。

「何か用事でもあるのか？」

「いえ、そういうわけではなく——」

あっ。

声にならない声が出た。そこまで言って、慌てて口をつぐむ。つい反射的に否定の言葉を口に出してしまったが、なぜ「はいそうです」なんて言って肯定しなかったのだろう。そうすれば、たったの

6文字で済んだことなのに。

内心舌打ちしながら彼らを見れば、予想通りというかなんとか、ますます釈然としないとも言いたげな表情を浮かべていた。

……別にいいか。

恐れられるのは、疎まれるのは、もう慣れてしまっているのだから。

「私」が理解されないということは、すでに分かり切っているのだから。

「……私、こちらの世界の食べ物に口にしたことが無いの」

なるべく刺激をしないよう、出来る限り遠回しにそれを伝える。

予想通りというかなんというか、数秒後に彼らの雰囲気が一気に硬くなった。おそらく、裏に隠した意味にすぐ気づいたのだろう。

見開かれた10の瞳が、私をつんざく。けれども、血は一滴も流れ出すことはない。こんなことで、今更私は傷つかないのだから。

「……なんで、そんなこと……」

体感時間にして数秒。だが、おそらく実際は1分弱。

風の音にでもさらわれそうな、問うというよりも己の疑問をそのまま呟いたと形容した方が正しいだろう、わずかな声が絞り出された。私の耳はそれをしっかりと拾い上げる。

驚きに揺れている目を射止め、おもむろに口を開いた。

「向こうの世界での「食事」という行為は、生命維持のためだけだった。……それ以上でも、それ以下でもなかったの」

……私は、「生かされて」いた。

そう、例えるなら、墓場から無理やり掘り起こされて、「生」を与えられた化け物のように。

作られたハリボテの体に「命」が植えつけられた、ただの物体のよう。

私にとって「食べる」という行動は、「人工物」が壊れないように、また維持するためのもの、という認識だった。

ゆえに、「楽しさ」なんてものは微塵も存在していなかった。

「それに、この世界で生死を決めるのは、すべて「数字」。……たとえば、レベル、HP、筋力値、敏捷値……、ね？ 全部数字でしよう？」

考えればすぐ分かることはずだ。この世界での食事とは、ただ欲求を満たすためだけのものであり、生命に直接関わるものではない。戦況を左右するのは、ステータスと、己の勘と、スキルと、意志と、仲間と——。他にも要素は色々あるだろうが、「食べる」という行動そのものに意味があるとは思えない。

まあ唯一関係がありそうなのは、エギルが持ち出してきた「友好関係」だろうが……。そんなものどうとでもなる。そもそも私は、いわゆる「信頼」なんて、そんな薄っぺらく、軽い言葉に重点を置いていないのだ。

「この世界で何かを食べても、何かしらの効果が付いていない限り、これらの数字に何も影響を示さないのよ。……すなわち、必須とされてない「食事」という行為は——」

息を深く吸い、一気に吐き出す。

「無駄」よ」

岩をも砕くように、冷たく言い放った。彼らは恐れるような、憐れむような色を浮かべる。だが、いち早くそれらを消し去ったエギルが食って掛かるように口を開いた。

「だ、だが、……現実世界に還ったあとのことを考えたら……、とても良い行動とは思えないんだが」

「あなた達にはきっと意味が解らないだろうけど、……向こうの私は、もう死んでいるのよ。今更だわ」

「……は？」

彼らの顔がますます混乱を極めていく。理解出来ないのだろう。

仕方がない。……仕方がないのだ。

私は、目を細めてエギルを見詰める。そっと、空気に溶け込むように言葉を吐き出した。

「私にとって、ここが現実世界だもの」

気にするようなことではないじゃないか。

静かな笑顔を作った。だが、瞳はよほど冷たい色をしているのだろう。エギルをはじめとした男たち全員の体が揺れ、動きを完全に止めた。

それを見て、なるべく雰囲気が緩まるように気をまわし、口元を笑みの形に保ち続ける。

……この反応が、正しいものなのだ。きっと。

私は、常人ではないのだから。

それは、この世界が形を変えた瞬間に、明らかだっただろう。

——ああ、やっぱり、狂っているのは私。

世界でも、他のプレイヤーでもない。たった一体紛れ込んだ化け物の私が、狂っているのだ。

「……もし、パーティを組む気が変わっていないのなら……、明日、さっきの広場で待っているわ」

返事は待たずに背を向けた。腰下まである髪が揺れたのが自分でもわかる。

しかし、そのまま迷わず足を踏み出し、人混みをかき分けながら

進んだ。ちらりと後ろを見ても、すでに色とりどりの装備をつけた人々で壁が出来ていて、もはや今居た場所を視界に入れることすら叶わない。

「たぶん、来ないでしょうね」

誰からも返事が来るはずがないつぶやきは、人々の喧騒にかき消された。私自身も聞こえなかった程、きれいに。

仕方がない。これが当然なのだ。異物が奇異に映るのは、ヒトとしての当然の防衛反応だ。

自然と歩むスピードが速くなる。人が密集している所為なのか、嫌に息苦しかった。早く、はやく、空気を吸いたい。焦れる気持ちを宥めながら、知らず知らずのうちに足元を見ていた顔を上げた。

「……あ」

瞬間、冷たい電流が駆け抜けた。うるさいほどの周りの音が、急速に遠くなる。

——黒いコートに、黒いインナー。風になびく少し長めの漆黒の髪。同じ色をしているどこか憂いを帯びた瞳。

見紛うはずもない、かつて「兄」と呼んでいた存在。

∧ i 6 6 2 | 1 4 6 9 2 ∨

焦燥。

腹の底から湧き上がるそれだけに、突き動かされた。

体を無理やりに方向転換する。その際、真後ろにいた男に体がぶつかった。咎めるような刺す視線をちようだいするが、そんなもの構わない。

人垣を抜けた。

それでも走る。ただひたすらに、走る。

後ろは振りかえられない。もう大丈夫だと思っても、体はそれを呑み込んでくれない。

背中に、何かがびったりと張り付いているから。

「……っ！」

嫌だ。

嫌だ。嫌だ。嫌だ。嫌だ——……。嫌だ。

ぐるぐると渦巻く言葉。どろどろに溶けて、もう何の色だったかはわからない程どす黒くなって、底へ底へと沈んでいく。

奈落にいくら積み重なっても、あふれることはない。だが、同時に、苦しさも吹き出すことはなく、体の中を掻き乱す。

……ああ、それでも。

あの誓いを守るためには、仕方がないことなのだ。これは、自らの戒めだから。

肉に食い込み、赤黒い血液が流れ出続けるように手足につけた枷なのだから。

「は、……あ、うっ、あ、……っ」

自分の吐き出す乱れた息が、やけに大きく頭の中に響いていた。

*

ここはどこだろう。

靄がかかっていた意識がはっきりした時、真っ先にそう思った。

どうやら、闇雲に走っていた所為で、知らない路地裏へ入り込んでしまったようだ。けれど、人々のざわめきは遠くに聞こえているので、少し歩けば主街道に出られるだろう。

鼓動を収めながらそう結論付け、マップを開こうと右手を縦に振ったとき―――、

「ねえ、ちょっと。大丈夫？」

背後から響いた男の声にビクリと肩がはねる。けれど、耳に馴染んだその優しい声音に、不覚にも何かが溢れそうになった。

緩慢な動作で後ろを振り返り、神々しく輝く夕日のせいで逆光となっている人影を見詰めながら、零すまいと必死に「私」を押さえつけた。

第4話 君の瞳、僕の瞳（前編）

――2022年11月22日。

世界から切り離されたような、誰もいない閑散とした村。ポーションや武器を売り買い出来る店もなければ、食事処も無い。宿やその機能を持った家も無かった。そのためプレイヤーはおろか、NPCすら廃れた家に住む老人一人しかない。

正直、こんな場所が存在している理由は、何も知らないプレイヤーからすれば不明だろう。マップを埋めるためだけに付け足された村だと言われても誰も言い返せない。

誰も目もくれない。おまけに深い森を抜けた先にこの村があるので、わざわざ入って来ようとする物好きもいなかった。

だがしかし私はそんな辺鄙な村を拠点にし、フィールドへ出かけていた。数日に一度ポーション類を買い込み、攻略中に出会ったプレイヤーと軽く情報交換をする。大きな街へはほとんど行かず、ただひたすらに一人で過ごした。

情報は大切だ。この世界で最も大切な財産の一つである。だが、それ以外の目的でも会話は必要ない。

ギブアンドテイク。その関係こそが、一番良いのだ。下手に私情が混じれば途端に脆くなる。だからこそ、表面上では人の良さそうな笑みを作り上げ、話を掘り下げて聞き出す。

剣のような物理的な武器ではないが、情報も立派な武器の一つなのだ。

しかし、円滑にコミュニケーションが取れれば問題は無い。そこ

に友情の有無は関係ないからだ。嘘も突き通せば真実となる。線を引き、踏み込ませない。

——その状況作りには、ここは最適だった。もちろん、他の目的がこの村にあったがすでに終了している。それでもなおここに居続けるのは、そう……、ハッキリ言おう。誰かと一緒に過ごすのが苦痛で仕方ないのだ。どうせ壊れるのが分かっているのに、自ら関わろうとは思えない。

ここでひっそり過ごしていれば、誰とも話す必要はない。干渉されないのだ。一人閉じこもり、拒む。そうすれば労力を割いたり、手を煩わされることもない。

ただし、こんなことが出来るのは、もってあと2層上だろう。いずれ限界が来る。攻略は、ステータスだけで純粹に決まるものではないというのも十分理解出来ているのだ。

連携、信頼、愛情。

目には見えない「友情」とやらが、強固な武器となる。けれどもその一方で、破滅を招く武器でもあるのだ。相手を心から信じ、頼り、助け、守り——、自身の背中を微塵の疑いも無く預けられたのなら、それは何物にも代えがたい、強力で最高の刃と成り得るだろう。だが反面、崩れ去れば後は壊れるのみ。止められない。呆気なく終わるだろう。「信じていた」という気持ちが強ければ強いほど、深い、深い傷が生まれる。そしてその動揺は少なからずあるはずで、ゆえに自身の命まで脅かしかねないのだ。

まあそもそもとして、その理屈が通用しない私にはあって無いようなものかもしれないが。

「信頼」など、とうの昔に捨てた。

スグや幸歌、慎一の事はそれでも信じていたが、もう新たに親しい人を作るなど不可能に近いだろう。

そう、無理だ。私には、もう誰かを信じるなんてことが出来るはずもない。だがそれではこの先詰むというのは分かりきっている。ならば表面上だけでも取り繕えば良いのだ。たとえ中身が伴わないものだとしても。「仲間」という、形がそこにあれば良い。

たがせめて、あと少しは。

あと少しだけは、このまま誰にも関わらずに過ごしていたい。

もちろん、「攻略」も忘れてなどいない。私は、決めたことは決して曲げないのだ。ただ、たとえセオリーから外れていることだとしても、己が最善とするならば進むというだけのこと。

* * *

隙間風がガタガタと戸を揺らす。ゆっくりと瞼を空ければ、古ぼけたタンスと少し傾いた机が目映った。固い寝台から身を起こし、窓一つない物置のような室内を見渡す。

ここは、私が拠点として借りている家だ。この村で唯一鍵が掛けられる場所だった。床板が所々落ち、壁は隙間だらけ。おまけにかなり埃っぽい上に、土臭い。落ちた床板の下から草が伸び、部屋全体が薄汚れている。空気を入れ替えられるとしたら、この小さな空間に唯一存在する出入り口だけ。

明らかに不衛生でとても寝泊りし生活する空間では無かったが、寝ることが出来れば十分だった。寝台と机さえあれば困らない。生活の質なんてものは私にしてみたら付属品で、必須項目ではない。

隙間風がただ一つの難点だったが、どうせこの世界では寒くても風邪をひくことはないのだ。気にする価値もないだろう。

常に薄暗い室内が、無骨な裸電球によって照らされていた。風のせいかチラチラと電球が揺れ、それに伴い光もグラグラと照らす場所を変えていた。私はそれをボンヤリと眺めながらふと時刻を確認し———ため息をついた。

少しだけ休憩するつもりだったのに、どうやら本格的に寝ていたらしい。やはり、朝まで一睡もせずに狩りをしていたのが悪かったのだろうか。

睡眠を取らなくてもこの世界の身体への影響は無いはずなのに、何故か消耗する。集中力は落ち、動きは緩慢になって、感じるはずのない痛みを覚える。それはこの世界において死へ直結する危険なものかもしれないが———、だがその程度だ。ただまあ問題には違いないので、もっとも効率の良い睡眠時間を模索している。つまり、どこからが限界で、どこまでが削っても特に問題なく活動出来る範囲なのかということ。限界が分かれば効率よく行動が出来る。もちろん長期間継続するのは不可能かもしれないが、おそらく一線を越える前に数時間程度休憩すれば回復出来るだろう。

おそらく、行動に限界が来るのはこちらの世界の身体の問題ではない。こちらの世界での休息は、アバターである体を休ませるといふよりも、脳の処理を休ませるという意味合いの方が正しいはずだ。分かりきっていることだが、実際の身体は全く動いていなくても、脳は活発に動いている。このアバターを動かしているのは、あちらの世界で眠り続けているであろう私の脳。当然のことだ。そうでなければ、今日の前に映っている映像は「誰の」ものなのかという話になってくる。

ゆえに、疲れなどによって感じるこの世界での頭痛やめまい等の

症状は、「向こうの世界にある」自身の身体が受けるべきものを、この現実世界で感じている———ということなのだろう。「ゲーム」内での痛覚は消せるだろうが、自身の脳が発しているのならば抑えられないのは仕方がない事。

つまるところ、SAO内での頭痛等は、あちらの世界にある身体の悲鳴ではないか、ということ。あくまで私の推測に過ぎないけれど。

ただまあ、それがどうしたという話にもなるのだが。

所詮は痛みだ。集中力や判断力の低下が悩ましいところだが、それは経験と己の能力でカバーしよう。

本来の限界とは、「意識を失うまで」なのだから。

私は、少しの無駄も出したくない。ギリギリまで切り詰めるのだ。余計なことを考える暇を自身に与えないように。

全身を包む倦怠感を振り払って立ち上がる。立てつけの悪い戸を開けば、空は真っ赤に染まっていた。目を突き刺すような光と、胸を逆撫でしてくる景色。もう一度ため息を零した。

血の色みたいだ。

赤い、赤い血。毒々しい、赤と黒の絵の具を混ぜて垂れ流したような色。今にも、ドロリと地面へ滴り落ちてきそうだ。

「……気味悪いわね」

二の腕をさすり、ポツリとつぶやく。戸を静かに閉め、村の外へ歩き出した。

この村は、全方位を低い木の柵で囲まれている。しかも、村を切り離すように鎮座する森からこちら側は、モンスターが全く湧かない地帯だ。モンスターからも見放されて少し笑ってしまうが、こんな場所にずっといれば流石の私でも息が詰まるというもの。敵がい

ない事を良いことに、私はよく草の上に座り空を眺めているのだ。この荒廃した村はどこからどう見ても異質で、ただならぬ雰囲気も放っている。しかし、モンスターのいないフィールドは平和で長閑だった。唯一好きなポイントと言えるだろう。

ぼうっと周りを眺めながら、草が全く生えず土がむき出しになっている道を踏みしめる。冷たい風が、静かに肌を滑っていった。その流れに、自身の体をまかせる。

やがて土の道が草へと変わり、村の外へ出たことを伝えてきた。私は適当に歩き、風で踊る白いワンピースの裾を手で押さえながら、腰を下ろした。ここからずっと向こうに崩れた石の外壁も見え、そこから先は存在していないことが分かる。そのおかげで目の前の景色を遮るものはなく、赤い空だけが広がっていた。

広い、広い草原に、ポツンと一人きり。人の声も、モンスターの咆哮も、何も聞こえない。雑音の無いしっとりとした空間。ただひたすらに、風と、葉っぱと、鳥たちの声だけが、鼓膜を優しく震わせた。私は両目を閉じ、微かな音に耳を傾ける。

ひどく落ち着く、自然の歌声だ。

思わず口元がほころぶ。そして、私はさらに深く浸ろうと――

「ねえ」

ヒュウ、という風の音に混じって私に降りかかった声。聞こえるはずのない、男の声。ビクリと体が大きく跳ね上がった。しかしすぐさまバツと体を起し、反転しながら外壁側へ飛ぶ。突然のこと

バランスを崩したが、無理やり着地し剣の柄に手を添えた。腰を落とし、何があっても対応出来る体勢になる。確かにここはモンスターが湧かないエリアだが、HPが減らない圏内ではないのだ。

「あっ、ご、ごめん！　ごめんなさい！」

たった数秒。私の行動に呆気にとられた様子の目の前の男だったが、私が敵意を露わにしている事に気付くと、慌てたように謝罪を口にした。存外物腰の柔らかそうな彼に少しだけ警戒心を解くが、それでも男の目を見据えながら語気を強めて尋ねる。

「……こんなところで、一体何をしているのかしら」

「別に、キミに何かしようってわけじゃないんだけれど……」

苦笑を浮かべながら両手を上げ、危害を加える意思はないと主張している男。

年齢は、おそらく17、18歳くらいだろう。日本人離れた整った顔と、青空を溶かしたような2つの瞳。夕日に輝かく金色の髪は、頭の後ろで一つに結び背中に流していた。

私は柔和な表情でこちらを真剣に見つめてくる彼を見上げながら、息を深く吐き出して柄から手を離れた。

「……ごめんなさい。少し、ピリピリしていたみたいだわ」

そう言いながら肩の力を抜くと、目の前の人物もホッとしたような顔になった。手を下ろすと、私に数歩近づいてくる。

「気にしないよ。急に声を掛けた僕が悪いんだから」

「……それで、何の用？　ここら一帯は何もないわよ」

「あーうん、ちょっと言いにくいんだけど」

口ごもる青年に、私は首を傾げた。見ず知らずの私に一体何を言おうというのか。再び警戒心が首をもたげる。眉を少しひそめた私にまた何か感じ取ったのか、今度は幾分か早口で、

「いや、ちょっと道を聞きたいんだよ」

「道？」

訝しみながら見つめ返すと、青年が困ったように眉を下げる。私は咄嗟に目をそらし、ひとつ咳払いをした。

「それで、どこに行きたいのかしら」

「主街区」

「……は？」

全く予想もしていなかった答えに、思わず素っ頓狂な声が出た。絶句し、瞠目する。

「だから、主街区に行きたいんだ。迷っちゃって、どうしようかって思ってたんだよ」

「ちょっと待ちなさい。小さい村ならまだしも、主街区なんて――――」

マップを見れば済むことだ。

そう、どこかの村に行こうとして迷ったならまだ理解出来る。彷徨っているうちにこの村に辿り着いてしまったのだ、と言われても納得出来るだろう。しかし、しかしだ。主街区なんて、マップ上でもかなりの面積を誇っているのだ。どこに迷う要素があるというのだ？

「僕、かなりの方向音痴でね？」

「……へえ」

「地図もね、結構苦手なんだ」

「………そう」

「だからその、道を教えてほしいなあー、………なんて」
「………」

さっきまでの警戒心が嘘だったかのように霧散し、代わりにどつと疲れが押し寄せる。額をおさえながら、息を深く吐き出した。青年の顔を窺えば、彼は心底困ったような感じで、とても嘘を言っ

いるようには見えない。というか、騙すつもりならもっとマシな嘘を吐くだろう。私は唇を噛み締め、目をキツくつぶる。

「……送るわ」

「え」

あんぐりと口を開けて私を見る彼に少しイライラしつつ、言葉を重ねた。

「だから、主街区まで送ってあげるって言っているの」

信じられない、とでも言いたげな彼からフィと目をそらす。

「ちょうど、ポーション類を買いたいと思っていたし——」

近くの村で済ませていると言ったのはどのどいつだ。

「どうせヒマだったし」

おい、効率主義者。

「何より別れた後でまた道に迷うかもしれないじゃない。それで死なれたら困るわ」

……困るって、誰が？

というか、どこに困る要素があるというのだ。私と彼は知り合ったばかりの他人で、死のうが何の関係もないのに。そもそも私は、あんなに人と関わることを拒んでいたはずではないか——。

意味が分からない。自分の口から飛び出ていく言葉の意味が、完全に理解不能だ。

ほら、彼も啞然としたような顔をしているじゃないか。早く発言の撤回を……。

「ホントに？」

「……へ」

何で。

「ホントに、送ってくれるの？」

「え、ええ」

何で、そんなに嬉しそうなんだ。

「こんな私がナビゲーションで良いのなら……」
どうして。

「十分だよ！」

どうしてあなたは、そんな太陽のような眩しい笑顔を私に向けるの？

「僕、ネージュっていうんだ。よろしく！」

「わ、私はキカよ」

手を差し出してくるので、思わず握り返した。ネージュはますます嬉しそうに破顔する。

△ i 5 5 2 1 | 1 4 6 9 2 ∇

その目が眩むような表情に、私はどうすればいいか分からず顔を伏せた。そして、自分でも聞き取るのがやっとの音量でポツリと言う。

「……よろしく、お願い致します……」

さっきまであんなに不気味に見えていた夕焼けが、ひどく綺麗だった。

* * *

ネージュは、ずっとニコニコと楽しそうに私の隣で話していた。私はただ相槌を打ったり、たまに短い言葉を返しているだけだというのに。

「ねえ、お礼がしたいからさ、今夜食事でもどう？」

「……ごめんなさい。遠慮しておくわ」

「あ……、そっか」

一瞬残念そうに眉を八の字にしたが、すぐさま笑顔を浮かべて、
「じゃあ、街に着いたらちょっと付き合ってくれない？ 寄りたいところがあるんだ」

「……どこに？」

「それは見てのお楽しみ！」

「……」

「少しでもいいから！」

ね？ と、懇願するように見詰められて息が詰まる。顔を明後日の方向へ向けた。しかし彼が私をじっと見つめているのがヒシヒシと伝わってきて、内心辟易としながらも、

「……30分よ。30分だけ、その寄りたい場所とやらに付き合ってあげるわ」

左手で自身の髪を撫でながら彼を見れば、ぱあっとネージュの表情が嬉しそうに輝く。これ以上はないほど笑みを浮かんでいた。

「やった！」

「まったく……、迷わないでちょうだいね」

彼のあまりの喜びように少し呆れながら一応そう言えば、

「大丈夫！ 主街区の地理はこの2週間を掛けて覚えたから！」

「あなたそれ、SAOが始まってからずっと迷っていたってこと？」

今まで何をしていたのよ」

「え、ちゃんと覚えたよ？」

「いえ、そうじゃなくて……、……ああもう、いいわ」

はあー、と深く息を吐き出す。

それにしても、つい数十分前に会った人と私は何をやっているのだろう。やはりこんな約束はせず、さっさと別れるべきだったのか。けれども、今更反故にするのは気が引ける。適当に付き合って、満足してもらおう。

「……それはそうと、どうして私なんかに声を掛けたの？ あんなところに迷い込む前に、一人くらいプレイヤーとすれ違ったでしように……」

あの時間なら、攻略を切り上げて街や村へ戻るプレイヤーも多いだろう。その中には、当然パーティーだってあったはずだ。そのほとんどの人は、一緒に圈内へ戻りたいと言えぱ了承してくれるはず。こんなデスゲームならば尚更。

それなのにネージュは声を掛けず、その結果本格的に迷い、あの深い森を抜け村へ……。まあそもそも森に入った時点で気付きそうなものだが、それは今ここで追及するべき問題ではないだろう。ともかく、パーティーは組めなくとも相談すればほぼ確実に共に行動してくれたであろうプレイヤーには声を掛けず、森を抜けた先でロクな装備もなく一人座っていたプレイヤーに声を掛けた。

どちらを信じるかと問われれば、後者のほうが明らかに怪しいと答えるだろう。私なら見つけた瞬間、音を立てないように逃げる。仮に悪意のある人では無かったとして、ちゃんと取り合ってくれるかは分らない。ましてや、一緒に街まで行ってくれるかなど。実際私も、本当に気まぐれで彼と一緒に歩いているのだから。

だとするのならば、彼は危険を冒してまで私に話しかけず、攻略帰りのパーティーに混じるべきだったのだ。あの森は深いといってもさほど入り組んではおらず、舗装だってされている。来た道を戻ろうと思えば、簡単に出来るだろう。

まあこれは、顔に出てはいなくとも相当切羽詰まっていたのだ、と言われればおしまいなのだが。

私は若干の疑いを滲ませて彼をみやる。一見人は良さそうだが、まだ完全には信用していない。人間、いくらでも欺くことが出来るのだ。それはもう、冷徹に、残酷に、無情に。誰かを貶めよう、と思っているのならば。

「……僕は別に、深い意味があったわけじゃない。ただ、声を掛けられなかっただけで……」

「なおさら分からないわ。こんな私よりも、フィールドで会った人たちの方が話しかけやすかったはずでしょう？」

「え、なんで？」

「……は？」

本気な声音で疑問の声が返ってきて、つい声が裏返る。けれどもそれには構わず、ネージュはコテンと首を傾げながら続けた。

「どうして自分以外の人の方が話しかけやすいって思うの？」

「そ、そんなの簡単じゃない。何を考えていて、どんな行動に出くるかは後ろ姿だけでは分からないんだもの。すぐに引き返して、他のプレイヤーに助けを求めた方が賢明だったと思うわ」

「……僕には、君が優しそうに見えたけれど」

「何を根拠にそんな事が言えるの」

少しムツとしながら問えば、しかし彼は気にも留めずにカラカラと笑う。そして目を細めて穏やかに微笑むと、

「実際優しかったじゃないか」

澄んだ、混じり気のない声音でそう言われ、言葉に詰まる。私とネージュの髪を、風がサワサワと撫でていった。

「……優しくなんか、ないわ」

そう。私は優しくなんてない。冷酷で無慈悲な、血の通わない狂ったバケモノで。

「優しいよ。キカちゃんは、凄く優しい」

「どこがよ」

「どこって……、今のこの状況そのものでしょ。わざわざ、こんな風に街まで送る必要は無いんじゃないかな」

「……それは、あなたに死なれたら——」

「ほら」

私の左手が、大きな手に包まれた。

「さっき知り合ったばかりの胡散臭い男の事まで、そうやって心配してくれる」

「……本人が胡散臭いって言わないでちょうだい。自分の行動を疑いたくなるわ」

「あはは、それはごめんね。でも、事実でしょ」

その軽い物言いに、私は顔を顰めてネージュの顔を見上げる。涼しげなその表情には、やはりと言うか、悪意のようなものは感じ取れない。人を貶めようとする雰囲気だとか、嘲る顔だとか。そういう負のものは、全く。少しも。

変わった男だ、この人は。本当に。

「……というか、私の事「キカちゃん」なんて呼ばないでくださる？」

「えー、いいじゃん」

「嫌よ」

「何で？」

「そ、そんなのどうだっていいでしょう。嫌なものは嫌なのよ」

——紅葉ちゃん。

そう呼ぶ声が、脳内で青年のそれと重なる。

彼も、この青年のように変わった人だった。気が少々弱いが、友達思いで優しく、物腰が柔らかで。いつも、幸歌と一緒に私を支えてくれた。きっと彼……、慎一もこの世界に来ていたのなら、ネージュのように話しかけてきただろう。こんなにふんわりとはしていないだろうけれど。

「良いと思うんだけどな、"キカちゃん"」

「まだ言うの？ もう、だからやめてちょうだい。私帰るわよ」

「わあああっ!？ ご、ごめん!」

「……冗談よ。ここまで来て引き返すわけがないじゃない」

「ホント?」

「しつこい。そうだって言っているでしょう」

「……よ、よかった……」

ネージュが、吐息とともに安堵の言葉を漏らして相好を崩す。ラピスラズリの目が、柔和に細められた。その吸い込まれそうな色に、息が止まりそうになった。パツとすぐさま視界から外す。

「別に、そんな焦るような事ではないじゃない」

「——……に決まってるじゃないか」

「は?」

ぼそり。

ふて腐れたような口調で何やら返された。けれども聞き取れなくて、私は彼の方へ顔をやり視線で問いかける。しかし、彼はもう一度口にするつもりはないらしい。曖昧な笑みを浮かべている。

馬鹿らしい。私はそれ以上追及しようとはせず、その代わりに少し棘のある声音で、

「あなた、何だか私を全く疑っていないようだけれど。今日初めて出会った人間に、どうしてそんな事が出来るのかしら。まったく、理解に苦しむわ」

突き放すような毒を放る。怒り出したとしてもおかしくない。わざわざこういう言い回しを選ぶのだから、私は根っからの冷酷な人間だ。

さてどんな反応をするか。怒りか呆れか、それとも傷つけられたとでも言わんばかりの表情か。適当に予想をしながら、チラリと様子を窺う。

声を失った。

「……キカちゃん」

そこにあるのは、憤りでも悲しみでも苛立ちでもなく。紡ぎだされた私の名前には、刺々しさも何も含まれていなくて。

ただただ私を見透かすように静かに笑う、青年が居た。

「……ど……、して」

そんな真っ直ぐに他人を見ることが出来るのか。

ヒトほど、複雑で面倒で憎たらしくて厭らしくて浅ましい生物は他にいない。負の感情で溢れかえるコミュニケーションは存在しない。

思い出されるのは、もう何年も前から向けられていた、蔑みと嫉みと——とにかくよくないものが混ざりに混ざった、身体に纏わりついてくる不快な視線。私をあたたかく包むソレなんてごく少数で、やっと手に入れられるものだった。だから私は「信頼」なんて言葉を、とっくに自分の辞書から消していたのに。

「なんで、そんなに信じられるの」

「僕は、疑いたくないんだ。その人の言葉を、……心を信じて、寄り添っていたいんだ」

眩しい。

……眩し過ぎて、イライラする。

「そんなことを言っていたら生き残れないわ。綺麗事が通じる世界ではないもの」

——俺を信じて。モミ。

「はじめから裏切られることを考えていれば、余計な痛みを被らないわ！」

——ああ、やっぱり。兄さんもなんだね。

「キカちゃん」

「……私は、そんな純粋に人を信じられない」

蒼眼の青年が足を止めた。彼がこちらを見ている気がして、私は俯いて逃げる。主街区の門はもうすぐそこだ。

「……キカちゃんはさ、怖いんでしょ」

「————ッ」

「怖くて、震えてるんだね。温もりが全部偽りに思えて、ずっと凍えているんだ」

ネージュの柔らかい声が耳を撫でる。塞いで、遮断してしまいたかった。

「理解しているような事を言わないで。私の事なんて、何も知らないじゃない」

「そうだね。知らないよ」

あっさりとした肯定に、思わず顔を上げる。真剣な色を滲ませる2つの目と正面からぶつかった。

「キカちゃんの事は、何も知らない。でも、それで距離を置くなんてもったいないじゃないか」

再びネージュが歩き出したので、私も遅れて後を追う。

「知らないなら、……信じるのが怖いなら、これから知っていけば良いんだよ」

するりと、じんわりと、ゆっくり染み込んでいく。いつの間にか消えていた指先の感覚が戻ってきた。

「もしもその途中で無理だと思ったのなら、別に頑張らなくてもいい。けれどはじめから諦めてしまうのは良くない」

「……その結果で、自分が傷つくとしても？　裏切られたと、後悔しても？」

「その時は、自分を誇りに思えば良いんだよ」
「は？」

清々しいくらいの明るい笑顔が顔いっぱいに浮かぶ。まるで彼の髪色だ。だが、意味がよく分からない。あまりよろしくない声色を出して睨み上げる。

「誇りに思う？　……どうしてよ、むしろ情けないくらいだわ」

「情けなくない。凄いことじゃないか」

「……どこがよ」

「だって「裏切られた」って思ったってことはさ、それだけその人のことを信頼していた、って事だと思うんだ」

黄金色が夕日を弾いて目に刺さる。直視出来なくて、そっと視線を外した。

「だから僕は、たとえその人のせいで傷ついたとしても後悔しない。自分ではない誰かを心の底から信じられた自分を、誇りに思うんだ。それで胸を張って、笑ってその人に手を振ってやるんだよ。ありがとう、って」

朗らかに目を緩ませて、しかしハッキリと言ったのけた。迷いを感じさせないくらい強く、だがそれと同じくらい優しさが伴っている。

きっと彼はその言葉通り、たとえ痛みで苦しんだとしても悔いることはしない。確信できる。ネージュの心は大木の根なのだ。揺ら

ぐことは無い。

「……本当、馬鹿だわ」

「え、ひっどいなあ。結構真剣なんだけれど」

あははと笑いながら眉尻を下げて、頭の後ろに手をやる彼を見上げる。自然と口元に弧が浮かんだ。

「————でも、素敵ね」

「え？」

「……………そんな風に私も考えられたのなら、良かったのに」

身を切り裂く刃さえ糧に出来たのなら、少しは変わっていたのだろうか。

彼のように、真っ直ぐ背筋を伸ばして、キラキラと自身を輝かせていられたのなら、光の無い空間でも足を踏み出すことが出来たのだろうか……。

第5話 君の瞳、僕の瞳（後編）

夜の冷たい風が吹く。しかし、建物からは温かな光が漏れており、雰囲気やを和らげていた。私はそれにささやかな安堵を抱きながら、隣に立つ青年を促す。

「さあ、街に着いたわよ。どこに行けばいいのかしら。案内してちょうだい」

しかし、彼は私の顔を見つめ返すばかりで何も言わなかった。じっと、こちらを食い入るように見ている。居心地の悪さが勝り、私はパッと視線を外した。

私の声が聞こえなかったのだろうか。ちょうど夕食の時刻が迫っている。そのせいか主街区は人がごった返していて、人々の話し声が入り混じり溢れかえっていた。きっと、喧騒に吞まれて、聞こえづらかっただけなのだろう。

「ちよっと、ネージュ、聞こえてる？」

「……あ、ああ、うん」

「もう、しっかりしてちょうだい。ちゃんと連れて行ってよ」

相変わらずボーっと私を見てくるので、彼に苦笑を向けながら背中を軽く押した。ネージュはそれに弾かれたように体を跳ねさせ、先ほどから幾度となく見てきた笑顔よりもいくらかぎこちない笑顔を浮かべる。

「あ、ごめんね、そうだね。……こっちだよ」

言うやいなや、何の前触れもなく腕が掴まれた。グイッと強く引っ張られ、そのまま脇道に入る。薄暗く、明らかに人氣が無い。しかも向こうから人がくれば、両者ともにギリギリまで壁際に寄らなければすれ違えないだろう。それほど細くて高い壁に囲まれた道を、

ネージュに腕を引かれズンズン進む。人のざわめきが、どんどん遠くなった。

訝しみながら彼の後ろ頭を見詰める。さっきまでの穏やかな彼の雰囲気、偽りのものだったかのように感じられてしまった。つーっと、暑くもないのに何かが頬を伝い落ちる。

あんなにしゃべっていた彼のその口からは、今は何も出てこない。二人分の足音だけが不気味に響いている。

「ちよっと……、ねえ！」

「近道だから」

ざわりとしたものが背中に走り、非難の声を掛ける。けれど返ってくるのはあまりに短くて。とっさに右の腰に下がる剣を掴もうと手が伸びる。だがすぐに、街中ではそれほど意味を成さない事を思い出した。しかも、そもそもネージュに掴まれているのは左腕だった。思わず歯噛みする。しっかりと力が込められた手は、この狭い空間で振りほだけそうにない。ならばと、空いている右手の指を振った。メッセージ作成の画面を開く。宛て先を唯一フレンド登録している「彼女」にし、あとは送信ボタンを押すだけという状態まで持っていた。きっとこれを受け取った彼女ならば、その情報網で何とかしてくれるだろう。だが、まだだ。もう少しだけ。

私は短く息を吐き出すと、ウィンドウから指を離して、視界を塞ぐ背中に目をやった。作成したメッセージを破棄出来たら良い。そう思いながら、少し声を固くして再び声を投げる。

「ネージュ？」

「どうしたの？」

「……どこに行くのかしら。街の中心から離れて行っているようだけれど」

「うーん、内緒」

「そう」

空を見上げてみれば、暗い赤色と深い藍色が入り混じっていた。もうすぐ完全な闇に包まれるだろう。ますます不気味さが増していた。思わず眉をひそめ唇を噛み締めた時――、ふわり、と甘い匂いがした。

「着いたよ」

その声に、開きっぱなしにしていたウィンドウを慌てて閉じる。顔をバツと上げた。瞬間、言葉が消える。

「……え」

目を見開いた先、そこには……。

一面の、花畑が広がっていた。

色とりどりの花々が、街灯の淡い光に照らされている。ヒラヒラと舞うソレが、幻想的な雰囲気さらに引き出していた。私の両目が、ゆっくりと見開かれていく。

「……こ、こんな所が……」

「そう。あんな細い道を通る人ってなかなかいないし、ここに来るまでに何回も分かれ道があるからね。人が全然来ないから、静かで良い所だよ」

「これを、見せたくて……?」

「うん。キカちゃん、好きそうだから。……気に入ってくれるかどうか心配で、つい無言になっちゃったけど」

……ああ、そういうことだったのか。

変に警戒してしまった自分がおかしくて、喜ばせようとしてくれた彼に申し訳なくて、私は眉を下げて笑った。ネージュはそれにニコリと返し、掴んでいた私の手を名残惜しそうに離すと、花畑の方

へ近づいていく。よく見ればちゃんと舗装された小道もある。透き通る小さな池も合わさって、大分かわいらしいスポットだった。あまり人に見られないなんて、惜しい。……まあでも、たとえ彼と私しか知らなかったとしても、それはそれで良いと、ぼんやり思う。

「キカちゃん」

「何？」

「……怖がらせて、ごめんね」

「そ、そんなことないわ。大丈夫よ」

ドキリとしながら、軽く手を振って誤魔化そうとする。けれど彼は私が疑念を抱いていた事に気付いていたようで、申し訳なさそうな表情を崩さない。

「気にしないで、本当に平気だから」

「そんなわけには……、——ああ、そうだ！」

当然嬉々とした声を上げて両手を打ち合わせたかと思うと、ネージュが私の手を握って身を翻した。私はぎょっとして、

「ちよっ、ちよっと、ネージュ!？」

「こっち来て！」

「もう……」

引っ張られるまま彼に付いて行った。今度は後ろではなく、隣を。約束の30分がもうそろそろ過ぎようとしていたけれど、思考の彼方に投げ捨てた。

進行方向の先には、これまた可愛らしい小屋。どうやらNPCの店らしい。暗くて看板が良く見えなかったが、近づくにつれ文字がハッキリとしてくる。

「花屋？」

「うん。耐久値はそんなにないけれど、香りとか形が本物そっくりなんだ」

「へえ、面白いわね」

「ちょっと季節感バラバラの品ぞろえだけどね」

説明しながら手早く買い物を済ませると、こちらを振り向いた時には、その手の中には一つの花束が収まっていた。

「はい、どうぞ。付き合ってくれたお礼」

「あ、ありがとう……」

差し出された小ぶりの花束を、おずおずと受け取る。発表会だとか表彰式だとかで、数えきれないくらい花束は貰ったことがあるのに、彼から受け取る花はどうしてだかものすごく緊張した。視界が埋まるくらい大きくて立派な花束よりも、ネージュから手渡されるそのの方が格段に嬉しくて、私の胸を強く揺さぶる。

「……綺麗」

「喜んでくれたみたいで、良かった」

やわらかい香りに、私は笑んだ。

「これは……、スイートピーかしら」

「正解、分かるんだ」

「そりゃあ、まあ……。それにしても、本当に季節感がおかしいのね」

肩をすくめて言う。それに対して彼は苦笑いを返してくると思ったのだが……。予想に反して笑い声は聞こえなかった。私は首を傾げ、目を瞬かせながらネージュの両目を覗き込む。途端、きゅっと体が引き締まった。

視線が固定されたかのように外せない。それほど、清廉で濁りの無い碧い宝石が、私を一直線に射抜いていた。生唾を飲み込む。

「ネージュ？」

「……ねえ、キカちゃん。スイートピーの花言葉って知ってる？」

「は、花言葉？ ……ええと、確か」

突然に振りに、私は慌てて脳内の膨大なデータをひっくり返す。
女の子らしさがほしいと嘆いたスグとともに、花について勉強していた時期があるのだ。

思考時間は数秒。いくつかある花言葉からそれっぽい答えを弾き出した私は、若干戸惑いながら彼の瞳を見つめ返す。

「スイートピーの、花言葉は」

『ほのかな喜び』。

私がそう口にすると、ネージュが一層優しげに相好を崩した。

*

その日からネージュは、私が拠点とする村へ毎日のように訪れるようになった。

私は何をするというわけでもなく、笑いながら、時には冗談を交えながら楽しげに話す彼の話を、ただ聞くだけ。けれどそれもまあ悪くない時間で、ネージュと出会って二週間が経つ頃には、あの草原で自然と待ち合わせるようになっていた。

今日も私が迷宮区から戻って来ると、あの清純な黄金色が目に入る。内心その姿にホッとしつつ、歩く速度を速めて彼に近づいた。

「あなたも飽きないわね」

「あはは、……こんばんは」

「こんばんは、ネージュ」

あなたはきっと知らない。一週間と少し前までは、村に戻って来る時間なんて一定ではなかった。むしろ、迷宮区に籠ることなどあたり前だったというのに……。

今はこのささやかなこの時間が、ほんの少し、本当に少しだけ、多分血球ひとつ分くらいだけ楽しみなのだ。口が裂けても言っていないけれど。

「よくこんな所に何度も来られるわね。何もないじゃない」

「何も無いなんて、そんなことない」

彼は私が隣に腰を下ろすのを目で追いながら、ハッキリと言い切る。そして、とんでもない事をのたまった。

「君に会えるじゃないか」

「……ばっ、バッカじゃないの！」

ああ、感情表現がオーバーなこの世界が憎たらしい。大声で暴言を吐く私の頬が火照る。自分でも分かる。彼の前で真っ赤な顔を晒しているはずだ。それなのに、おかしそうに笑いう彼は言葉を止めない。

「僕ね、キカちゃんのこともっと知りたいんだ。前も言った通り、僕は何も知らないからね」

「………よくそんな恥ずかしいことが言えるわね」

「ん、何の事？」

「いいから、さっさとその口を閉じなさいよ！」

バシンと思い切りネージュの肩を叩く。痛い痛い、顔を綻ばせながら彼は痛がるフリをした。その様子を、目を細めて呆れの視線を送る。

ただ、私も、ネージュもその場から立ち上がることはしない。何も言わずに肩を触れ合わせて、きらめく星々を見上げる。

これが、約二週間かけて作り上げた彼との関係だった。およそ一カ月前——この世界に入る前の私からすれば、考えられないような事だと思う。協力者を作ることとは出来ても、「友人」や「仲間」なんて、自分とは縁遠いものだと思っていたのに。

「……それで、今日はどうしたの？」

「うーん、特に何もないなあ」

「まったく、あなたって人は……。とかいいつも思うのだけれど、あなた、ちゃんとレベル上げとか攻略はしているの？」

何だかんだ言いつつ、迷宮区近くの村まで通って来られるのだ。

それなりにレベルのあるプレイヤーのはずだ。刺々しさの中に若干の心配を潜ませて、青年に問う。

「ちゃ、ちゃんとやってるよ」

「本当かしら」

「ホントホント」

「……へえ」

「な、何か顔怖いよ、キカちゃん？」

「そんなことないわ。あなたの気のせいよ」

「だから、その笑顔が怖いんだってば。……そうだ、なら今度パー

ティー組もうよ。一緒にレベル上げでもしない？」

「……別に、良いけれど。どうしてそんな話になるのかしら？」

ネージュは自分の胸をドンと叩き、

「僕がちゃんと戦えるって所を見せてあげるよ！」

「……はあ？　ますます意味が分からないわ」

「いいから、いいから！　……それに、キカちゃんだったら——」

「」

「私だったら……何よ」

「……うん、何でもない。でもきっと、良い子だからキカちゃんとも仲良くなれる……」

ふっと、哀しげで苦しそうな面持ちになった。彼はコロコロとその表情を変えるが、こんなつらそうな顔は見たことがない。

私はつい眉をひそめる。ネージュには似合わない。

「……そうそう、今日街で聞いた事なのだけれど」

「うん？」

「明後日、第一層フロアボスの攻略会議をツールバーナの広場で開くらしいわ。何でも、もうそろそろボス部屋を見つけられそうなんですって」

「そ、そうなんだ」

ピクリと、ネージュの肩が小さく跳ねる。あまり見ないその様子に、今度こそあからさまに苦い顔をしてしまった。……この話題は失敗だっただろうか。コミュニケーション能力が欲しいと、これほど思ったことはない。

「……キカちゃんは、参加するの？」

「え、ええ。そのつもりよ。……あなたは？」

「僕は……」

言いづらそうに口ごもり、顔を伏せる。言い切るのを躊躇っているかの様子だった。私は瞬時にそれを察すると、彼の肩に頭を乗せ、なるべく明るい声音になるよう気を付けながら音を発した。

「出来ないならそれでいいんじゃないかしら。誰かに無理強いされるようなことでもないわ」

「で、でも」

「それに、中途半端な覚悟で来られる方が迷惑よ」

ネージュの言葉をさえぎり、厳しい毒をぶつける。彼の顔がぐし

やりと歪み、噛み締められた唇が震えていた。

言い過ぎだ。……分かれている、そんな事は。

困惑に揺れるネージュをギロリと睨み返した。ぐつぐつと鍋を煮込んでいるかのように、身体の中が熱い。喉の奥が辛い。腹の底から湧き上がるその感情を、隠すことなく彼へ向けて放出した。

ピリピリと肌を薄く裂く空気に、先に耐えくれなくなったのはネージュだった。吐息まじりに自嘲の笑みを滲ませると、

「……本当、情けないなあ。それこそ、カッコイイ所を見せるならボス戦で——」

「やめてちょうだい！」

何を言い出すのか。鋭い声を上げ制止をかける。驚愕したような真ん丸のスカイブルーの目が向けられた。困惑の色を深め、ウロウロと視線を揺れ動かしている。

私はその様子に眉をぎゅっと寄せると、深呼吸をして激しく暴れまわる炎を消火しにかかった。

「……き、キカちゃん？」

「……やめて」

「何を、言って……」

「そんな事をされるくらいなら、私はネージュの強さを知らないままで良いわ」

「でも、僕はそれじゃあ！」

「駄目よ。反論はさせない。……許さない」

強さとは、何も「ステータス」だけでは無いのだ。彼はすでに、十分示してくれているではないか。

その、清らかで優しい心で。

「ネージュ、聞いて」

「……うん」

背けていた顔を正面へと戻し、瞬きをする光をぼんやりと見上げた。ざあざあと、木の葉が鳴く。

「アンタはね、ヘラヘラ笑っている方が、ずっとずっと似合っているんだから」

ネージュは何も返してこなかった。驚いているのだろうか、怒っているのだろうか、それとも別の感情を抱いているのだろうか。分からない。分かるわけがない。それでも私はいつものように反応の予想をしながら、服の裾を握りしめて続ける。ゆっくり、ゆっくり、言葉の一つひとつを噛み締めながら。

「私、ネージュと過ごす時間、嫌いじゃないのよ」

「……僕もだよ。僕も、楽しくてしょうがないんだ」

いつもよりも低いトーンの声が空気を震わせる。ああ、と私は目を伏せた。

「キカちゃんと一緒に居ると、すごく楽しくて。不安も、疲れも忘れられて——」

「だったら、その日々をあなた自身の手で壊さないで」

私の、時間を壊さないで。

……認めよう。認めてしまおう。

私も、確かに楽しいと感じていた。

幸歌や慎一と歩いた夜の帰り道と重なる。彼らと過ごす居心地の良さと、ネージュとの時間は同質のものだった。何がどうしてこうなったのかは分からない。けれど多分、ネージュの眩しさが無視出来なかったのだ。

「あなたは、笑っていればいいのよ」

彼は雪だ。白くて、目が痛いくらい眩しい。手の平に舞い落ちると、スウと水へ変わる雪だ。一点の黒も無い。笑顔も、その口くちから紡がれる言葉の一つひとつでさえ、優しく体に触れる白い結晶

―――。

「……あ」

「ネージュ」。その、名前は。

パッと顔を上げ、その整った顔を凝視する。

「もしかして、あなた……」

「な、何？　なんか付いてる？」

「……いえ、何でもないわ。気にしないで」

「う、うん」

戸惑うネージュに苦笑いをし、背中を軽い調子で叩く、ポンポン、と。

「ネージュ、ひとつだけ言っておくわ」

「ん」

軽く打っていた手を止め、彼の上着をぎゅうっと握った。

「死んだら許さない」

ネージュが息を呑んだのを感じる。けれど顔を上げることは出来なくて、視線は彷徨った。彼の上着から手が離せない。

「……許さないわ」

焦りにも似ていた。心臓が、突き破りそうな勢いでバクバクと鳴る。手はやっぱり離せない。……力を抜いたら、彼がフラリとどこかへ消えていきそうで。儚く溶ける雪のように。

「死なないよ」

やがて、ずっと伸びてきた手が私の両手を包む。いたずらっぽい笑みを浮かべた。自嘲の笑みではない、綺麗な、雪白の笑顔。

「僕は死なない。キカちゃんに嫌われたくないからね」

そうして彼は、約束だと、必ず守ると、力強い声音で口にした。

———そう、言ったのに。

次の日、いつもの時間になっても彼は現れなかった。

空が藍色のベールに包まれても。光り輝く砂が散りばめられても。NPCである老人の家から、灯りが消えても。

私は嫌な予感を押さえつけながら、そろりと時刻を確認する。痛いほど寒いのに、冷や汗が伝った。

……別に、会う約束をしているわけではない。たまたま早く帰った私が、ふらりと立ち寄ったネージュと会っているだけ。約束など、交わしていない。強制しているわけでもないのだ。そうだ。そもそも、毎日ここへ来る彼がおかしい。

だからきつと、彼にも休みは必要だろう。私も、一人になる時間が欲しかったのだ。会いたくなくても、ネージュが来るのだから蔑ろにするなんて出来ない。仕方がない、ただそれだけの理由で付き合っていた。大丈夫、大丈夫。ネージュにだって乗り気でないことはある。疲れて、今日はこの草原には寄らず真っ直ぐ拠点へ帰ったのだ。

だから、だから、だから———。

ぐわんぐわんと揺れ、黒く染まる思考を無視した。送信出来ないメッセージなんて知らぬ存ぜぬを押し通し、意識の外へ投げ捨てる。言葉を並べて不快感の払拭を試みた。

けれど、消えない。それどころか嫌な感覚は増すばかりで。

こんなこと、今までなかった。しつこいくらい、私に付きまとっていたのに。

ギリと唇を噛んだ。「向こうの世界」だったら、確実に血が滲ん

でいるはずだ。痛みがチラリとも襲わないことにさえ、苛立ちを覚えてしまう。固く目をつぶり、自身の服を握りしめる。

ブルリと身体が震えた。おそらく寒さのせいだ。いつもの場所に腰を下ろし、ストレージからブランケットを引っ張り出して首まですっぽり埋まる。薄水色の毛布を、あらん限りの力で握りしめた。

どれくらい経ったのだろう。いつの間にか浅い眠りに入っていた私は、草を踏む音で勢いよく振り返った。

そこには、息を切らせた青年が立っていて。目を見開いて、私をしっかりと視界に入れていて。見慣れたその柔らかい金髪に、ぐつと喉を詰まらせる。

「き、キカちゃん、どうして——」

「ネージュ！」

ブランケットを翻して彼に詰め寄った。凝然と立ち尽くすネージュを睨み上げ、早口で捲し立てる。

「あなた、いつも勝手に来るくせにこれはどういうことよ！ 一体どこに行っていたの！」

私は、何に怒っているんだ。彼はただの、よく話すプレイヤーではないか。

頭の片隅で嘲笑する声が聞こえる。しかしそれを跳ね除け、彼へと言葉を投げつけた。

「ちよっ、ちよっと待って、キカちゃ……っ」

「だいたい、今何時だと思っているの。どうしてこんな夜中に、フイールドを歩き回って……！」

「待って、落ち着いてキカちゃん！」

「私は至って冷静よ！ それなのにあなたは、ネージュは……」

「……ッ」

「……………私が……っ」

ああ、止めろ。これ以上は、口に出してはいけない。

そんな必死の叫びは、空しく消え去る。

「私が、どれだけ心配したと思って――――」

「え……？」

ネージュの口がポカンと開かれる。漏れ出た驚きの声に、私はバツと後ろへ下がって距離を取った。

細かく震える手で、口元を押さえる。さーっと、血の気が引いていく感覚がした。慌てて体ごと彼から背け、逃げの体勢になる。そのまま片足を後ろへ引き、

「……ごめんなさい、忘れて」

「キカちゃん！」

逃亡を凶ろうとした私は、しかしネージュに肩を掴まれたことによつて阻止された。

「待って、待ってよ、キカちゃん。逃げないで」

「逃げて……なんて、いないわ」

「だったら、僕の話聞いて」

お願い。と、懇願するような声音が重ねられる。チラリと横目でネージュの表情を確認すると、いやに真剣な顔をしていた。何だか悪いことをしている気分になり、私は身体の向きを直すと、真正面から彼の瞳を見据える。すると彼は安堵したかのように肩を撫で下ろして頬をほころばせた。

「……ねえ、キカちゃん？」

「何よ」

「もしかなくてもさ、僕が来るのを待っていてくれたの？」

笑いを噛み殺す様を隠しもせずに、ネージュが楽しげに問うてる。そのストレートな質問に私はすぐさま顔を背けた。青空を溶かした目で見ないで。

「そ……、そんなことあるはずないでしょう。ちょっと星を見に来ただけよ」

「星って、……もうずいぶん前に雲で隠れちゃってるよ？」

確かに、寝てしまう前はあんなに光り輝いていたのに、今は厚い雲で覆われていた。明らかに天体観測をする天気ではない。

「……夜風に当たりたかったのよ」

「そんな薄着で、ブランケットまで被って？」

眉を八の字にして、ネージュが腕を伸ばしてくる。避ける間もなく、彼の手が私の頬に添えられた。

「……冷たいね」

「大丈夫よ。いくら冷えたって、何も問題は無いわ」

「そんなことない。問題ならあるよ」

「……どんな？」

「へ？」

「どんな問題が、あるっていうの」

つい険のある口調になった。ネージュはそれを気にする様子はなかったが、浮かない表情で私を見てくる。私は訝しみ、首を傾げた。

「ネージュ？」

「……待たせちゃって、ごめんね」

「は？ ……だって、これは」

「君のことを、あたためたいのに。逆に冷やしてしまった」

「……ッ」

慈愛に満ちた蒼穹を向けられ、息を呑んだ。なんで、一体どうして、そんな目をして私を見ているの。

戸惑いとともに溢れる疑問。しかし先ほどのように、この両足は、……私の意志は、逃げることをしなかった。

ネージュの手が、優しい手つきで私を撫でてきた。頬に温もりがじんわりと浸透してくる。あまりに心地が良くて、そのあたたかさを甘受する。

「もう1時を過ぎているじゃないか。こんな時間まで僕を待っていたなんて、不用心過ぎるよ。てっきり僕は、もう寝てしまっていると思っていたのに」

私が放った言葉と同じようなことを言うと、撫でつけてきていた大きな手が私からブランケットの端を奪った。ぐっと力を込められ引き寄せられる。私は特に抵抗はせずに、数歩分ネージュとの距離を詰める。さらに近くなった彼の顔を見上げ、そして怪訝に思いながら問いかけた。

「ねえ、ネージュ」

「ん？」

「……私がこの草原にもう居ないと思っていたなら、どうしてわざわざ来たの？」

モンスターが湧かないこのエリアは良い。しかし、何故危険を冒してまでこの場所まで来たのか。

そういえば、私が彼の姿を見た時、ネージュは息を弾ませていたではないか。まさか、走ったのか。何故？ 時間を割き、危ない橋を渡り、それでもここへ来る。どうして？ そこまでの理由が、ここにあるというのか。

ネージュは、一体、何を――――。

「……会いたかった、から」

誰に、とは問えなかった。ひゅっと、喉を空気が通り抜ける。信じられない気持ちで、彼の宝石のような輝きを放つ蒼を見詰めた。

黄金色の青年は、じっと私を捕えていて。それが、聞くまでもない答えで。

「君に、……キカちゃんに、会いたかったんだ」

困ったように笑いながら、しかし晴れ晴れとした口調で、一片の迷いもなく言い切った。それは、私をフリーズさせるのには事欠かない。茫然としたまま、彼の言葉に耳を傾ける。

「もう今日は諦めてた。でもそれでも、……君が居なかったとしても、ここに來たかった。会いたかったんだ。明日何があるか分からないこの世界で、少しでも時間を削りたくなかった」

たった、それだけの理由で。こんなにも、必死に？

「……馬鹿じゃないの」

「うん」

「そんな、いつでも会えるじゃない。またしつこく私に会いにくれればいいじゃない。……「明日」なんて考えないで、今を考えなさいよ」

「うん、そうだね」

クスクスとおかしそうに笑い声を上げる。私は呆れてしまって、けれど憎めないその純直さが傍にあることに安心した。

ふっと、表情が緩む。

ああ、やっぱり、あなたの2つの瞳はとても綺麗だ。

「ネージュが無事で、本当に良かったわ」

私の目と、彼の目が交わる。その瞬間、ネージュのそれが驚いたように見開かれた。

「……やっぱり、来て正解だった」

ふわり、とその柔和な表情をさらに柔らかく崩して笑った。

「やっと、僕の目を見て笑ってくれたね」

毛布がバサバサとはためく。黄金色の髪の毛が舞って、私の髪の毛もなびいていた。あんなに埋め尽くしていた嫌な感じは、もうどこにもない。

「何よ、それ」

自然に弧を描く口元が自分でも不思議だった。

「あなたって、本当におかしな人」

真っ暗な草原を照らすように、2人分のささやかな笑い声が夜空を包んだ。いつの間にか重くて厚い雲はどこかへと流れ去っていて、宝石たちが瞬きを繰り返している。

私はそれを肌で感じながら、穏やかで、ゆったりとした時間に、そっと体の力を抜いた。

∧ i 5 5 2 2 | 1 4 6 9 2 ∨

第6話 六花が贈るメッセージ（前編）

背後から掛けられた声に、パッと振り返った。

夕日の輝きに負けず劣らずの金色の髪。そこだけ青空が広がっているような、鮮やかな色をした瞳。カーソルには、「Neige」と表示されている。その5文字の名前と、相変わらずの雰囲気にとし、胸を撫で下ろした。

あれほど気持ち悪さぐるぐると渦巻き、視界は黒く染まっていたというのに、彼の柔らかな声を聞いた瞬間、すーっと嫌な感覚は消えていく。

「ああ……、ネージュ」

「キカちゃん……、どうしたの？ 何か顔色悪いよ、大丈夫？」

「……平気よ、何でもないわ」

彼は表情を暗くすると、私との距離を詰めてくる。大きな手が顔に伸ばされ、ふわりと包まれた。

……あたたかい。

私は詰まっていた息を吐き出し、ネージュを安心させるために笑う。

「本当よ。……本当に、大丈夫だから」

「キカちゃんの“大丈夫”は、信用出来ない」

「全く、心配性なんだから……。信じてちょうだい」

「無理」

ムツとしたような顔のまま、バッサリ切られてしまった。迷う素振りもなくすぐさま返されてしまったので、返事に窮する。蒼穹の2つの瞳があまりにじっと私を覗き込んでくるので、思わずさっと目をそらして逃げた。

話題を、早く変えないと。空回りする思考を内心で叱咤した。

「あ、あなたこそ、どうしたの？」

「へ？ あ、ああ、うん。キカちゃんの姿をみつけたから……」

「そうじゃなくて……、あなた、私に用があって声をかけたんでしよう？」

「ま、まあ、……そう、なんだけど」

齒切れの悪い答えに、チラリとネージュの顔を窺う。彼は眉を顰めて、思案するような顔つきをしていた。正直、彼にそんな表情は似合わない。

大方、出会った時の私の様子から氣遣ってくれているのだろう。

咄嗟に失敗した、と思った。

見せるべきではなかった。誰の目があるか分からない外で、出すべきではなかった。失敗、してしまった。いくら動揺したとはいえ、直前のエギルたちとの会話で思考が通常運転ではなかったとはいえ、平静を装っているべきだった。そのまま、何食わぬ顔をして今夜泊まる宿を探して、早々に寝てしまえば良かったのに……。

「ネージュ？」

「……あ、ごめん」

明らかに上の空な口調で、私も苦笑してしまう。

「……あなた、まさか、街の中で迷ったの？」

ぴくり、ネージュの肩が揺れた。蒼の目が真ん丸になり、こちらを捕える。眉はさらに八の字になり、ぎゅっと口が引き結ばれた。

それはそうだろう。完全に話題を変えに掛かっているのだ。いくらふんわりとした性格のネージュとはいえ、それくらい分かっている。現に彼は、どうするべきなのか困って、押し黙ってしまったのだから。あんなにお喋り好きな彼が、口を開かないのだから。

ごめんね、ネージュ。

心の中で謝罪を言いながら、それでも私は笑顔を作る。笑え、笑え。完璧に笑え。

ふいに、ネージュの顔が柔らかくなった。あ、と思った時には、「そうなんだよー！ いやー、ホント困っちゃってね！」

カラカラと明るい笑い声を上げ、さっきまでの神妙な表情が嘘だったかのように白い歯を見せて笑う。私の頬に触れていた手を片方頭の後ろへ持っていき、ポリポリと搔いていた。

そんな彼の優しさに、針で突かれたような痛みが胸に広がる。しかし、無駄にはいけない。言いたいことを飲み込んでくれたネージュに、私も返さなければ。

心底呆れた、という顔と口調をすぐさま作った。

「もう、そんなことだろうと思ったわ」

「え、バレてた？」

「当たり前じゃない。分かりやす過ぎよ」

「あっちゃー、……じゃあ、キカちゃんに助けてもらおうかなー」

「しょうがないわね。良いわよ」

————本当に助けてもらったのは、私のほうのくせに。

ゾワリと悪寒の伴う囁きが耳朶を撫でる。つい強張りそうになった表情を笑顔に保ち、

「で、どこに行きたかったのかしら」

「ええっとね……」

ネージュの隣に立ち、夕日に背を向けて歩き出した。すると、スツと彼の手が伸びてきて、私の右手が包まれる。反射的に横を見れば、子どもが悪戯に成功した時のように表情を輝かせる金髪の青年がいて。

「ちよっと、何を……」

「こうやって手を繋いだ方が安心するでしょ？」

「あ、安心って！」

「ほら、れつつごー!!！」

レッツゴーって、案内するのは私なのですが。

出かかった言葉を呑みこみ、代わりに小さく笑った。ザワザワと身体を這っていた冷たい感覚は、吹っ飛んでしまったので。

△ i 5 5 2 3 | 1 4 6 9 2 ▽

翌日。私の足は、昨日約束した広場に向かっていた。

しかし、ハッキリ言って来ていないだろうと思う。あれだけ異質な思考に困惑していたのだ。昨日の今日で普通の対応が出来るとは思えなかった。

これは、もしかしたら明日のボス戦は休むことになるかもしれない。その場合実質ドタキャンしたということになるだろうが、私の存在が隊の——正確にはある特定のパーティーの連携を崩す恐れがあるというのなら、致し方が無いのではないだろうか。幸い、ボス戦参加希望者の名簿を作っている様子は無かった。おそらく私一人が欠けたところで、気付く者はあの五人だけだろう。

——と、そんな事を考えながら歩みを進めていた私の足が、広場の端が見えたところで自動停止する。

「うそでしょう……？」

自分の唇から、か細い声がこぼれた。視界に映るのは、屈強な五人の男たち。その雰囲気は和やかで、刺すようなものは何一つない。見知らない人たちならば、気にせず隣を通り過ぎて行っただろう。

……そう、知らない人であったならば。

己の目に曇りなく映る五人を、私は知っている。昨日、私が勝手に険悪な雰囲気を作り出し、勝手に背を向けて立ち去ったから者たちで間違いない。

私は、どうすることもなくその場にただ突っ立っていた。何度か道歩く人とぶつかり体が揺れるが、そちらの方に気が向かない。

何故、あそこに彼らがいるのだろう。今まで出会って来た人々に、あのような人たちはいなかった。普通の思考回路を持つ人が行動するならば、私のことを遠ざけるのが道理のはずなのに。

胸の内に、モヤモヤとした形を持たない、けれどしっかりと突き刺してくる不安が溢れだした。正直言って怖い。この先へ行きたくない。

あまりに予想外の光景のせいで、私の足裏は完全に地面と一緒に固定されてしまった。

だが、いつまでこうしてはいられない。私はひとつ息を吐いて、足を地面から引っ剥がす。

一步、一步、ゆっくりと近づいていく。足を踏み出す度に、ドクン、と大きな胸の鼓動を感じた。

いつでも逃げられるように。どんな暴力を振るわれても、耐えられるように。ソロリソロリと、警戒しながら近づいていく。

すると、そんな私に気が付いたのか、目の前の五人の内の1人がこちらを指差した。

自分の肩が自然と跳ねたのが分かった。足が逃走する道を探して

動き出そうとするが、なんとか押さえつける。体が鉛と一体になったようだ。ひどく重い。

何て言われるのだろう。どんな表情をされるのだろう。蔑まれたり嫌悪されたりするのは慣れているとはいえ、自らそこへ向かうのは気が引けた。

「……おはようございます」

なるべく目を合わせないように、顔を俯けながら朝の挨拶を口にした。きつと、とても小さくて聞き取りづらだろう。それほど自分が緊張していると思い知らされて、けれどどうすることも出来ずに身構える。降り注ぐだろう刃から己を守るようシールドを張る。しかしそれは、考えもしていなかった方向からぶっ壊された。

「おう、キカ！ 待ってたぜ！」

「おはよう、キカ」

「やーっと来たか、遅いんだよ！」

「どうした、腹でも壊したかー!?」

「ばあか、ンなわけねーだろ」

「はは、そりゃそうだ！」

私を迎えたのは、罵倒でも、責め立てる言葉でも、ましてや距離を置くような言葉でもなく。朝の挨拶に相応しいと言えるような、日常会話そのもので。

「ど……して」

またしても予想外の出来事に、目を丸くすることしか出来ない。思考が停止する。

これは、どういうことだ。何故私は、こんなにも明るく、まるで当たり前だとも言わんばかりに受け入れられているのだ。

なんで、なんで――――。

「なんで、……ここに来られたのですか？」

あの会話内容では、私を気味悪がってもおかしくはない。誰も彼らを責めることは出来ないはずだ。

だから、彼らは今日、この広場へは来ない。明日のボス戦でも、一緒にパーティーを組むことは出来ない。そう、思っていたのに。

「は？ それはどういう意味だ？」

「どうって……、そのままの意味よ！ ……そ、それに、待ち合わせの時間なんて決めていなかったじゃない！」

それは、「来ないだろう」と予想していた理由の一つだ。私は昨日、場所は口にしたものの、時間までは言わなかった。残念ながらフレンド登録はしていないためフレンド・メッセージが来ない事は当然なのだが、同じ層ならば——現段階で第1層しか移動出来るわけがないのだから分かるはずだ——送ることが出来るインスタント・メッセージでも連絡が来ることはついになかった。そのため、今までの自分の言動を考え見てそう結論付けていたのに、見事すぎるくらいに覆されてしまった。

「お前の性格なら、嘘はつかないだろう？」

「……はあ！？」

「そうそう。絶対に来るだろうってというのが、俺たち全員の考えだったよ」

男たちが言う言葉に、エギルがうんうんと頷き、

「だから、あとは根気だ。ここで待っていればそのうち来るだろう、ってな」

「……な、なんて効率の悪いことを……」

「まあ、今こうしてちゃんと落ち合えたんだから、俺としては満足だな」

「……………念のために聞いておくけれど、インスタント・メッセージ

ジを送ろうって考えはなかったのかしら？」

私が恐る恐る問いかければ、エギルがあっと声を上げる。何だその反応。まるでその、名案を聞きました、みたいな顔は！

「そう言われたら、確かにその方法があったな」

「いや……いやいや、ちょっと待ってちょうだい。　まず真っ先に思いつくのがそれだと、私は思うわよ！？」

何なんだ、何なんだ彼らは。単に抜けているのか、それとも私を和ませようとしてもしてわざとやっているのか。

なんにせよ、ムキになるのが馬鹿らしくなってきた。大きくため息をつきながら、それでも最後にひとつ、どうしても確認しておきたいことを問う。

「……私の考えが狂っていること、理解しているのよね？」

これで「何のことだ？」なんて言われた日には、即行自分が拠点としているあの村まで戻ってやる。そう固く心に決めながら、若干睨み上げるようにエギルを真っ直ぐ見つめる。しかし彼はそれに全く臆した様子は無くて、少し悔しかった。

「考え方なんて、人それぞれだろ。確かに、そりゃ……一般的な考えと比べるとキカのはちょっと変わっているかもしれないが、俺にそれを否定する権利はない」

むしろ否定することの方が問題だろ、とエギルは豪快な笑みを浮かべた。

偽りの色は見えない。エギルの後ろにいる男たちも、同様に晴れ晴れとした笑顔を浮かべている。瞬間、ネージュのそれと被って見えて、口を引き結んだ。

しかし、その明るい笑顔を、ネージュの時のように素直に受け入れることが出来なかった。包容力のあるその雰囲気、腹の底から真っ黒でねっとりとしたタールのような苛立ちが湧き上がる。知ら

ず知らずのうちに拳を固く握りしめていて、ふるふると震えていた。
「……ヒトなら、恐ろしいものには触れたくない、理解出来ない存在には近づきたくない——そう考えるのが普通ではないかしら」
つい剣を含む声音が己の口から飛び出す。しかし取り繕うことはせず、ギッと鋭く目を細めた。

「は？ ……おい、何を……」

「だって、そうでしょう？ かなり拡大解釈すれば、幽霊や怪奇現象の類かしら。誰だって、そんなものには関わりたくないって思うのが当然の心理でしょう？」

「お、おいおい。自分を幽霊とかと同じ部類にするなよ……」

「“私”には、それが一番適している表現だと思うのだけれど。……違うかしら？」

私は、世界から逸脱した存在だ。そんなもの、“幽霊”だと、“化け物”だと表現しても、間違っただけだろう。

私の考えは、通常の人たちからすれば、吐き気すら覚えるものなのだろう。だが、そんなものを気にして、改める気など毛頭ない。しかし、周りはそうはいかないのだ。気にしないことなど、出来ないはずなのだ。

足並みを乱す存在は排除する。調和を壊す存在は弾き出す。異物が混じれば取り除く。不穏なものとは距離を置く。理解出来ない、受け止められない存在は拒絶する。相容れないと感じれば繋がりを断つ——。

それらは、身を守るための当然の行動。もはや脊髄反射と言っても過言ではない。どんなに恐れ知らずな人間でも、本当に“恐ろしいもの”を見たり経験したりすれば、咄嗟に自身の体を守ろうとする。それと一緒なのだ。

合っているとか、間違っているとか、そういう次元ではないのだ。

それが「当たり前」なのだ。それが「世界」なのだ。

私たちが生きている、世界なのだ。

私は少し小首を傾げながら、色黒の顔を見上げた。ずいぶん彼らを困らせてしまったらしい。昨日と同じ様に、難しい顔をして固まっている。

……これだから、私はいけないのだ。和を壊すことしか出来ない自分に、苛立ちの矛先が向かう。

睨んでいた目を伏せると、エギルたちへ向けて頭を下げた。

「……ごめんなさい、少し言いつぎたわ」

「い、いや、そんな謝らなくても！」

「いいえ、私が悪いの。ごめんなさい」

彼らはきつと、とても懐が深いのだろう。それだけなのだ。……それだけ、なのだ。

「キカ……」

「だから、と言ったらおかしいかもしれないけれど……。ご迷惑をおかけしたお詫びに、一つ、間違いを訂正して差し上げます」

エギルから、半歩離れる。そして、目を丸くしている彼らに背を向けてから、肩越しに口を開いて、少しいたずらっぽい笑みを作った。

「私、結構嘔吐きよ？」

そう、私を利用するくらいの気持ちで掛からなければ、トゲで怪我をしてしまうほどに。

「ほら、行きましょ。早くしなければ時間が無くなってしまうわ」
クスクスと笑い声を作りながら、後ろにいる五人を急かす。バタバタという足音を聞きながら、私は青い空を見上げた。

それから私たちは足早にモンスターたちが待つフィールドへと出て、当初の目的であった連携についての確認を始めた。

やはり、パーティーメンバーとこういう日を設けられて良かったと思う。ボス戦へと突入する前に一日置いてくれたあの青髪の指揮官に、胸の中で感謝の言葉を送った。突発的にパーティーを組むことはあったが、実質今までずっとソロだった訳だし、何よりSAOにログインするまでこの手のゲームをしたことは無かったのだ。明らかに知識が不足していたのだった。

エギルたちとの戦い中でそれらを補いつつ、幾度目かに遭遇したモンスターへ剣を振った瞬間。

ぶわっと、青白い光が舞い上がった。ほっと息をつくとき、辺りにレベルアップを知らせるファンファーレが響き渡った。

だが、私の頭の中は白だけが覆い尽くしている。何も思わない。何も感じない。ただ右から左に音が流れていき、機械的にそれを聞いていた。

すると、ゴツゴツとしたたくましい大きな手が、私の肩を叩く。

「レベルアップおめでとう」

手と同時に掛けられた声に、振り返る。そして、口元を緩めてから、エギルの瞳を見て言った。

「ありがとうございます」

ついでに、と、軽く頭を下げてみた。

しかし、顔を上げてみれば、どうもエギルは困った表情をしている。周りにいる四人も、似たり寄ったりの顔だ。

……ああ。

私の反応から、うまく盛り上がる事が出来ない、と言ったところだろうか。こういう時は、どうすれば良いのだろう。というか、

「おめでとう」と言われたのだから、「ありがとう」と返せば間違
ってはいないはずなのだが……。私はどこかミスをしただろうか？
「……あ、あの……」

「そ、そういえば、キカって左利きなんだな！」
「えっ？」

沈黙に耐え切れず口を開いたところで、妙に明るい声で言葉が被
せられた。まったく文脈がないそれに、自分でもらしくないと思
う素っ頓狂な声が出た。もっとも、この発言をしたルークという茶
色い短髪の男の方が焦っているようだが。

「……それが、いかがなさいました？」
「あーいや、武器を左手に持っているだろ？……左利きって珍しい
なと思ってだな……」

思考を通常運転に戻しながら尋ねれば、相当苦し紛れだったらし
く、なんとも歯切れの悪い答えが返ってきた。

……左利きということだけで騒ぐなんて、学生ですかあなたは。

——と、一瞬口が滑りそうになるが、そのくらい空気がまず
かったのだと解釈する。

右の腰に下がる曲刀を手にとった。少し、彼らの体がぴくりと動
いたような気がしなくもないが、綺麗さっぱり無視してニッコリと
笑顔を作る。

「いいえ、私、本当は右利きですよ。ちなみに、両利きでもありま
せんし、何か特定の行動だけ利き手が違うってわけでもありません。
システムの動かない、なんてことでも無いですよ」

左手で曲刀をもてあそびながら、「ほら」と言って、右手をグー
・パーと数回動かして見せた。彼らはポカンと口をあけ、フリーズ
したかのように動きを止めた。しかし、やがてその表情は驚愕にか
わり——、

「つまり、利き手とは逆で武器を持っているのか！ 相当難しいはずだろう！？」

「全く危なげなく剣振るっていたよな！？」

ぐわっと身を乗り出して、今にも掴みかかれそうな勢いで五人に迫られる。

……特にエギルさん。あなたは素晴らしいほど迫力満点なので、から、そんなに目を見開かなくても十分です。

少しばかり勢いに圧倒されながら、それでも笑顔を保ちつつ、何の気負いもせずに言った。

「だって、曲刀を手にした瞬間から左手だったもの。一週間もそうしていたら、慣れてしまうのがふつうじゃないかしら」

しかし、さらりと口にした発言が、まったく不足なく、爆弾と同じ威力を持っていたようで、彼らはもう口をパクパクとするだけで声すら出していない。

さっきまでの静けさはどこへ行ったのか。ただ、盛り上がっている、というのには少し空気が違う。端から見れば、違和感を覚える光景かもしれない。

およそ2分。

なんとか落ち着きを取り戻しつつあるエギルに問うた。

「そんなに驚くことかしら？」

「……そりゃ、びっくりするってモンだろ。遊びでプレイスタイルを変えることもあるだろうが、この生死に関わる世界でなあ……」

「そう、かもしれないわね。何が起こるか分からないのが、この世界だもの。……でも私は、“無駄”なことはいわ」

私は、無駄が大嫌いなのだ。

行動しているからには、ちゃんと相応しい理由がある。

「だって、右手でしか出来ないことがあるでしょう？」

「右手？」

「そう。……まあ、ふさがったからと言って、完全に出来なくなる
ことではないのだけれど……」

私にとっては、「それ」をすばやく出来ない方がまずいから。

「それって……、何だ？」

「ふふ、何でしょう？」

漫画ならクエッションマークがいくつもエギルの頭に浮かんでい
るだろう。自分の右手をながめながら首を傾げている。私は苦笑い
を作りながら、

「解らなくても別段困るわけではないのだから、そんな真剣に考え
なくてもいいわよ。……さて、もうそろそろ行きましようか。もう
すぐ迷宮区に着きますし……」

片足を前へ出し、……しかしそこで言葉も動きも止まった。エギ
ルとルークが、驚いたように私を見ている。

「どうした、キカ」

「い、いえ……クエストログが……」

「ログ？ 何か出てきたか？」

「こっちは何も出てないぞ」

場を一気に不穏な空気が包む。エギルが不可解そうに眉を顰め、
他の面々も不安げな顔を私に向けてきていた。

「キカ、それに何て書いてあるんだ？」

静かに、……いや、恐れを滲ませたような押し殺した声で問いか
けられる。おそらく、全員の脳裏に、あの血の色をした空が過った
のだ。

この世界は、何が起こるか分からない———そう、私が口にし
たばかりなのだから。

それは私も同じで、恐怖にも似た言い知れぬ感情が体の中心で渦巻く。カラカラと、口の中が乾くような感覚に襲われながら、何とかその一言を紡いだ。

「"当選おめでとうございます"」

いよいよ全員に緊張が走る。クエストログには、あまりにも相応しくない文面だ。というか、そもそも"当選"とは何のことなのだ？私は何に選り出された？

「キカ、一応聞いていいか？」

「……何かしら」

「お前、今何かクエストを受注しているか？」

「いいえ、何も」

簡潔に淡々と答えたが、内心は穏やかでは全くない。

何だ、これは。何だ、この嫌な予感めいたものは？

「————キカ！ 戦い方については十分確かめられたし、もう主街区に戻ろう！」

強張った表情のルークに思い切り腕を引かれる。慌てて彼らを見渡せば、皆一様に青白い顔色をしていた。

この異様な事態を考えれば、確かに街へ一旦戻ったほうが良いかもしれない。今やるべきことは親睦を深めることなどではなく、情報を集めることだ。

私もそう結論付け、頷き返そうとして————、

「……え？」

目の前が、体が、青白く染まっていた。体の底から浮き上がるような感覚が迫ってくる。

これは、"あの日"と同じ感覚だ。あの、チュートリアルのある会場

へと強制的に飛ばされた時と。

「キカ！！」

青い光が一層強くなった刹那、エギルのがっちりとした腕が伸ばされる。私はそれを掴もうとして、しかし、叶うことはなくフツと視界のすべてが青でいっぱいになった。

*

*

*

ピーチチ、チチチ。鳥たちの囀りが、聞こえた。

知らず知らずのうちに閉じていた瞼を少しずつ持ち上げると、最初に飛び込んで来たのは深い緑だった。その次に、茶色。

そこでようやく、ここは森の中なのだということを理解する。

「こ……ここは……？」

見たことの無い場所だった。そりゃあ行ったこと無いエリアくらい当然あるだろうが、それにしあって不思議な空間なのだ。しかし、あんな強制移動をされた先だ。「普通」なわけが無い。

状況に吞まれたせいでいくらか早くなっていた鼓動を押さえつける。大丈夫、落ち着け。こういう時こそ冷静に行動すべきなのだ。森の澄みきった空気を深く吸いこむ。ふーっとゆっくり吐き出しながら、辺りを見渡し始める。

木々が覆い茂り、前も後ろも道とは言えない道が続いていた。一応道から逸れて森を掻き分けて進むことも出来そうだが、先に行けば行くほど暗く、何があるのか全く見通せない。また、目視した限

り複雑に木が乱立しているようで、最悪迷ったら出て来られるのか不安だ。ここは、素直に開けた道を歩くべきなのだろう。

試しにマップを開いてみたが、案の定というか、自分が立っている周辺以外何も表示されていない。マッピングしろということなのだろう。無言でウィンドウを消す。

耳を澄ませば、演出であるはずの鳥たちは楽しそうに歌っていた。色鮮やかな彼らは自由に飛び回っていて、思わずため息をつきそうになる。青々とした葉がまた一枚、静かにひらりと舞い落ちていった。

「どうすればいいのだろう……」

どこかを目指せばいいのか、それとも何かを見つければいいのか。イベントかクエストである可能性が高いというのに、肝心のストーリーは一切進まない。かといってアナウンスも無い。右下のログは完全に沈黙しており、八方塞がりだった。

……もし、もしこれが何かのバグだとして。同じ現象に陥った人はいるのだろうか。というか、この普通では無い世界で、そんなバグを修復出来る人はいるのだろうか。そもそも気付ける人がいるのだろうか。

普通のゲームであるならば、GMに連絡するのが常套手段であろう。しかし、今のこの世界で、果たしてそんなものが機能しているのだろうか？

「……ッ」

電流のようなものが足先から頭のとっぺんに目掛けて駆け抜けた。もし、マップのどこに存在しているかも分からない場所にいるのが、私一人だけだとしたら？ エギルたちが街に戻っても、この現象を誰も聞き入れてくれなかったとしたら？ 他に突然消えた人がいたとしても、プレイヤーにはどうすることも出来ない問題だった

としたら……？

「まさか、このまま……」

先ほど消したばかりのウィンドウをもう一度表示させ、メッセージ作成画面を出してみる。だが、予感していた通り、送信ボタンは押せなかった。それは、ここがどこかのダンジョンであるということの意味しているのか。はたまた、通常であればプレイヤーが侵入出来ないようなエリアへ来てしまったということなのか？

嫌な予想ばかりがどんどん膨れ上がっていく。頭を振って払拭しようとするが、消えるどこかますます強くなるばかりだ。静寂さを維持しようとすればするほど、手足が冷えていく。思考が絡まり、まともに働いてくれない。

こんなの、私でも対処法を知っているわけじゃないか。

「……はあ、は、……っ、あ」

目の前が真っ暗になった気がした。ぐわん、と大地が揺れる。

———駄目だ、駄目だ駄目だ。冷静になれ。乱されるな。落ち着け、考えろ。慌てたらそこまでのものだ。何も進展せず、事態は悪化するだけなのだ。だから、鎮まれ。

「仮にここがダンジョンだとして……、普通のマップを繋がっていったとするならば、もしかしたら知っている道に出るかもしれないわ」
「もしかしたら」を多大に含むその仮定を、自身に無理やり飲み込ませる。ねじ込ませる。

……そう、それならば、ここに留まっても仕方がない。とりあえず歩こう。幸いマップ機能は動いているだ。スタート位置に戻って来ることは出来る。

己に言い聞かせ、そろりと足を踏み出した。どっちへ行こう。どちらが正しいのだろう。前か、後ろか———。

早くも迷いが生まれて眉を寄せる。が、その瞬間、ガサリという、

私が発したのではない物音がいやに鮮明に耳を打った。間髪入れずに振り返ると、私と目が合ったそのプレイヤーは口をあんどりと開けていて。

「……き、キカちゃん!？」

何かこのシチュエーション、昨日もあったような気がする。

そんな的外れなことを思った瞬間、全身の力が抜けてその場にへたり込んだ。ひどく狼狽した顔でこちらへ駆け寄ってくる姿を両目で捕えながら、金色の青年の名前を呟く。

「……ネージュ……」

ああ、なんてことだろう。足が、力の入れ方を忘れたと言わんばかりに動かない。

私へと差し伸ばされる優しくて大きな腕を、ぼうっと見上げていた。

第7話 六花が贈るメッセージ（中編）

腕を引かれるまま寄りかかった大樹から、空を見上げる。けれど、覆い茂る緑のせいで青色を目に写すことは出来ない。

ひゅうと、心地良いような、底冷えする恐ろしさを孕んでいるような風が、頬を撫でていく。

「……キカちゃん、落ち着いた？」

「ええ、ありがとう。もう大丈夫よ」

言いながらネージュの方へ顔を動かせば、彼は安心したようにふわりと笑った。私も笑みを浮かべて、左手の方へ意識を集中させる。

実は、地面へ座った際に自然と手が重なりあっていたのだ。けれどネージュからは特に何も言われなかったし、私も特に退ける理由が見つからなかった。そのままにしていた。すると、そこからじんわりと温もりが染み込んできたのだ。安らぐような、くすぐったいようなそれは私の混乱しきっていた思考を、いとも容易く宥めてしまったのだ。

彼は不思議だ。たったこれだけで、その手のあたたかさだけで、私を落ち着かせてくれる。その目に痛いほどの輝きで、私が歩いている道を照らしてくれる。

△ i 5 5 2 4 | 1 4 6 9 2 ∇

「……ネージュも、突然このエリアへ飛ばされて来たの？」

「うん。青白い光に包まれて……まるであのチュートリアルの時みたいだったよ」

「そう」

私と同じだ、全く。

しかし、同じ現象に遭った人が居て安心すべきなのか、それが大切な友人であるネージュであったことを悲しむべきなのか分からない。しかも状況は全く変わっていないし、打開策が見つかったわけでもない。

私は、どうしたら彼と共にここから脱せるのだろうか。色々な感情がごった煮されてしまい、どす黒い色のそれに翻弄される。再び、グワンと押し上げるような気持ち悪さが全身を襲った。

「……ッ」

「どうしたの？ ……まだ具合悪い？」

「だ、大丈夫。心配しないで」

「無理しないでよ。……どうせ、見ている人はいないんだから」

気遣ってくれる言葉から、少しいたずらっぽい声音に変わった。

……と、認識した瞬間、私の肩に重みが加わる。彼が私との距離を詰めてきたのだ。触れ合うことになったそこから、じんわりと温もりが広がってくる。

ゆっくりと視線を横へ向ければ、私のすぐ横にネージュの横顔があった。サラサラとした綺麗な金髪が、頬をくすぐっている。

「……ネー……ジュ？」

「ちょっと寄っても良い？ 肌寒くてさ」

「良いけれど……、ああ、それなら私のブランケットを貸しましょうか？」

確かに人によっては寒いと感じるかもしれない。私は右手を持ち

上げ、ウィンドウを開こうとする。だがその刹那、身を乗り出してきたネージュによって腕を掴まれた。

「わっ、ちょっ！？ 何して……！」

「いい……、いらない」

———近い。

ボツと一気に顔へ熱が集まった。彼が身に付けている深緑色で、視界の半分を奪われる。もしかしたら早まった鼓動がネージュに伝わってしまったかもしれないが、どうしようもなかった。何がどうしてこうなったのかは分からないが、きつとすぐに、身体を離してくるだろう——。と、思っていたのに。一向にその気配は訪れない。

「……どう……したの？」

やはり底なしに明るい彼でも不安になるのだろうか。そう思い始めると、まるで抱き着いてくるような体勢のネージュを無理やり引き剥がすのは忍びなく思えてくる。だがそれは、視界にウィンドウが出現する音と共に一気に霧散した。

「ネージュ、離れて！」

《ハラスメント防止コードによる強制転移の発動》———という文面に、冷水を浴びせられたような感覚が走る。目をまん丸くさせるネージュを、慌てて両手で押し返した。

「へ？」

「ご、ごめんなさい、ちょっと確認させて……！」

きょとんとした表情を浮かべる青年を視界の端に捉えながら、すぐさま文章に目を走らせる。どうやら、はじまりの街にある《牢獄エリア》なるものへネージュを強制的にレポートさせるかを、システム側は問うているらしい。私は迷わずノーを選択し、パッと消えた確認窓に胸をなでおろした。

「こんなものがあったのね……、知らなかったわ」

「な、何？ 何があったの？」

「ハラスメント防止がどうか……、ちょっと近づきすぎて、システムに勘違いされてしまったのね」

「え！？ ……あ、もしかして、一瞬手が弾かれたような気がしたのは……」

「おそらく警告ね。……というか、あなた突然どうしたのよ。驚いたじゃない」

「あー……、あはは、うん」

「……うん？」

私の横に座り直した金髪は頭を掻きながら明後日の方向を見やる。何かあったのだろうかと私も同じ所へ視線を向けるが、鳥が自由気ままに遊んでいるだけだった。訝しみながら視線を戻せば、こちらを見詰めていた青色の瞳とかち合う。蒼の奥にある何かを認め、私は困惑しながら首をかしげた。

「ネージュ？」

「……ごめんね。キカちゃんがちょっと鈍いもんだから、つい意地悪したくなっちゃって」

「はあ？ それってどういう……」

意味が上手く呑み込めず問い返すが、ネージュはいつも通りニコリと笑うだけだった。いまいち釈然としないが、説明する意思が無いような仕方がない。いい加減、話を進めなければ。

「まあいいわ。このまま、この後のことを相談しましょう」

「そ、そうだね」

「……私と会った時、あなた、こちらへ向かって来ていたでしょう。何か理由があって行動していたのよね？」

「いや、何となくだけど？」

「……は？」

断定的な問いかけに返された答えは、あまりにあっさりとしていて。思わずぎょっとして、彼の顔をまじまじと見つめる。

「ぼ、僕、変なこと言ったかな？」

「……そうね、あなたって人はそういう人だもの。分かっていたわよ……」

「んん？ ……な、なんか、一人で納得しているみたいだけど……？」

「良いのよ。そう、良いの、ネージュ。私、あなたのそういう所って好きだから」

「……喜んで良いの？ ねえ、喜んで良いんだよね？」

心なしに涙目になっているような気がしなくもないが、無言でスルーを決め込む。あんなに悩んでいた自分が馬鹿らしくなってきて、うっすらと笑った。

「だって、立ち止まらなければそのうち出られるかなーとか、思うでしょ？ ……思うよね？」

「はいはい、そうね。確かにウダウダ悩んで立ち止まっているよりは、よっぽど効率的かもしれないわ」

「な、なんか、あまり褒められているように聞こえない……」

「……私には、とてもそんな風には行動出来ないもの。正直、羨ましいわ」

分かっている。先ほどの私は、可能性ばかりを考え過ぎた。私があの時にすべきだったのは、根拠のない想像をして思考を空回りさせることではなく、現状の整理をすること。不明な項目は保留にし、現状の一刻も早い解決を目指して行動へ移すこと。

ストーリーがあるのならただ単に進行する条件が揃っていないだけで、場所や己の行動次第で変わるかもしれないし、同じ状況に陥

ったプレイヤーがいるのか不明なのなら、それこそネージュのように足を動かさなければいけない。つまり、あの場でいつまでも留まっていたても状況が変わることはなく、良くも悪くもならない。

私は「冷静になれ」と自らへ命令しておきながら、かえって混乱する方向へ突っ走っていたのだ。

だからこそ、ネージュのような適度にルーズな人は羨ましいと、たまに、ほんの少しだけ思う。きっと私にはかなり不向きな考え方だろうから、実行は出来ないだろうけれど。

「本当、あなたはこういう時でも余裕を持って行動出来て良いわね」

「そうかな？ ……キカちゃんが思っているほど、僕に余裕は無いよ。それでも急いでいるんだから」

「嘘でしょう？ あなたが急いでいるですって？ こんな所で冗談はよしてちょうだい」

「ひどっ！ 僕だって、一応焦ったりするんだからね！？」

「ふふ、そうなの？ 信じられないわ」

拗ねたような口調で言いながらも彼の目は笑っていて、私も自然と頬を綻ばせながらわざと茶化す。

「だって、あんまりにも呑気に構えているのだもの。とてもそうは見えないわよ」

「そ、それにしたってさ、もっとこう……、せめてオブライトに包んでよ！」

「そう。なら、能天気かしら？」

「……それ、さっきのよりもひどくなってない？ ……いや、いいけどさ、でも本当に、予定よりも帰りが遅くなってしまいそうだから内心は焦ってるんだよ？」

「あら、誰かと会う約束でもしているのかしら？」

「……う」

「……………え、まさか本当に、人と会う約束をしているの？」

言葉を詰まらせた彼に、思わず身を乗り出す。そういえば、ネージュの交友関係など知らない。もともと興味が無かったのだから仕方がないが、彼からこういう話を聞くのは珍しいな、と思ってしまった。……少し、ほんの少しだけ、悔しさのような、薄ら暗い、ザラザラとした砂のような感情が胸を掠める。

そのせいだろうか。それとも、この妙な空間のせいだろうか。普段なら決して口には出さない類の、「意地悪さ」が飛び出してしまったのは。

「へえ、それは大変だわ。早く帰らないとね。……ねえ、———
「雪」ん子さん？」

びくん、と彼の肩が大きく跳ねた。目を丸くし、今まで見たことのないほど驚愕の色を滲ませた表情をしている。

それだけで、私は彼の返事が無くともソレを確信した。けれども、私は言葉を発せず、彼が次どう出るか待つことにする。……思っていたよりも早く、それは終わったが。

「……この名前———「ネージュ」の意味、分かったのはキカが初めてだよ」

「ふふ、そうなの。嬉しいわ」
にっこりと笑顔を作って言えば、彼は「あはは」と乾いた笑い声を上げながら、眉を八の字にして頬を掻いた。

そのネージュの困ったような表情に、言い出したのは自分のくせに早くも罪悪感が湧いてくる。やはり、私には意地悪というものは向いていない。

すう、と大きく息を吸って、体の中に澄んだ空気をめいっぱい取り入れた。

お詫びに何かしなければ。どうしようか、暴いてしまったのなら、私も己の一部を晒そうか。

ぐ、と唇を噛み締める。これから私が口にするものは、そして話の流れによって私たち2人の間で交わされるかもしれない会話の内容は、この世界では「タブー」とされているものだ。

「……………これは、私の「独り言」よ」

「……………あ、ああ、うん」

「独り言ね」、彼がほとんど音にならないような声でつぶやいた。私はそれを妖精の囁きとして脳内で処理をして、「独り言」を続ける。

「……………数年前のことなのだけど、私、留学したかったのよ。それで、フランス語の勉強をしていたの」

だからその名前に意味が分かったのだけれど、と心の中で付け足す。

「……………留学？」

すると、葉を擦り合わせて妖精が聞いてきたので、くすりと小さく笑みを作った。

「ええ、バレエ留学よ。……………まあでも、ちょっとしたゴタゴタがあって全部無くなっちゃったのだけれど」

私の横にいる森の妖精が息を詰まらせる気配がした。けれどすぐに、まるで頬を撫でるようにあたたかい風が吹く。

「ふふ、くすぐったいわ」

脳裏に思い浮かぶのは、ひとつの強い気持ちでバレエを踊り続けていた自分の姿。あの頃の私は、ただひたすらに、真っ直ぐに、純粹に、黒い影に押しつぶされそうになりながらも、必死に己の足で歩いていた。輝こうとしていた。

「私ね、＂雪＂って好きよ。真っ白で、小さくて、儚く消えていくから。……あまりに眩しいから、疎ましく思えてしまうのだけれど、どうしても嫌いにはなれないの」

地面に落ちて水となり、跡形もなく消える。それでも純白なそれは、心地よく心に残り、静かに手足を冷やしていくのだ。

「私は、絶対に白くはなれないから。……出来るなら、雪のように消えてしまえばいいと、思っているから。……だから、好きなの」

ザアーと、雨音のように葉が音を立て、響いた。それが一層静けさを引き立て、世界から隔離されたような感覚を覚える。

「……僕も、＂雪＂は好きだよ」

空の色を映す海も、色づいた葉も好きだけど、と、そう付け足した＂青年＂の声がやけに耳について、頭の中を反響する。しかし、それらは少しずつ染み込んでいき、すっとなじんだ。

「……これは、僕の＂独り言＂だから」

それを聞き、私は口元に笑みを作って静かに頷いた。そして、今度は小鳥のさえずり耳を傾けるべく思考を取り払う。重ね合せていたその温度が、少し強張った気がした。

「……＂君＂になら言っても言いかなって思っているんだけどさ、このプレイヤースーム、＂ちょっとした事情＂で本名なんだよね」

一瞬、反射的に小鳥を蹴散らし、声を上げたい衝動に駆られた。けれども、ぐっと抑え込む。そして、鳥の唄に耳を傾け続けようと、バラバラになった糸を一つにまとめるため目をつぶる。数十秒ほど間が空いたあと、

「————その＂ちょっとした事情＂関係で、キカちゃんに頼みたいことがあるんだ」

意を決したような固い声音に瞼を持ち上げた。目の前には、「眠る前」と変わらない風景が広がっている。

「……あら、小鳥さん。もう「唄」は終わりなの？」

「うん、終わりだよ」

彼の手がさっと離れた。途端に、容赦なく自分のものではない温度が消える。一瞬、何か穴が開いたような感覚が襲ったが、すぐに砂が風に吹き飛ばされるかのように掻き消えた。私は左手を、空いている手で握りながら尋ねる。

「それで、何をすればいいの」

「……さっき、待ち合わせでもしているのかって聞いたよね。あれ、あながち間違いとは言えないんだ」

そこで、プツリと言葉が途切れた。不思議に思っ彼の方を見れば、空色の二つの光が火影のように揺れていた。

冷たい風が、手足をなぞっていく。思わず身をすくめた時、彼の引き結ばれていた口元が解かれた。

「その人に、————僕が死んだとき、渡してほしいものがある」

ザワリ。氷が私の体を撫でつける。

思ってもいなかったその頼み事のせいで咄嗟に理解力が追いつかず、声を上ずらせて半ば怒鳴り付けるように問いかけてしまった。

「……な、何を言っているの!？」

「何って……、そのまんまだよ。どういう意味かは、キカちゃんなら解るだろ？」

「いや、それは、……意味なんて私でなくても解るわよ。けれど!」
どうして、そんなことを言うのか。真っ先にその言葉が浮かんだ。

すると彼は、私の脳をスキャンでもしたのかと思いたくなるほど正確に、次の瞬間にはその解を寄越してきた。

「現実世界でも、もしもの時を考えて、生きているうちの自分の意思を残すだろ？ ……それと一緒にだよ」

「……っ、それは、そうだけれど……」
ぐっと唇を噛み締めた。

痛覚はないのだと、改めて実感する。……向こうならきっと、血が滲んでいただろうから。

私はちらりと、上を見上げた。いつの間にか、葉の隙間から金色の光が覗いている。

その輝きに、ふう、と息をつき、再びネージュの方を見た。

「……私でなければ駄目なのね？」

「うん。君になら——、キカちゃんにしか頼めないことだから」

「……そこまで私を信頼しているなんて、思ってもいなかったわ」
涙が出ちゃう、と冗談めかして言えば、彼はそれに乗っかるように笑い声をあげた。しかし、それも少しばかりの間だけで、すぐに二人の間をピンとした冷たい空気が生まれる。

私はネージュから視線を注がれているのを意識の端で感じながら俯き、……そしてすぐに顔を上げた。

答えは、決まった。それが、彼の意味なのだというのなら。

「……わかったわ」

「え？」

白々しい返事をするネージュを軽く睨みながら、続ける。

「だから、その頼みごとを受けさせてもらうって言っているのよ。

……これくらい、ネージュなら解っているでしょう？」

先ほどと同じセリフを彼に返す。ネージュは苦笑いを浮かべた。

「……うん、そうだね」

返しに若干の間が空いた彼を置いて、私は一人、立ち上がった。そして数歩前に進んでから、振り返らずに後ろへ向かって声をかける。

「それで、具体的にどうすればいいのかしら？」

「……あ、ああ、うん。……まず、共有ストレージを作ってほしくて……」

言葉とほぼ同時に、承諾するか尋ねるダイアログが表示された。私は首を傾げながらも、OKの方へ指を持っていく。

すると、またしてもタイミングばっちり、疑問を解く言葉が発せられた。

「渡す日を、あの子の来年の誕生日にしてほしいんだ」

「……来年？」

若干の疑問を覚えて聞き返し、作成されたばかりのフォルダを開く。どうやら仕事が早い人間のようで、もうすでにアイテムが一つ追加されていた。どうやらアクセサリらしい。

その存在だけ確認してタブを閉じたとき、彼の言葉が続いた。

「うん。今月が誕生日だから本当はもうちょっと先なんだけど、先月早めに渡したんだ」

血を吐いているかのような苦しい声だった。悲しみに溢れた彼の表情を、息を吞んで見詰める。

「……ネージュは、何をその人にあげたのかした？」

彼の見たことが無い雰囲気、嫌な想像が頭の中で掠めていった。外れてほしい。どうか、どうかそんな無慈悲なことはあってほしくないのに。

「ナーブキアと、……♪ソードアート・オンライン」のソフトだよ」

「……ッ、そ、それって……」

「うん。僕は、……僕が巻き込んでしまったんだ」

「ネージュのせいじゃないわ。だって、あれは……」

「確かに僕がこの状況を生み出したわけじゃない。けれど、元々ログインする予定の無かった人を巻き込んだのは事実なんだ」

……そんな風に、自分を責めないで。そう強く彼に言いたかった。しかし、ネージュが言っていることも一理あるのだ。私が否定しても気休めにしかならない。むしろ彼が私の言葉を否定して、余計に苦しめることになる。

どうしようもなかった。悔しくて、眉を寄せる。そんな私に、ネージュは困ったように笑った。

「……とにかく、僕が渡したプレゼントはともそんな風に呼べる代物じゃなくなってしまったでしょ？ だから、もうどうやってもこの状況は変えられないけれど、この世界でもう一度プレゼントを渡そうとしたんだ。……だけど……」

「けれど……？」

「————けれど、『素敵なプレゼントはもらったから』って言い張って、受け取ってもらえなかったんだ」

……なんという、純粋な人なのだろう。聞いた瞬間持った感想に、ズキンと何故か胸が痛んだ。だが、すぐに意識的にしまい込み、それらを振り払うように彼の方を振り向く。そして、確認のために尋ねた。

「……つまり、来年のその日が来れば、今日の事はなかったことになるのね？」

出来ればそうなってほしいけれど、と、絶対に口には出せないことを心の中で付け足す。

ようは、自分が死んだとしても、その人に贈り物が届くようにしたいのだろう。したがって、彼が死ぬことがなければこの頼み事は破棄される、ということになるはずだ。私はあくまで保険、という

ことなのだろう。

もちろん、私も来年の今頃まで生きている保証は無い。しかし、一人で抱えているよりも、二人の方がネージュの気持ちを渡せる確率は上がる。

「そういうことになるね。……近いうちに彼女のことを紹介するよ。ちょっと目立つけれど、良い子には違いないから」

ポンと飛び出した単語に、一気に私の中の緊張の糸が切れたような気がした。私はニヤリと笑みを作りながら、

「……彼女？　ずいぶん大切にしているみたいだし、もしかしくても恋人かしら？」

「はぁっ!？」

一瞬呆けたような表情になったネージュは、やがてだんだんとその頬を赤く染めていく。少し意地悪をするつもりで聞いたのだが、予想以上の反応だ。気分が良い。

すると、パクパクと魚みたいに口を動かしていた彼が、何とか平常心を取り戻したようで、視線を泳がせながらつぶやく。

「そういうんじゃないよ。……なんというか、その、僕の家族というか……」

「そう、既婚者でしたか。それは恋人ではありませんね。……のろけ話は、またの機会に聞かせていただくわ」

「だ・か・ら！　違う！」

「ふふふ、そうなの？　それは残念だわ」

クスクスと笑ってやれば、年上とは思えないような子どもっぽい表情を浮かべた。そして、バツと勢いよく立ち上がった彼は、その表情を苦いものを食べてしまったような面持ちへ変え、こちらへ詰め寄ってくる。私はそれを半身でさけて、からかうように言った。

「さあ、十分に休憩出来たし、歩きながらこの後のことを考えまし

「ようか？」

「……あ、ああ、うん」

虚をつかれたのか、急に勢いが抜けた感じに答えが返ってくる。

私はそんな彼の背中を、少し強めにたたいた。バン！ という実に痛々しいような、爽快感があるような音とともに、彼の体がよろける。それを見ながら追い打ちをかけるようにクスクスと聞こえるように笑えば、頭をカジガジと照れ隠しをするように掻いていた。

「ネージュが歩いてきた道には何かあったかしら？」

「僕は歩いた道には何も無かったよ。ただ、何本か分かれ道はあったけどそっちには行ってないから……」

「そう。……けれど、同じ所を歩いても結果は同じである可能性の方が高いし、とりあえず見たことが無い方へ行こうと思うのだけけれど。あなたはと思う？」

「うん。僕もそれで良いよ」

「決まりね」

私たちは軽く目配せをし、足を踏み出した。しかしその時、「あっ」と隣の青年が思い出したかのような声を上げる。私は眉を顰めながら浮かせていた足を元の場所に戻し、何やらウィンドウを操作している金色を見遣る。

「今度は何よ」

「ご、ごめんちょっと待って……」

「もう」

緊張感が一気に霧散してしまった。ある意味これは彼の特技ではないだろうか……。と本人が聞いたら涙目で否定してきそうなことを思っていると、ネージュの顔がパッと輝く。

「見つかったの？」

「うん。……これ、渡したくて」

「……………手紙？」

スツと差し出されたものは、真っ白な封筒だった。宛て先の部分には私の名前が記してあって、目を瞬かせる。

「これ……私に？」

「そうだよ。……日付が変わったら、封を開けてほしい」

「日付が変わったら、って。今見てはいけないの？」

「だーめ！ 絶対、駄目！」

「ふーん……」

妙に必死に阻止しようとしてくる。つい意地の悪さが顔を出して悩むフリをしたくなるが、彼の真剣な眼差しにやめることにした。ため息をこぼし、彼から受け取った手紙をストレージにしまう。

「分かったわ」

「……よ、良かったー」

私の是とする言葉を聞いた彼はホッと体の力を抜き、安堵をその表情にあからさまに出す。まったく、何なのだろう。見たところ普通の手紙のようだけれど、それほど中身が重要なものなのだろうか。けれど、彼の様子を見た限り、聞いたって答えてはくれないだろう。どうせ日付が変われば判明するのだ。別に急がなくても良い。

そう結論付けて再び歩き出す。彼との口約束を忠実に守ろうとする己に、つつい苦笑が零れてしまって、上着の裾で口元を隠した。

時間に換算すると10分程度だろうか。しばらく無言で歩いた後、

「あ」と隣のネージュが声をあげた。

「あれ！ ほら、草むらになんか白いものが落ちてない!？」

「え……? あら、本当だわ。なにかしら」

「僕見てくるよ!」

「なっ、ちよっ、ちよっと待ちなさい！ 危険なものだったら！」
しかし私の静止を振り切って、彼はその白いものへ向かって駆けていく。ため息をつかずにはいらなかった。

「……まったく、もうちよっと警戒しなさいよ……」

「あっ、なんか手紙みたいだ！ ほらキカちゃん、早く来て！」

「はいはい、わかったわよ」

もう一度ため息をつきながら、手をブンブン振っている青年へ近づく。……自然と緩む口元には知らぬふりをして。

「私にもそれ見せてくれる？」

「うん」

彼からその白いもの——紙を受けとり、そこに書かれた文章へ目を走らせていく。

「……『この手紙を受け取ったあなた、どうか私たちの村をお助けください。とても凶悪な悪魔を封印する準備を整えていたのですが、あと一步の所で、操られた人間の手で道具が隠されてしまいました。これを何とかして見つけ出してほしいのです』……」

と、そこまで声に出して読み上げた時、複数の眩い光が地面のいたる所から噴き出した。思わず腕で両目を覆う。

「なによ、これ……ッ」

「一体何が起こって……!？」

遮っているはずなのに、光が強すぎて視界が赤く染まる。まるで先の読めない事態に、形容しがたい恐怖で足をわずかに震えた。だがそれも、はそう長くは続かなかったようだ。私たちを包んでいた、刺すようなそれはだんだんと収束していくようで、暗闇が勝利始める。恐る恐る腕を外して薄く目を開き——、

「な……っ!？」

「……ああ、もう、ずいぶん厄介なことになったわね」

頭を抱えなくなった。ああ、あの手紙はこういうことだったのかと、理解してしまったのだ。

先ほどまではただの土の道だったのに、今はかなりの数の箱が出現していた。一つひとつ丁寧に、かつ繊細な装飾が施された宝箱だった。……それがもう、半端なくあちこちに点在している。神秘的な森の雰囲気を持ち壊す勢いだ。

これは面倒くさいことになったと、大きなため息を吐き出す。すると、聞き慣れた効果音が耳に入った。

「……今、クエストログが更新されたわね」

「うん。ここに飛ばされる前に見た文の書き方と似てる」

「そうね……」

——アイテム《手紙》がプレイヤーによって発見されました。これよりイベントがスタートされ、モンスターがポップするようになります。村人が求めるものを見つけて装備するか、本日21時を迎えると自動的に終了します。ログアウトで途中退場出来ませんが——。

「全くもって意味が分からないわ。そもそも何のイベントなのよ」

「本当だよ、もう……」

「こんな訳もわからないクエストをクリアしなければ出られないなんて……」

「……それにさっきの手紙……、最後の一文が」

「悪魔の手先はかなりの強者です。十分注意してください」——。

何が起ころうとしているのだろうか。強い悪寒を感じ、ぶるりと体を震わせる。

沼に片足を突っ込んでしまったような、そんな感覚。少しずつ底へ底へと引きずり込まれていき抜け出せない。足掻こうとしても体

の自由はどんどん奪われ、恐れがじわしわと這い上がり、思考を浸食していく……。

「……キカちゃん？」

「………何でもないわ。とにかく片っ端からこの箱を開けていきましよう。どうやら強いモンスターもいるようだし一刻も早く――」

と、私が一番近くの宝箱へ手を掛けた、その時。

「うわあああああああああああああ！！」

私たちのものでは無い悲鳴が、空気を切り裂いて響き渡った。私は咄嗟にネージュと顔を見合わせ、

「この声って……！」

「私たち以外にもプレイヤーが居たんだわ！」

すぐさま己の武器抜き払い、彼と共に声の方向へ駆け出す。

――赤の他人が死のうがどうなろうが構わない。

「……そうよ……」

私は、自身が大切にしている者たちを守ればそれで良い。他がどうなろうが関係ない。知ったことではない、……のに。

「あっ、たす、助け……ッ」

悲痛な男の声と、モンスターのものであろう低い呻き声が近くなっていく。私の足は、何故か止まろうとしない。止まってくれない。「早くこっちへ来なさい！」

「キカちゃん！？」

気が付けば、包帯でぐるぐる巻きにされているミイラのようなモンスターの前へ飛び出していた。剣を閃かせると、赤いポリゴンが散る。ざり、と地を踏みしめ、さらにもう一撃。

「下がって！ その人の回復をお願い！」

「……ええ、分かったわ！」

割り込んできたネージュにその場を明け渡し、私は踵を返した。

崩れ落ちている男へと駆け寄る。腰のポーチから瓶を取り出し、

「ほら、今のうちに！」

「……あ、ああ……」

弱々しい声を上げながら私からポジションを受け取る。しかし、その両手はブルブルと激しく震えていて、口元へ持っていくことすらままならないようだ。

初期装備の剣が男の横に転がっていることから、おそらくはじまりの街から出たことの無いか、良くてはじまりの街の周辺でしか狩りをしないプレイヤーなのだろう。私はきつく唇を引き結んだ。

「……こんな人まで巻き込むなんて……」

戦う術も経験もない彼のようなプレイヤーが、まだ他にもいるのなら。これは想像していたよりも大事かもしれない。

チラリとネージュの方を見る。敵のHPゲージはもうすぐでレッドゾーンに入るが、やはりそこのモンスターより強いらしい。私も行かなくては。

「いい？ 回復が終わってもそこに居るのよ！」

とりあえず安全の確保を。

勢いよく立ち上がると地面を蹴り上げ、おどろおどろしい容姿を持つモンスターへとそのまま突っ込む。

「ネージュ！」

さっと斜め後ろへ跳び退ったネージュと入れ替わるように前へ出て、刃を叩きこむ。黄色いエフェクトが迸った。間を置かずに金色が再び前に飛び込んで、銀色が振り上げられる。瞬間、敵のHPは

ゼロを刻み、青い欠片をまき散らした。

「良かった。ひとまず、これで……………」

「き、キカちゃん！ 後ろ！」

反射的に後ろを振り返った。目を見開きながら顔を青ざめさせる男と目が合って、それから。…………それから、その男の、後ろに、今と全く同じ…………。

「に、逃げなさい！」

ネージュの手を振り払って駆けた。けれど、包帯だらけのそいつが持つ片手剣が、男の頭上に振り下ろされる―――。

「そんな…………っ」

「…………し、死にたくな
パリン。

今聞いたばかりの残酷なその音が、私の耳にしっかりと届いた。つい数十秒前に見た光景と全く同じものが、私の目へと刻み付けられてしまった。

「…………そ、んな…………」

「危ない！！」

私へと繰り出された斬撃。それは滑り込んできた青年によって弾かれる。

彼だけに戦わせるわけにはいけない。一緒に、剣を、振るわなければならない。

「…………わたしの、せい？」

私は、あの男のそばから離れるべきでは無かったのに。せめて私が近くにいたのなら、もしかしたら彼は生きていたかもしれないに。

「切り替えるんだ！」

「……………ッ」

急激に重くなったような気がする曲刀を握り直す。喉が痛い。頭の中が揺れる。それでも、やらなければ。

いつの間にか空いてしまった彼らとの距離を埋めようと足を踏み出す。しかし、背後からまた違う声が聞こえ、ビクンと肩が跳ねた。後ろで口を開ける分かれ道を肩越しに見れば、包帯のモンスターとはまた違う敵に追われながらこちらへ走ってくる少女が目飛び込んでくる。

「やだぁ……ッ、やめて！！ 来ないでよ！！」

「……ごめん、ネージュ」

ごめんなさい。

「え、キカチャ……」

助けなければ。今度こそ。

「いやだ、やだ、やだ……ッ！ おとうさん、おかあさん！！」

私なんかよりよっぽど求められているその光を、奪わせるわけには。

無茶苦茶に短剣を振り回すその子へ向けて、敏捷値の限りに疾走する。けれども、もう少しで手が届く、というところで。

「きゃあぁっ」

「っ！！」

ショートヘアの少女の身体が私の方へ吹っ飛ばされてきた。倒れ込みながらも何とか受け止めて、すぐさま回復ポーションを彼女の口に含ませる。安堵の息を漏らそうとして、――凍りついた。

回復しない。それどころか、どんどん減っていて。

「う、うう、……怖いよ、なんで、こんな……っ」

「………まさか」

致命傷。

急速にHPゲージが減少していく。もう、赤い領域はすぐそこだ

った。

うでのなかで、いのちが、きえていく。

ボロボロと泣きながら両親を呼ぶ、私と同じ年ぐらいの女の子の命が、消えていく。

「おとうさん、おかあ——」

ふっと、重みが消える。キラキラと輝く結晶が、雪のような儚い結晶が、飛び散った。

「……………」

大きな影が落ちる。私はその影の主を見上げ、傍らの剣を握りしめた。

体の奥で、炎が燃え盛っていた。

第8話 六花が贈るメッセージ（後編）

ガイコツのような容姿のモンスターが雄叫びを上げながら、粗悪な細剣の切っ先を私へ向ける。私はそれをさっと往なすと、懐へ飛び込んで切り上げた。汚い声で喚くソレを睨みつけつつ、半身を反らして攻撃を回避。その際生まれた隙に背後へ回り込みスキルを発動。私の心情を表すかのような赤いエフェクトが、スケルトンへ吸い込まれる。衝撃に前のめりになったソレが振り返る頃には技後硬直が終わり、再度剣を振るう。何度も、何度も。

「……こんなの」

名前など知らない人間だった。当然顔も知らない、初対面の人間だった。大切な人ではなかったのだから、どうなっても良かったじゃないか。———そう私は強く叫んでいるのに、身体は相反していた。鋭く閃く剣に、自分ですら制御出来ない感情が上乘せされる。

「こんなの！！」

死を予期して青ざめていた男と、恐怖で泣きじゃくっていた少女。助けてほしいと、怖いのだと、二人は言っていたのに。二人には確かな未来が待っていたはずなのに。この世界も、やはりどこまでも非情なのだ。

私の力が不足していたから、奪われたのだ。

分かっていたことだ。わかっていた、ことのはずなのに。

「あああああああああ！！」

あまりに無力な己が、恨めしい。

自身への怒りが多大に入り混じった攻撃が、幾度もスケルトンを切り裂く。いつの間にかレッドゾーンに入っていたソレのHPを、削り切った。

ただ、ポリゴンが舞い上がっていく光景を見ても、清々しさも何もなく。ただただあの名前も知らないプレイヤーの、悲痛な声だけが頭の中でガンガン響いていた。

「————キカちゃん」

気遣うような声音で、背後から声を掛けられる。どうやら、彼の方でも無事倒せたらしい。しかし、どうにも振り返ってネージュを見ることが出来なくて、顔を俯ける。

「……勝手に突っ込んだのに、結局あなたに任せてしまっていて……ごめんなさい」

「いや、僕は大丈夫だよ。それよりも、き……」

「さっきの女の子も、死んだわ」

「そ、……そっか」

「……………」

言葉を生み出すことが出来ない。明らかに私の判断ミスと力不足だった。私がもう少し周囲に気を配っていれば。私がつと早く、モンスターの存在に気が付いていれば。

「キカちゃん、行こう」

「……………」

「キカちゃん」

あたたかい手に右手が包まれ、そのまま引かれる。彼に促されるまま歩き出した。

「……………ネージュ」

「ん？」

「……なんでも、ないわ……」

「————ねえ、ネージュ。」

あなたの眩しさが、優しさが、すごく痛い。……痛い。

黒い世界にいる私には、あなたの笑顔を直視することがとても――

——つらい。

歩くこと1時間。

いくつも宝箱を開けてはいるがどれもハズレで、手に入るのはイベントには全く関係なさそうな素材アイテム等だけだった。うんざりしてくる。たまに回復ポーションが紛れているから、それがまだマシな点だろうか。

敵モンスターにも数度エンカウントした。一人でも倒せないことはないが、やはり強いと感じた。もしかしたら、私が今までフィールドや迷宮区で遭遇したどのモンスターよりも、少しばかりステータスが高く設定されているかもしれない。おそらく、数体ならまだしも、10を超えたら二人で掛かったとしても危ないだろう。

そして、気になることがもう一つ。私とネージュが獲得する経験値量が、確実に普段よりも多いのだ。これはひょっとすると、この意味不明な「イベント」とやらの、深く関係あるのではないだろうか。

「ああ、あそこにもあるよ」

ネージュが相変わらずの明るい声を上げながら私へ笑顔を向けてくる。きっと私を元気づけようとしてくれているのだろうが、私は何とか曖昧な笑みを作るので精一杯で、上手く返すことが出来なかった。それでもニコニコと笑う金髪の青年に、申し訳なさが増す強くなる。

ネージュの顔が見ていられなくて、彼が指差す方向へ視線を振った。そこには本日30回目の四角い物体待ち構えていて、思わずそれを睨みつける。

「……何のためにこんなイベントを用意したのかしらね。本当、嫌

になってくるわ」

たとえ全うなゲーム世界だったとしても、こんなことでは宝探しの気分も味わうことは出来ないし、時間的にも割に合わない。完全に不毛な行為だといえよう。だいいち、プレイヤーに事前連絡もなただけ選り出すなどもってのほかだ。……ランダムに選りさえないければ、先ほどの二人のようなプレイヤーも生まれなかっただろうに。

「……あら、ネージュ、お客さんが来たわよ」

「お、本当だ。なら手厚い歓迎をしないといけないね」

軽い口調でおどけながらも、ネージュはすっと両手剣を構えた。私もそれに倣い、彼の隣に並ぶ。鋭い目つきで敵を見据える彼の横顔を盗み見て、小さく笑った。

あなたはやっぱり、私とは比べものにならないほど強い。

「くるよ」

「ええ、言われなくても分かっているわよ」

思えば、彼が戦っている姿を見るのは今日が初めてだった。どれほどの実力なのだろうと、幾日か前の会話で気にはなっていたが、実際目にすると言葉を奪われる。

果敢に斬りかかる様や両手剣を振りかざす姿は、今までのネージュの印象を覆すほど力強いのだ。

「スイッチ！」

彼の声にすぐさま前へ出て、連撃のスキルを一発。よろけたスケルトンへ、すかさずネージュも追撃。ぶっつけ本番だった彼との連携も、特に問題はなかった。

やがてこれまた本日何回目か分からない青い欠片が弾け、無言でそれを見届ける。

「キカちゃん、疲れてない？」

「大丈夫よ。……心配してくれてありがとうね」

静かに首を振る彼に、笑みを深くする。今日は本当にネージュに助けられていた。彼がもし隣にいないければ、どうなっていただろうか。

「……え、えーと、キカちゃん？ 僕の顔に何か付いてる？」

「ふふふ、そんなわけないでしょう？」

「そ、そう？」

「ええ、もちろん」

「なーんか納得出来ないなあ」

クスクスと笑いながら肯定すれば、不服そうに口を尖らせる。先ほどのギャップがおかしかった。

「さて、さっき見つけた箱を開けにいきましょうか。どうせまたハズレなのでしょうけれど」

「そういうことは言わないの！」

言いながら宝箱へと足早に走り寄って行くネージュを目で追う。その背中を見ていると、ふとあること思い出した。

「……ああ、そういえば肝心なことを聞き忘れていたわ」

「何？」

赤い箱に手を添えたところで動きを止めた彼が、顔を上げて私に聞き返してくる。それに対して私は肩をすくめて、

「さっきの頼み事のことよ。その……、あなたが渡したいと思っている人の誕生日はいつなのかしら？」

「ああ、そうだったね。誕生日は————」

言いながら、その手は蓋を開けていく。

——瞬間、体の芯を冷やすような、けたたましいアラームが響き渡った。

「……っ、トラップか……ッ！」

「なっ！」

ネージュがすばやく立ち上がり、らしくない舌打ちしながら私の背に自らの背をつけてくる。服越しに伝わる体温が、何かを暗示しているようで、息が詰まった。

「くそ……、囲まれてる！」

「……ネージュ」

「……私はさっき、自分で思っていたじゃないか。たとえば二人でも、10を超えれば、無事に倒し切れるか分からないと。」

「さっきの頼みごと、守れるかわからないわ」

「……その時は、その時だよ」

ああ、もう、本当に今日は厄日だ。私たちを中心にずらりと取り囲むモンスターを見据えながら、ため息をつきたくなった。赤くギラギラと輝く瞳は、私たちの体を引き裂く瞬間を今か今かと待っているようだ。

「モンスターの人気者になっても、嬉しくないんだけどな」

「……冗談言っていないで、さっさとやるわよ」

腰に下がっている曲刀を左手でつかんだ。けれど、そこで、ほんの少しだけ迷いが生じる。

「……」「あちら」の方が、複数相手をするには向いているのではないか。

しかし、ほんの一筋かすった思考は、すぐに打ち破った。

あれは、私一人で戦うために考え出したスタイル。もし複数人でやるのなら、私の他に、最低2人以上いる時ではないと適さない。つまり、ネージュと二人きりの今の状態では駄目なのだ。

……なぜなら、私ではなく、彼が危険にさらされてしまう可能性が高いから。ソレを使えば、私には、すぐに助けに入る術がないから。

ぐっと唇を噛み締めた。すると、何を勘違いしたのか、空いている右手がネージュに包みこまれる。

「大丈夫。……キカちゃんは、僕が守るから」

……それを聞いた瞬間、何故か入り過ぎていた力がすっと抜けるのがわかった。

私は、笑みを作る。

「そういうセリフは、恋人さんに言ってあげたらどうかしら？　きっと喜ばれるわよ」

「だ、だから別に、彼女なんて……っ」

否定しようとしたためかネージュが大声を上げた瞬間、己の手を包む彼のその手を払いのける。

……聞こえないように、「ありがとう」と小さくつぶやきながら。

姿勢を少しずつ低くしていく。そして、地面を、吹っ切るように蹴り上げた。

まずは、正面の2体。

包帯でグルグル巻きにされたミイラへ迷いなく突っ込み、横なぎに剣を振るう。さらに攻撃を加えようとして——、それをせずには左へ飛んだ。

同時に、今居た場所に大きな棍棒がぶちあたり、砂柱が立つ。

頭を無理やりにそちらへ向ければ、そこには骨がむき出しのガイコツのモンスターが居た。さっき戦ったモンスターとは、容姿も武器も違うようだ。体長は軽く2メートルは超えていて、その身長差に当然見上げる形になる。それでも、素早く意識を前方に戻した。

「はあっ！」

先ほどのミイラ2体へ、確実に倒すべく、技後硬直覚悟でスキルを放つ。鈍く光るポリゴン片の向こう側で、再び棍棒を振り上げた

ガイコツが見えた。だが、焦らずディレイが終わったその瞬間、片手ハンドスプリングの要領で飛び退く。

しかし、すぐに目の前を半円状にわらわらとモンスターが取り巻きだす。軽く舌打ちしながら、一掃するべく再びスキルを―――、

「キカちゃん!!」

「ッ！」

曲刀の柄を、上へ軽く投げるようにして離れた。逆手に持ち直す。そのままの流れで腕を後ろに回し、思い切り振り下ろした。

確かな手ごたえの後、ガラスの割れるような音が複数個聞こえ、ホッと安堵する。見れば、両手用直剣を振り下ろした格好のネージュがいた。私はすばやく駆け寄り、若干HPが残っているモンスターへ剣を振り下ろす。

ネージュが顔を歪めながらも、私に向かって振り絞るように声を発する。

「大丈夫!？」

「……話はあとよ！」

こちらにも相手が出来る程の余裕は残されていない。

息が上がっていくのを感じながら視線を動かすと、ずっと無視され続けているガイコツ君が、苛立ったように突進してくるのが視界に入った。私は腕を振り上げ迎撃し、そこへすかさずネージュがエフェクトを纏いながら剣を打ち込む。

すると、さらに二体がネージュの背後に迫るのを捕えた。私は今度こそスキルを発動させ、光の欠片へ変える。

「……はっ、はぁっ」

「……へばるのには、まだ早いのではないかしら？」

そう言いながらも、顔をしかめた。この疲労感で、まだ全体の三分の一程度しか倒せていない。その事実が、否応なく押し掛かり、

焦りを高めていく。これでは、精神的にもきついものがある。

左上のHPゲージをチラリと確認すれば、私の方はまだそれほど削られていない。だが、ネージュの方は6割を切っている。それを目の当たりにして、息が止まりそうになる感覚が襲い、喉の奥にしこりが出来たような錯覚を覚える。すると、ネージュが私の表情に気づいたのか、両手剣を横に振るいながら苦い笑顔を浮かべた。

「キカちゃんほど、上手に回避出来なくて」

「……ッ」

「―――僕が死んだとき、渡してほしいものがある。」

「……ふざけないでよ」

あの頼みごとが、現実になってしまっているのではないか。

「……え？」

戸惑ったような彼の声がかすかに聞こえた気がした。

けれど、そんな関係ない。

守らなければ。ネージュを、守らなければ。

全身にグッと力を入れ、目の前で呻き声を上げるそいつらを睨みつける。視界の真ん中と右端にいるスケルトンが剣を振り上げたのと同時に、私も前へ踏み込んだ。

余裕もクソもない。ただがむしゃらに薙ぎ払っていく。視界はぼやけ、自分がどんな風に足を動かし、手を振っているのかよく呑み込めない。それでも、目に付くかすんだ物体をかき消す。ひたすらに、腕を、足を動かす。

その間にも回避し切れなかった刃が掠めていき、自身から赤い欠片が吹き出す。だが、止めてはいけない。臆してはいけない。思考する時間など無い。本能で、脳が命令を出さなければ。

私が一匹でも多く倒し、彼へ回る敵を減らさなければ！

首を横へ倒し、すぐそばを突っ切っていくレイピアを避ける。振

り下ろしていた私の剣がモンスターに何とか当たり、その姿を光へ変えることが出来た。息を切らせながらすぐさま視線を巡らせ、斜め後ろから突撃してこようとしていた棍棒を跳んで回避。崩しそうになるバランスを両脚で踏ん張って耐えた。だが視線が少し下へ落ちてしまったその一瞬に棍棒が追い打ちを掛けてきていた。どうにか躲すことは出来たが、先ほどよりも大きくバランスを失う。

「……くっ」

視界の外から肉薄してきた切っ先が私の身体を刺す。度重なる猛攻に、ついに左足が地面を捕え損ねた。その場に倒れ込む。脳を揺さぶる衝撃に顔を歪めた。

「キカちゃん!!」

「駄目よ!」

目を見開きながらこちらへ走り寄ろうとするネージュに、慌てて精一杯の声量で制止をかける。けれど、彼は止まってくれない。

「ネージュ、来ちゃ……っ」

いけない。

地へ手を付いて、立ち上がりかける。だが、次の瞬間には背中に鈍い衝撃が走っていた。大きな影が私に覆い被さっていて、驚きに目を瞬かせれば、吐息がかかりそうなほど近くにネージュの顔がある。

「……ネージュ?」

状況が飲み込めず思わず問いかけるが、——しかしすぐに別の要素に息を詰まらせた。

——鮮やかな、赤。

熱く流れる血液の如く光る、紅のエフェクトが、宙を舞っている。

「僕が守るって、言ったでしょ？」

照れたように笑う彼の顔を見て、私は事態を悟った。急速に、体を冷気が支配していく。そして、視線が「それ」を捕えたとき、自分のものとは思えない程震えた声が衝いて出た。

「……な、んで」

「……………ごめんね」

ソレが、ぐんぐんと減っていく。先ほど腕の中で消えた少女のように、止まることなく。

「や……、やだ、とまって、とまりなさいよ！！」

嘘だ。

なんで、なんでこうなるの。こんなあって良いはずがない！

「約束、守れそうにないや」

「……………死んだら許さない。」

「……………死なないよ。」

具現化した命の残量は、赤く変わっていた。

「だめ、ネージュ……っ！！」

いけないで。

震え切っていた手を伸ばし、彼の首へ回す。しかしそれは、他ならぬネージュによって下ろされた。

ふっと笑った彼の瞳が、優しげに私を見下ろす。

「あのね、僕ずっと言いたかったことがあるんだよ？」

やめてよ。そんな満足そうに笑わないで。

そんな私の願いを死神は嘲笑いながら、鎌を振り下ろした。

「……………その数字は、非情なまでに、ゼロを刻む。」

ネージュのあたたかい手が、私の頬へ伸ばされる。まるで宝物に

触れるかのような手つきで包み込まれた。

「キカちゃん、好きだったよ」

だから、どうか笑って。

変わらずにふわりと微笑む彼の唇が、そう動いたような気がした。

「ネ……！」

私は必死に、彼の手へ自身の手も重ねようとして――――。

するりと、空を掻いた。

何も触れることはなく、ただただ青い欠片が指先を掠めていく。

指の間から、青い雪が逃げていく。

「……あれ？」

なんで、どうして触れられないの？ 今の今まで、確かに目の前に居たのに。

「………か、隠れているの？」

ふらりと立ち上がり、辺りを見渡した。けれど凜猛な瞳が爛々と輝きながら私を射抜くだけだった。頬を青白い欠片が撫でていく。

「や……やめてよ」

儚く散っていく。

尊いものが、形を変え、あっさり消えていく。溶けるように、簡単に無くなる。まるで、雪のように。

水の上に落ちてしまった、白い妖精のように。

ただひとつ違ふとすれば、高く、高く昇って行ってしまうことだろうか。

高く、高く。どこまでも。

私の手の届かないところへ、消えてしまう。高く、ひらりと、存在がcaすれて、私は失う。

「こんな……、こんなことしていいいで、早く出てきなさいよ！」
ああ、昇っていく。
消えてしまう。

「冗談、キツイわよ……。ねえ、聞こえているのでしょうか！？」
いかないで。
いかないで。

……いかないで。

「ネージュ……、どこにいるの」

毒々しい黄色い光を纏った剣先が振り下ろされる様子を、ぽっかりと空いた思考で他人事のように見つめていた。

その刹那に浮かぶのはネージュの太陽のような笑顔で、私は全てに遮断するために目を閉じた。

ガキィインと、金属音が耳を劈く。

「……え？」

だが、肝心の衝撃が全くこない。不思議に思い、ゆっくり、ゆっくりと瞼を上げる。

息を、呑んだ。

「な……、エ、エギル？」

斬撃を跳ね除ける逞しい背中。色黒の肌。それは間違いなく、数時間前までパーティーを組んでいたエギルだった。

「どうして、あなたがここに……」

茫然としながら眩けば、背後から肩を叩かれた。パッと振り向けば、これまた私のパーティーだった屈強な男たちが居て。しかし、みな一様に、表情を歪めながら私を見ていた。

「……ルーク……？」

「……………キカはHP回復しろ、な？」

「ええ、……けれど」

「いいから！」

乱暴に背を押され、モンスター達から遠ざけられる。温和な彼の思わぬ行動に目を見開くが、それ以上私は何も言葉に出来なかった。

「……こいつらは、俺たちがぶっ飛ばしてやるから」

ルークが足を踏み鳴らしながら駆けていく。赤く染まっている己のHPゲージを、ぼんやりと見つめた。

「ネージュ……」

彼が居たはずのそこへフラフラと近づき、彼が落としていった両手剣を胸に抱きこんだ。周りを見渡せばネージュが身に付けていたのか指輪も一つ落ちていている。それも拾い上げて、ぎゅっと握りしめた。

「ネージュ……、ネージュ……！」

何故だか、涙は零れなかった。

* * *

外灯に照らし出される街並みは、どこか色褪せて見えた。いつもは煩く感じる人々の喧騒も遠く、上手く頭に入って来ない。

「……キカ、大丈夫か」

「ええ、平気よ」

そう短く問いかけてきたエギルは、主街区まで帰ってくる間中、なぜか歯を噛み締めて私と目も合わせようとしなない。いや、エギルだけではない。ルークも、その他のパーティーメンバーも、ずっ

とだ。このままでは流石に明日に響いてしまう。

私はその場に立ち止まると、振り返った彼らへ向けて頭を下げた。

「さっきは助けていただき、ありがとうございます」

「いや、礼を言われるようなことは……」

言いながら、だんだんと言葉が尻すぼみになっていく。いよいよわけがわからない。

……私は彼らに助けられ、今命があるのだ。

「どうして、みなさんがあそこに居たのですか？」

「あ、ああ。……実はあのエリア、正式サービス一か月経過を祝する「経験値大量獲得」っていうイベントの専用のところらしいんだ」

なるほど、と頷く。確かに経験値の上がりが早いと、……ネージュと共に気にしていた。

「それで、このイベントに参加するには、現在ログイン中のプレイヤーの中から自動的に抽選が行われるそれに当選するか、くそ面倒くさいクエストをクリアするしかないそうだ」

「……ということは、私は前者ね」

「ああ、そうだ。他にも何人か選ばれて……、というか消えて、大騒ぎになった。まあ、このことはすぐに情報屋によって広まったんだけどな。多分、通常なら運営が事前に告知していたんだろうなと思う」

「そうなの。……なんてありがた迷惑なイベントなのでしょうね……」

———こんなものが企画されていなければ、彼が死ぬことはなかったのに。

唇をぐっと噛み締めた。エギル達を直視出来なくて、足元を視線が漂う。

「……それで、わざわざ来てくださったのですね」

「ああ……、何かあったらって思っていたんだが……」

不自然なほど、言葉が途中で途切れた。私が首を捻りながら顔を上げた時、ルークの口がまるで厚い扉が開いていくように重々しく開き、それを告げた。

「――遅かったんだ」

なんのことを言っているのか、理解しようとするのを、私は拒んだ。

何度か何かが空回りを続け、そしてしばし絶句し、やっと自分の口から音と呼べるような音が出た。

「……え？」

初めて、彼らの顔をまじまじと見る。

後悔。罪悪感。悔しさ。

色々なものが混じり合い、昏い影を落としていた。徐々に彼らの顔が伏せられていく。

……私は、そのことによって理解してしまった。ルークが今口にしたことが、本当の事だと。

頭が痛くなり、視界が暗くなる。しかし、それでもと、必死に理性を繋ぎ止めて、

なんとか音を絞り出した。

「……頭を、上げてください」

けれど、上がらない。彼らの頭は、項垂れたまま上がらない。代わりに、うめくような声が紡がれた。

「俺たちがちょうど着いた時、金髪の兄ちゃんのHPがゼロになったんだ」

やめて。

心が叫ぶ。だが、それが聞き届けられることはなく、言葉は続いていた。

「もう少し……、あと数分でいい。あそこに早くたどり着いていた
ら」

……やめて。

彼らが言う「もしも」が、私の身体を抉った。深く、深く、刃が
突き刺さる。ポツカリと開いた傷口から、ボタボタと、赤黒い血が
溢れ落ちた。

「……俺たちがもっと早くクエストをクリアしていたら、もしかし
たら……」

やめて!!

「お前たちを、もう少し早く見つけられていたら……ッ!!」

「いや……、嫌よ、それ以上聞きたくないわ!!」

気づけば、自分でも驚くほどの金切り声をあげていた。けれど、
自身の口を止めることが出来ない。

「お願いよ、もうやめて! そんなの聞きたくないわ!」

「き、キカ……」

——いくらあなたたちがそうやって悔しがっても、ネージュ
は生き返らない!

「……っ、う、……っく」

危うく迸りそうになったそれを、何とか喉の奥で押し留める。
違う。これをぶつけるなんて、してはいけない。そんなこと、し
てはいけない。………分かってる。理解しているのだ。

「お願いしますから、もうやめてください。それ以上、あなたたち
が謝らないでください」

思いのほか平淡な声が出た。それに反応して、彼らの凭れていた
頭が、ナマケモノよろしくゆるゆると上がっていく。エギルたちの
顔を一人ひとり確認して、私は浅く息を吐いた。

「いいですか、よく聞いてください。————私は、あなたたちに

感謝することはあっても、責めたり、……ましてや恨んだりなんて、そんな的外れなことをするつもりは毛頭ありません」

彼が死んだのは、他でもない、私の力が不足していたからなのだ。彼らに気を病む道理はない。

「あなたが助けに来てくれた、という事実さえあればもう、……私は十分です」

どうかちゃんと笑顔を作れていますように。そう心の中で思いながら、先ほどよりも深く頭を下げた。

「……分かった。もう言わないから、頭を上げてくれないか」

「はい。……今日はもう疲れてしまったので、帰ってもよろしいでしょうか？」

「宿まで送らなくて大丈夫か？」

「お心遣いありがとうございます。けれど、お気持ちだけいただいております」

「そ、そうか。……明日のボス戦、無理しなくてもいいぞ」

「大丈夫です。お氣になさらないでください。……あ、ただ」

「ただ……、何だ？」

「いえ、大した理由ではないのだけれど……。明日、迷宮区の入口であなたたちと合流したいのですが、差し支えないでしょうか？」

「ああ、俺たちは大丈夫だ。なんなら、あの指揮官に一人遅れて合流すると言っておくよ」

「ありがとうございます。……くれぐれも、あのトンガリ頭の耳には入らないように気を付けてくださいね」

『ボス戦に遅刻するとはどういう見や！！』とかなんとか、それくらいは言いそうである。凄く面倒なことになりそうだ。

それはエギルたちも察したのか、みな苦笑いを浮かべる。

……良かった。どうやら、少し気が晴れたらしい。あんな風に荒

れた心情のまま明日のボス戦に挑まれたら、それこそ目も当てられない悲惨な状況になる可能性があったのだ。

「……なあ、キカ。お前、本当に大丈夫なのか」

「もう、何度言わせるの。意外と心配性なのね、あなたって」

エギルの問いに笑って返し、しかしすぐに真顔を作った。

「ねえ、エギル。生と死はね、絶対に切り離せない関係にあるのよ。……それこそ光と影みたいに」

愛情と狂気。憧れと嫉妬。天才と狂人。——それらと同じように、常に背中合わせで、対になって分かつことが出来ない。

「誰しもが向こう側に、……そうね、「影」の方に、その時がくれば笑ってしまう程簡単に落ちてしまう。それはもう、あっさりと。けれども、生きている限り、死だけは逃げ切ることが出来ない。どれだけ技術が発展しようとも、ありえない、……あってはならないのよ」

生きものは、死ぬことが出来てはじめて「生物」と言えるのだ。

「そして、それを突き付けられた、まだ「光」の方にいる私たちは、たとえどんな経緯があろうとも受け入れなくてはならないの。……それは、今回のことでも同じよ」

そうしなければ、……抗い続ければ、耐えきることなど出来なくなるだろうから。今後、同じようなことは幾度となくあるのなら、なおさらに。

「だからこそあなたたちは今回の事には囚われずに、……出来るならご放念ください。そして、彼が生きていたという事実だけを、その優しいお心に刻み付けていただければ結構です」

彼らからさらに何か言われる前に、逃げるように背を向けた。

光のしずくが、黒く塗りつぶされた空に散りばめられている。街

の中は、街灯や店からこぼれる光だけで彩られて、私に反し輝いていた。それらが、何故かととてもなく痛い。早く、今日という日を終わらせてしまいたい。

けれど、それでも、私の意志と足は、体を休めることなく、フィールドの方へ向かっていた。途中、閉店間際のNPCの店へすべり込み、"それ"を一束買い求める。

手に持った"それ"を見下ろしながら、口元に、いつもより無理やりに笑みを作った。

「……ばかだな、私」

いっそのこと、あそこで彼らを糾弾して、罵って、わめいて、…締めめにデュエルでも申し込んでしまえば、少しばかりでも楽しかっただろうに。

けれど、いつものように理性が邪魔をする。それは正しい行為ではないと理解しているのだから。

「ああ、もう、嫌になってしまう」

つぶやいた声は暗闇に溶けて消える。私は、すでに闇が支配しているフィールドへ足を踏み入れた。

* * *

広い草原に座り込みながら、星一つない黒い空を見上げた。もう私の隣に、彼が座ることはない。もうここで、彼と話す日は訪れない。

「……ねえ、ネージュ。今日は星が一つも見えないわ……」

あなたと見た夜空は、とても綺麗だったのに。

「何とか言いなさいよ、ばか」

私を勝手に守って、約束を破って、頼み事だけを残して消えるなんて、本当に馬鹿じゃないのか。

——主街区に行きたいんだ。迷っちゃって、どうしようかって思ってたんだよ。

思えば、ネージュとの出会いはとんでもないものだった。音ひとつしないこの草原で、彼に声を掛けられたのだ。

今でも覚えている。彼の心底困ったような声と表情。私が街まで送ると言えば心底嬉しそうに顔を輝かせていた。

いつも、いつも。最期のあの瞬間も、いつも照れたような笑みを浮かべてこう呼ぶのだ。

——『キカちゃん』、と。

彼に名前を呼ばれるのが好きだった。

格好悪いはずの笑顔を見るのが楽しかった。

すんなり私に馴染んで、妙にきらきら輝いていて、——格好良かった。それは、最期の笑顔も同様に。

……だから、私はあの瞬間を忘れない。エギルやルーク達には忘れてほしい、と言ったが、私は決して忘れない。

私は、一生背負おう。

彼の笑顔を、優しいテノールの声を、夕日のように輝く髪を、空の色を映す海よりも澄んだ瞳を。「ネージュ」という名前の通りに、真っ白だった彼を。私には眩しすぎて、直視出来なかった彼を。

私は絶対に忘れない。忘れては、いけないのだ。ずっとそれらに

縛られ続けなければいけないのだ。それが、彼へのせめてもの償いになるのなら。

彼と見上げた空を振り仰ぐ。あの日々に見た夜空を思い描いた。きっと黒い世界に大切なものをばらまけば、あんな風に輝くのだろう。彼のように強く、眩しく輝くのだろう。……私の星は、くすんでしまつて、肉眼ではとも見られないと思うけれど。

「……強くなりたい。誰かを守ることが出来るくらいに。もう、私の目の前で誰も死なないように」

———強くなりたい。

△ i 6 8 2 | 1 4 6 9 2 ∇

私はウィンドウを操作し、両手用直剣———、誰にでも手に入れることが出来るものだけれど、彼が私を守ってくれた、これだけは世界にたったひとつの聖剣であるそれを手に取った。

目を閉じて、そっと、別れを告げる口づけを落とす。そのまま、静かに地面へ突き立てた。赤い花びらが舞う。

そのそばに、先ほど買った「それ」———、スイートピーの花束を添える。

あなたに貰った花。今まで手渡された花束の中で、一番嬉しかった花。

花言葉を知っているかと問われて「ほのかな喜び」と答えれば、

本当に嬉しそうに笑っていた。もしかしたら、あの時にはすでに私のことを……。

「ねえ、ネージュ。スイートピーには他にも花言葉があること、知っていたかしら？」

ひとつは、「優しい思い出」。

苦しみしかなかったはずの後ろの道に、僅かでも光を落としてくれた彼へのお礼。

「私、あなたと一緒に居られて本当に楽しかったわ。……嘘じゃない、本当よ」

ひとつは、「別離」

別れがあんなに急になるだなんて考えもしなかった。つい数時間前までは、いつものように会話をしていたのに。

「……こんなことになるなんて、私は思ってもいなかったわ」

——キカちゃん、好きだったよ。

「私も、あなたのこと嫌いじゃなかったわ」

きっと、あなたとは違う意味の想いだったと思うけれど。私には、そういうことを上手く理解することは出来ないけれど。

——いや実際はそうではない。よく分からないのだ。分からないのに、あなたは待ってくれなかった。私が答えを見つける前に、消えてしまった。時間を与えてくれなかった。

もし仮に、この先答えを見つけられたとしても、返す相手が居ない。聞いてくれるあなたは、もう死んでしまった。

だから、これだけしか言えない。こうとしか、表現出来ない。

——あなたは大切な親友だった、と。

いつだって気づくのは手遅れになってからだ。流れるような日々に流されてきたからか、隠れて、見えなくなっていた。自分にはない素直な笑顔に目が眩んで、しかしそれに寄りかかってきたから。

「……私は「闇」。どれだけ白を混ぜたとしても、雪のような純白になることは出来ない。……だから、「光」に寄り添って、少しでも白くしようとしてしまうの」

ねえ、ネージュ。私に「笑って」と言ったあなたには、本当の私が視えていたのだろうか。

闇の中でくすぶりながら、それでもひたすらに待ち続ける私が。

ビュオオオと、私をせかすように風が唸り声を上げた。私は、すっと笑みを作る。

「……さて、あなたの頼みごとを守らなければいけないわね。まったく、大変なことを残してくれたわ」

何しろ、顔も、名前さえわからない相手を、この世界で探さなければいけないのだから。

きっと、今までのどんな事よりも難しいのだろう。それでも私は見つけ出して見せる。それが、彼が最後に残した願いであり、どんな事実よりも優先される意志。

「だから、安心してくださいね」

足を後ろに引く。そして、そのままさらに一步、二歩。

しかし、そのまま移動していて、なかなか剣から目を離せない。けれど、背中を向けなければならない。きつく目をつぶる。息を深く吸い、すべてを出し切るように吐き出した。迷いも、後悔も、何もかも。

目を開けた。当然のことながら、数秒前と景色は変わらない。

「いつか、また来るわ。あなたが守りたかったもう一人の人と、一緒に」

すんと出た言葉と共に背を向けた。そうして、そのまま立ち去ろうとした瞬間、ふとネージュと交わした会話が蘇る。

『日付が変わったら開けてほしい』

そうだ。ネージュが、私へ渡してきた手紙があったはずだ。

チラリと時刻を確認すれば、新しい日を迎えた頃で。そのことから自分がどれくらい長い時間あそこに立っていたかが察せられたけれど、頭を軽く降って払拭する。

このメッセージは、ここに書かれた内容は、彼の生前の思いなのだ。

私は震える指先でウィンドウをタップして、ネージュからの手紙を取り出す。全力疾走した時のように、息が上がった。

視界が時間帯のせいではないもので闇に染まりそうになるのを、なんとか堪えつつ、そっと、封を切る。

封筒の中から出てきた手紙は、ネージュの性格をそのまま表すかのように、とても繊細で柔らかな文字で書かれていた。

『キカちゃんがこの手紙を読んで、もし嫌じゃなかったら……、今日のフロアボス戦が終わった後伝えたいことがあるので、いつもの草原に来てください。待っています。』

面と向かって誘えなくてごめんね。きっと言葉が出なくなっちゃうと思ったので、手紙にしました。

……あのね、僕は———』

「……ばか、やっぱりあなた、大馬鹿者よ」

自身のストレージから、両手剣と一緒に拾い上げていた彼の遺品を取り出す。何度か操作ミスをしたがらも、もう一つの遺品———指輪をオブジェクト化した。

そして、印字されている文字を暗い中なんとかを読み取り、絶句

した。

“TOUJOURS AVEC KIKI”――。

フランス語で、『いつもキカと一緒に』。

もしかしたら、彼の名前が刻まれた指輪もあったかもしれない。

そして、“キカ”と印字されていた方を彼が身に付けていたのなら、

“ネージュ”と印字された方は――。

「……ッ」

彼が贈ってきたメッセージは、……生きていたら直接伝えられて
いただろうメッセージの存在は、ひどく重く、私のことを貫いた。

「ねえ……、私、どうすれば良い？」

あなたの本心を、その口からしっかり聞きたかった。私の答えが
どうあれ、ちゃんと聞いて、ちゃんと返したかった。

「どうして欲しいのよ、ネージュ」

知らなければ良かったなんて、そんな残酷なことは言わない。私
に出会わなければ彼は死ななかったのではないかなんて、そんな無
責任なことは言わない。

けれど、永遠に抜け出せない迷路に迷い込んだ気分だった。途方
に暮れてしまって、もう、ここから足が動けそうにない。

隣には、手を握ってくれる彼はもういない。

改めてそのことを強く認識してしまったのに、やはり私の頬に涙
が伝うことはなかった。

∧ i 5 5 2 5 | 1 4 6 9 2 ∨

第9話 黒染めの化け物（前編）

つややかな黒髪が、さらさらと風に揺れる。少年は息を上げながらも走り、その背中を追っていた。

「おい待てよ、モミ！」

「えへへ、やだよー！」

ちらりと少年を振り返った少女はあっかんべーといったずらっぱく笑い、パッとまた走り出す。追いつくようで追いつかない微妙な速さで、距離が開いては縮まる。その繰り返しだ。

しかし、何回かそれをしたあと、疲れたのか、飽きたのか、ぴたりと足を止め、振り返った。その瞳は、不安そうに揺らいでいる。

「スグたちと、離れちゃったね」

少年の腕に、少女の手が回った。ぎゅっとしたその締め付けは痛いくらいで、少女の不安をそのまま表しているようだ。少年はなんとか明るくするべく、口を開いた。

「そ……、そうだ！ 今日の劇、すごかったよな！」

すると、少女はぷくりと口を膨らませながら、

「劇じゃなくて、歌劇！」

「同じようなもんだろ？」

「違うもん！ 歌劇は、歌って、躍って、お芝居もするの！」

ぱっと腕を離れた少女は、その場でくるりと回った。少し回転をしただけなのに、その動きはなめらかで、可憐だった。

「モミは、お芝居も出来るんだからすごいよなあ……。今日だって勉強のつもりで母さんたちにお願ひしたんだろ？」

「うん、そうだけど……。やっぱりバレエが一番好きだよ！」

にっこりと笑い、そしてまたくるくると回った。

くるくる。くるくる。

長い髪も、少女と一緒にくるくると回る。

「あ、じゃあ、兄さん！ クイズ出してあげる！」

「クイズ？」

「そう！ ……なんで私がバレエをやっているのしょーか？」

「なんでって……、さっきモミが自分で言ってただろ」

「そうだけど、……うーん、じゃあ考えておいて！ いつか、教えてあげる——…」

私が、バレエを続けている理由を。

△ i 7 0 8 — 1 4 6 9 2 ∇

— — — — — *

俺———キリトの目の前には、天井までつく巨大な扉が構えている。その威圧感は凄まじく、自然と体は強張っていった。だが、俺たちを含めた約四十名を包む微妙な緊張感は、そのためだけではない。これから行われる第一層ボス攻略戦———、しかもほとん

どの人間が初めての経験だ。……まあ、これは何十回とやっても慣れることはないだろう。

しかし、現段階で、俺は这其中でもっとも集中できていないと断言出来る。しかしそれは、ベータテスターだったという事実から来る余裕ではない。

……夢を、見たから。

あちらに残してきた二人の「妹」の内の一人、紅葉と俺が話している幼い日。

ありきたりだけれども、俺にはもう出来ないだろうその会話。まだ俺も、紅葉も何も知らなかった、ただただ純白で彩られていた頃のことはずだ。

紅葉と最後に交わしたのは、会話とも呼べないような言葉だった。

『本当の兄じゃないくせに』。

絞り出したような、けれどはっきりと拒絶の意志が込められた声だった。それが、重く俺に押し掛かっている。鈍色の鎖が、両足に絡みついている。事実が彼女の言葉によって形を成し、俺を縛る鎖となっていた。

あの時の彼女の表情は解らない。それは、紅葉が背を向けていたせいでもあるし、たとえこちらを向いていたとしても、俺は目を逸らしてしまうから。

いつも彼女の瞳は、何かが混じり合い、溶け込み、押し込んだような色を宿している。とても昏くて、重い。痛くて、冷たい。4年前あの日と同じようで、違う瞳。

あの目はもう、ずっと変わらない。俺が変えてしまった。壊してしまったのだ。

それを俺は、直視出来ない。紅葉の目が怖くて、声が恐ろしい。

紡がれる一言ひとことに、足がすくむ。

紅葉の存在自体が、俺の罪の証だった。だからこそ、一瞬でも視界に入ってしまうと、精髓反射で目を覆ってしまうのだ。

……彼女をそんな風にしてしまったのは、他でもない俺だから。

彼女は、自分ではおそらく否定したかったのだろうが、それでも周りからしてみれば「天才」という言葉に尽きていた。剣道を強いてきたあの叔父を、その才能で黙らしてしまうことが出来るほどに。それは底を見せることが無く、バレエはもちろんのこと、絵画、演劇……、そして弓道と、幅広くやってのけていた。弱点と言えそうだったものといえば、唯一苦手だった歌唱だろうか。

剣道も、よくスグと一緒に立会いをしていた。こちらも、どちらかというスグの方が優勢だった。まあ、実力的にはどっこいどっこいだったと思うが。

ただ、紅葉は剣道よりも弓道の方が得意のようだった。最初は叔父が、芸術ばかりに才能を目覚めさせる彼女を見て、泣く泣く伝統武術をやらせたいがためにほぼ強制的にやらされていたことだったのだが……。それがもう、彼女の気質とぴったりとはいまだにまいったのだ。

見ている側が恐怖すら覚える集中力。矢を放つ一瞬まで、頭の天辺から足の爪先まで張り巡らされる揺らがない緊張感。

長い黒髪を結びあげた姿は、凛々しく輝いていた。

——その光を、俺はみすみす踏みにじってしまった。

その事実と、己の夢の中にすら出てきた、輝いていた頃の思い出。今の俺はその狭間で白と黒が混じり合い、とぐろを巻きながら、静かに、しかし確かに沈んでいく。

これじゃあ集中できるわけがないし、この後が危ない。最悪、周

りに迷惑をかける。

切り替え追い出すために強く目をつぶった。そして、息を深く吸い――、

「何、ボーとしているの？」

ピンと張られた声。俺の体が跳ねた。反射的に振り返りながら、半歩後ろに下がる。しかし、すぐ目に飛び込んできたのは、優しいな栗色だった。

それが、少女――、アスナの流れるような美しい髪の毛だとすぐに気づき、無意識に詰めていた息を吐いた。だが、目の前の彼女はそれが気に入らなかったらしい。軽く横目で睨みながら、

「人の顔を見てため息つかないでくれる？」

おお、怖。迫力満点。

「ああ、ごめん。気にしないでくれていいから」

苦笑いを浮かべ、手をひらひらと振りながら、なんとか誤魔化す。誤魔化そうと試みる。それでも何か続けようとするアスナを手で遮ってから、視線を外した。諦めたような息を吐き出すのが、ちらりと聞こえたような気がするが、申し訳ないがスルーさせてもらう。

「……あ」

するとそんな彼女の口から、蚊の鳴くような小さな声が漏れた。もう一度視線を戻すと、かすかに驚きの色を顔に滲ませている。

え、何、何？ という半ば興味を携えながら、一応建前は「いぶかしんで」アスナの視線を追った。そこで、俺も、「……お」と音になるような、ならないような声を発する。

――長い黒髪をポニーテールにして結い上げた女性プレイヤ―。

だが、悲しいかな、ここは最後尾なのでよく見えない。首をぐいーっと亀のように伸ばしたが、がちりした体格の男が後ろに立ち、

さらにその姿を捕えることは不可能となった。諦め自然と背伸びしていた少々つらい体制を戻す。

「……あの人、さっき迷宮区に入る時にパーティーの人たちと合流していたわ」

「合流？ ……遅刻でもしたのか」

「いえ……、よく分からないけれど」

「体調でも悪かったのかな」

無難な俺の推測に、アスナは首を振って「分からない」と言った。まあそうだな、と心の中で返し前へ向き直る。

「……私、他にも女性が参加していたなんて、その時まで気付かなかった」

ポツリと、誰にともなく呟いたのか、それとも話しかけられたのか判断が微妙につかない言葉が隣からした。後者だったとしたら、何も反応をしなければ無視したことになってしまう。とりあえず首肯しながら、

「ああ、俺もだ」

……首肯して、首をひねる。何故だか、ほんの少ししか見られなかったあの後ろ姿が引っ掛かるのだ。ちょうど、魚の骨が喉に刺さっているような気がして落ち着かない時と同じような感じ。

しかし、正体をつかむべく奥へ探ろうとしてもするりと逃れてしまって、しこりのようなものも一緒にどこかへ消えてしまった。なんとなくすっきりしないものが残ってしまったため思わず顔をしかめると、わき腹をつんつんと突かれた。

「ちょっと、本当にさっきから集中できていないわよ。……フィールドを歩いている時も、なんだか上の空だったし。大丈夫なの？」
ぴしゃりとさっき自分で思っていたことを言われ、苦笑する。

「大丈夫」

短く答えながら、視線を落とす。……とても、「従妹」の夢を見たなんて言えないよな。密かにため息を飲み込み、少女二人のことを意識から追い払いにかかる。

まあ結局、一時的にとはいえ忘れるなんて、俺には到底不可能なのだが。

「そういえば、昨日のこと、どう思う？」

「へ？ 昨日？ ……何かあったのか」

そんな流し目で睨みつけてくれよ。仕方ないだろ、ずっと迷宮区に籠っていたんだから。

「……………あなた、何も知らないの？ よく分からないイベントが勝手に始められてしまって、不幸にも選ばれてしまったプレイヤーのうち、数名が亡くなってしまったそうよ」

「な……………」

イベント？ 何だ、それは。βテストにそんなものは無かったし、公式サービスが始まるい以前に告知も何もなかったはずだ。

嫌な汗が頬を伝う。良くないことが起こるような、そんな漠然とした不安が急に俺を襲い始めた。眉を顰めるアスナへさらに言葉を重ねようとした時、周囲のざわめきが一気に静まった。つられて正面を見れば、好青年なディアベルが扉に背を向け立っている。

「……………いよいよ始まるわね」

「ああ、そうだな」

ボス攻略戦の幕が上がった。俺の中に確かな違和感と胸騒ぎを残したまま。

————そしてそれは、最悪の形で現実のものとなる。

オレンジ色の光が、俺の肩をかすめた。軽くひねっていた体を戻

し、すかさず剣を振り下ろす。すると、まるで呼吸音まで合っているような錯覚を覚えるほど、アスナがこれ以上にないくらいのタイミングで敵に攻撃をあてた。光の欠片が四散する。それを確認し、彼女とアイコンタクトを交わす。唇を引き結ぶアスナが、静かに頷いた。

メイン戦場の方をちらりと見て、息をつく。HPバーは現在、3本目の半分を切ったところだ。ここまで特に問題なくHPを削ってきているので、おそらく大丈夫だろう。：そうであってほしい。

そして、また視線を戻そうと目線を流し、——しかし糸で縫いつけられてしまったかのように止まった。

……ボスの右手。握られている武器。

その瞬間、電流が体中を駆け巡った。同時に、今までの認識が誤りだったことを悟る。そうして、あの嫌な予感が当たっていたことも。

はやる気持ちを抑えられずに視線を走らせれば、ボスの正面に青髪の青年。後ろには彼が率いるC隊のメンバーが続いていた。それを視界に捕え、思考よりも口が先に出た。

もはや悲鳴に近いような声で叫ぶ。

「だ……、駄目だ！ 全力で——！！」

息が詰まった。思考が、動きが全停止する。

一筋の青い、まるで流星のような真っ直ぐな光が、一直線に彼らへ向かう。それは見事にディアベルの顔をかすめ、ひるんだC隊が後ろへ飛び退いた。

「な……っ!？」

あれは、ボスの攻撃ではない。ならば誰が、何を。

あの光が生まれた場所を探そうと、視線が泳いだ。しかしそれはすぐに、強制終了させられることになる。体のバランスを完全に戻

し切れていなかったディアベルが、他のC隊のメンバーとともにボスの攻撃をくらったのだ。

重範囲攻撃、ソードスキル《旋車》。まともにそれを受けたディアベルの体が浮き、そして――――。

時間が止まる。

俺のすぐ近くで響いた鈍い音が、この場が瓦解したことを冷酷に告げた。

――――*

朝、自身の長い黒髪を一つに結わえ、昨夜約束した通りに迷宮区の入入り口前まで来た。石造りの壁に背を預けながら空を見上げていると、ほどなくして40人程の集団が歩いてくるのが見えた。考えるまでも無い。フロアボス攻略戦に参加するプレイヤーたちである。

幸いあのトンガリ頭は自身のパーティーメンバーと話しているようで、こちらに気付いている様子は無い。あの少年の姿にいたっては、ここからは見えなかった。ひとまず安堵の息を洩らし、先頭を歩く青髪の青年に軽く会釈しながらあの屈強な色黒の男の姿を探す。すると、先に私の姿を認めたエギルがひょこっと顔を出し、私へ向けて手を振った。

「よう、キカ」

「みなさん、おはようございます」

「おはよう」

微笑みを作りながらありきたりな挨拶を交わし、ずっと列の中に混じる。

「……なあ、キカ。昨日あんなことがあったんだから、無理しくても良いと思うぞ」

「何度も言わせないでちょうだい。……どうってことないわ」

「……………そうか、すまない」

「いいえ、平気」

そう、大丈夫。だいじょうぶ。

———キカちゃん。

駆け巡る朗らかな笑顔と柔らかい声を、手のひらに爪を立て払拭する。きつと、身体を動かしていたほうが、余計なことを考えなくて済むはずだ。

前へ進まなければ。歩みを止めてはいけない。振り返ってはいけない。耳も目も閉ざして遮断するのだ。無駄なことへ思考を割かないように。気持ち揺るがないように。

———好きだったよ。

……大丈夫、忘れない。絶対に、忘れないから。あなたの思いを、無かったものにするとはしない。

あなたを、背負うから。最期の一瞬まで。

「……キカ……」

気遣うような声音で名前を呼ばれるが、聞こえていないふりをして無視した。私のことを心配してくれているのは何となく察しているが、どうも居心地が悪い。私のことなんて、気にしなくていいのに。

彼らはボス戦のための一時的なパーティーメンバーだ。これが終

われれば、私は抜けることになるだろう。フレンド登録もしていないし、きっと別ればそれきり。もちろん街中でバツタリ会ったりするだろうし、また共闘する機会が無いとは言いつけないが、エギルたちとの関係はそこまでだ。所詮他人。仲間とは言い難い、他人。だから彼らに、私のことを気にする道理はないのだ。変に深入りしてほしくない。たとえ彼らが善意で気に掛けてくれているとしても、私は容認出来ない。

「これからボス戦なのよ。他人のことを気にしている余裕なんてあるのかしら」

不気味な雰囲気を漂わせる迷宮区の地を進みながらもチラチラと視線が向けられるので、耐え切れずピシヤリと言いつつ。正直、そんな風に見られても迷惑なだけだった。それに私たちの空気が他の隊へ伝播してしまう可能性だってある。戦闘に影響を出しにくい。少なくとも今だけは、これから行われる重要な戦いへ目を向けてほしい。……私は、別に何ともないのだから。

「……………ああ」

エギルが固い表情で頷く。『せっかく心配してやってるのに』、だとか思っているのだろうか。イラついているのだろうか。

「……………ごめんなさい、ありがとう」

ツキリと痛んだ胸には知らんふり。目を逸らして、感覚を断ち切る。

集中しなければいけない。バラバラになった思考を一本にまとめ上げるのだ。余計なものはいらないのだから。

私は口をキツく引き結び、前を見据えた。私たちが目指す部屋は、もう少し先だった。

「――戦闘は順調に進んでいるように、見えていたのに。」

私はふと感じた違和感に眉を顰める。何か、何かが引っ掛かる。モヤモヤを抱えたままチラリと遠くにいる「彼」の方を見遣り、そして戦慄した。

「……どうして」

何故？ この位置からでも分かるくらい、そんなに慌てているの。咄嗟に彼の視線の先を辿ると、青髪の青年に行きついた。そしてさらに向こうにはこのフロアのボス。その手に握られている武器に、私の目は縫い付けられた。どくん、と心臓が大きく跳ね上がる。

「――え？」

あれは本当に、事前情報で聞かされていたタルワールなのか？ 以前何かの本に載っていた写真とは、少し違う気がする。いくら作り物とはいえ、剣を重視するこの世界ではビジュアルにはとことん拘るはずだというのに。

ザワザワと神経を逆撫するような胸騒ぎが、一層強くなった気がした。私は逸る気持ちを押さえながらも一度あの少年に視線を戻し、瞬間、おぼろげだったそれは確信へと変わる。

「これは……、やっぱり！！」

「――私たちの想定外のことが起こってしまう！

バツとボスの方へ目を向けた。果敢に突っ込んでいく、C隊の面々。

「……ッ」

間に合わない。駄目だ、私の位置からでは到底知らせることは出来ない。――否、ひとつだけ。

ひとつだけ、方法がある。迷っている時間は無い。

「キカ、何して……っ！？」

突然右手を振ってウィンドウを表示させた私に、驚愕した声が飛

ぶ。しかし、その時にはもう、私の左手には「あるもの」が出現していた。

「お願い、気付いて……ッ!!」

躊躇いなくソレを放った。青白く輝く細い線が、空間を切り裂く。それと同時に、少年の声が部屋いっぱいに響き渡った。

「だ……、駄目だ! 全力で——!!」

跳べ、だとか、避ける、だとか続くはずであっただろう彼の言葉は、そこで途切れた。私の放ったソレが、ディアベルと接触するかもしれないかの距離感で、ボスと彼らの間に立ち塞がったのだ。それに驚いて彼らはそこから飛び退いたが、……しかし、訪れたのはあまりに無情な一瞬だった。

身体のバランスを取り戻し損ねたC隊が、ボスのスキル攻撃を食らう。まともに攻撃された彼らの身体が吹っ飛ばされた。

「やばい……ッ」

「追撃が!!」

エギルが前へ飛び出す。私たちもそれに続こうとしたが、イルフアングが剣を振るう方が早かった。鋭い三連撃の攻撃が、ディアベルを飲み込む。

彼の姿が掻き消えた。——否、かなり後方の床に叩きつけられたのだ。恐々と後ろを振り返れば、青髪の男へ駆け寄る黒髪の少年の後ろ姿が視界に入った。

けれどももうきつと、遅い。私は耐え切れずに目を伏せる。昨日目の当たりにした光景が、まざまざと瞼の裏に蘇った。

そして成す術もないまま、ガラスが壊れるような無慈悲な音が悲しく響いた。

……これで4人目だった。私の目の前で死んだ——、私が助けられなかった人の人数。昨日の男と少女、そしてネージュに、

……今回の指揮官であるディアベル。

届かなかった。私とそっくりな少年の目の前でその姿を青い欠片に転じさせる様を、ただ見ていることしか出来なかった。

あまりの出来事に、正常な思考が出来ている人はほとんどいない。みな完全に攻撃の手を止めてしまった。このままでは、自分たちはもちろん、他の人間も死んでしまう可能性が高い。

「……エギル」

「……………あ……………」

「エギル！！　ぼさっとしないで！」

肩を跳ねさせた巨漢を睨み上げて、鋭く言い放つ。私の勢いに気圧されたのか一瞬エギルはたじろいだだが、すぐに表情を引き締めて私を見つめ返してくる。

「エギル、あなたはこのパーティーのリーダーよ。…………自分のすべきことは、分かっているでしょう？」

「ああ」

ハッとしたような表情へ変えた色黒の彼は、すぐさま頷いて仲間へ向き直った。心こころあらずの様子の人々を、壁際まで引き連れていくようだ。チラリと後方を確認すれば、黒と眩い茶の影がボスへ突っ込んでいく。あまり時間は無い。未だパニック状態に陥っている自身のパーティーメンバーへ視線を戻し、眉を顰めた。

「いいか、今の内に回復するんだ」

「わ、分かった……………」

「でも、エギル。い、今……………」

「……………そうだ、ディアベルは死んだ。だが、切り替えなければ俺たちも死ぬ」

「……………う」

男たちが顔を青ざめさせ、言葉を詰まらせる。私は回復ポーション

ンを飲み下すと腕を胸の前で組み、彼らを真っ直ぐ見据えた。

「そうよ。……このままじゃ、きっと大勢が命を落とすことになる」
きちんと筋の通った思考回路へ戻ることが出来たのは、この部屋に何人いるのだろうか。今は前に出てくれた黒曜石色の少年と栗色の少女によって何とかこの場は繋がっているが、そう長くは続かない。かといって、こんなにグラグラとした精神状態で彼らが出て行ったとしても、まともに立ち回ることなんて出来ないだろう。ボスの良い餌食だ。

さてどうするかと、この場を打開する解決策を求めるために、考えを巡らす。すると、おずおずといった様子で私へ声が掛けられた。いくらか顔色がマシになったルークだった。

「……なあ、キカ。ここで話すべきじゃないってことは分かってるけど、ひとつ聞いてもいいか」

「何かしら」

「………さっきお前が使ったやつ、あれは何だ」

強張った表情と声で問われ、私はようやく自身の「左手」に視線を下ろす。

ああ、いけない。忘れていた。

私はさっきと同じように、利き手である「右手」の人差し指と中指を下へ振った。ㇿクイックチェンジㇿですぐに曲刀へ持ち替えながら、ゆっくりとルークへ視線を戻す。ポニーテールにしている黒髪が揺れ、毛先が視界に入った。

「……エクストラスキルㇿ弓術ㇿ」

男たちの表情に、驚きの色と感嘆が混じっていく。そして、目を真ん丸に見開いたルークが、絞り出すようにつぶやいた。

「……それって、習得は不可能って言われていたスキルじゃねえか………！」

「そうね。……けれど、それでも私の主武装は、「弓」よ」

もし、剣だけと言われてきた世界に遠距離武器が使えるスキルが存在していたら、ゲーマーたちが注目しないなんてことがあるだろうか。

このスキル自体は、ベータテスト時のかなり初期に発見された。ちなみにクエスト発生場所は、私がいた寂れた村だ。

そのイレギュラー性から、電光石火の速さですぐにプレイヤー内で広まり、これまた光速のごとくの早さでインターネット上でも話題になっていた。……これのおかげで、私がこのスキルの存在を知ることが出来たと言っても過言では無いだろう。

さらにベータ時のトッププレイヤーが挑戦しても習得出来ないということも手伝って、人々を加熱し、変な意地を張る人も続出してあの寂しい村が人で溢れかえる事態も発生。もはや弓を使いたいのではなく、ただ単純にスキルを取得したいと考える人たちも現れた。しかも嘘か本当か解らない情報まで流れ出すことにもなってしまった。それを良しとしなかったのかは定かではないが、公式で《弓術》の詳細が正式に発表された後は、余計にこれらのことも加速してしまったような気がする。そのせいか、——いや、多分これは、原因としては氷山の一角だろう。成るべくしてそうだったのだ。

私は呆れながらも、情報収集のためにネットの海を彷徨っていた。そして、徐々にブログやらなんやらの件数が、日を追うごとに少なくなっていくことに気が付いた。

……ああ、そうか。

それを見て、私は真っ先にそう思った。理由は単純明快。諦める者も増えているのだと悟ったからだ。

挑戦者が減少していき、ベータテスト終盤ではほとんどクエストに挑む者自体がいなくなったのも、ある意味必然だろう。そして、

そのことによってついた別名——、というよりも付け足された名称は、**「クリア不可能のクエスト・弓術」**。

さらに、習得者がいない理由が少なくとももう一つある。それは、**「利便性が低い」**ということだ。

モンスターに接近されれば攻撃も出来ないし、肝心な弓と矢は、**「弓術」**を習得している鍛冶師にしか作成できない。すなわち、両方のスキルを習得しているプレイヤーを探るか、自分が**「鍛冶」**を取り、なおかつその経験値もあげていかなくてはならない。おそらく前者は、大量の砂の中から特定の一粒を見つけることくらいに困難なことだろう。よって、消去方で後者の方法をとるしかないのだ。

これらのことが相まってか、私があの村にいた一カ月、誰一人としてクエストを受けに来たものはいなかったと思う。……まあ実際は、私がそのクエストを4日ほどでクリアして近くのフィールドへ出ていたので、その間のことは知らないが。

「——これで解ったかしら？ 私が左手に曲刀を持っている理由」

エギルが、納得はしたが理解は出来ない、と口に出さなくとも言っているような、苦いものを顔に浮かべた。

「ああ、なんとなく。……だいぶ恐ろしいが」

矢で倒し切れず、敵の接近を許してしまったら。そうやってしまうと、逃げるか、弓矢の間合いまで下がらなければ、一方的に攻撃を受けることになる。それはつまり、死へ直結する。

これを回避、または解決するために考え出した事は、副武装を装備とすること。しかし、すばやく出来なければ意味を成さないのです、**「曲刀」**の経験値を上げ、**「クイックチェンジ」**を真っ先に取り、それをスムーズに行使するために左手に武器を持った。……それだ

けのことだ。

ちなみに、今までエギル達の前で弓矢を使わなかったのは、単純に目立ちたくなかったからだ。別段彼らを信用していないわけではないが、出来るなら初期の内は、知っている人間を最小限に止めたかった。

だがそれは、先ほどの攻撃で意味はなくなった。ここからは、いかにして「彼」に弓矢を使っている姿を見られないかということにフェーズを移動する。

「だが、そこまでして、なんで弓を使うんだ」

……その答えは、いたってシンプルだ。私は微笑みを作り、彼らに向ける。

「……私は向こうで、弓道は得意ではあったけれども、好きではなかったからよ」

スグと一緒に剣道をしている時の方が、有意義だと思っていたから。無理やり習わされていた弓道よりも、剣道の方が楽しいと感じていたから。

だから私は、弓を手にとったのだ。

上手く理由が飲み込めないのか、皆一様に首を傾げる。私はそれを見て「深く考えなくてもいい」と言葉を掛けようと口を開き――しかしそれは中断された。

わああああああと、再び悲鳴が上がる。バツとそちらを見れば、先刻から孤軍奮闘していた二人の内、「彼」がバランスを崩したらしい。何とか持ちこたえたようだが、ボスの攻撃を相殺し続けるのに、集中力の限界が来たようだ。次何かあれば、今度こそ危ない。

また、私の目の前で死んでしまう。

その細くて黒い後ろ姿に、心臓がザワリと撫でられた。思わず舌

打ちをし、何故か震える足をなだめながら、顎でくいとそちらを指した。

「……ほら早く行ってあげないと、あの片手剣使いサンと細剣使いサン、死んでしまいますよ」

「……………」

呆けていた顔をすぐに引き締めたエギルが、バツと走り出す。私を追い越した時に生じた小さな風が、髪をふわりと舞いあげた。だんだんと遠くなる彼の背中を見ながら、両手を強く握りしめる。

見慣れた横顔が、苦しさで歪んでいた。

「……ああ、もう！」

イライラ感が頂点に達し、ゲージをぶち抜いた。途端に、自分の中で何かが爆発する。いつもよりかなり雑にウィンドウを操作して弓と矢のホルダーを装備し、「彼」と私の対角線上にエギルが入るよう立った。そして、体勢をぎりぎりまで落とし数本矢をつがえ、離す。

スキル《ウィンド・レイン》。

放たれたいくつもの光が雨のように降り注いだ。的が大きいせいもあり、吸い込まれるようにすべて命中する。エギルも間に合ったようで、闇色の少年に命中しそうになっていた攻撃を紙一重で防いでいた。何故か、己の唇から小さく息が漏れる。

「……今回だけだから」

そう、彼を助けるのはこれっきりだ。この場を切り抜けるための、苦肉の策。

ちらりと、「彼」を見る。

……まだいけるか。……………否、不可能だ。これ以上弓を装備しては、ただでさえ目立つというものなのだから、遠目でも私だとばれてしまう。

何しろ、昨日の出来事のために、十分な対策が出来ていない。せいぜい、向こうでは滅多にしていなかったポニーテールにするので精一杯だった。後ろ姿ならこれで誤魔化せているだろうが、横顔を見られればおそらくアウト。正面なんてみられた時には、もう「誤魔化す」の「ご」の字もつけられない程、目も当てられない状況になるだろう。

——と判断してすぐに、曲刀にすばやく持ち替えた。

そして、「彼」に背を向けるように立ち、床を蹴り上げ、すでにボスと向かっているルークの隣へ行く。そして、今度はルークが間に入るように位置取った。

「しばらく、こうさせてもらうわ」

小さくつぶやきながら、全神経を注ぎ込み、感覚を研ぎ澄ませる。今の最重要項目は、もちろんボス。こちらは、絶対に気を逸らしてはいけない。そして、差なんてあってないようなものだが、第二に「彼」の視線。おそらく、現在進行形で敵の技を先読みし、声を張り上げているのが「彼」だ。ルークが攻撃を受けるのに合わせて私も剣を当てながら、その「音」を頭の中へ叩きこむ。のちのち、役に立つかもしれない。

手首をひねり、上半身をねじり、時にはステップを踏み、あるいはジャンプする。

それを、何回繰り返していただろう。もしかしたら、そんなに長い時間ではなかったかもしれない。

目の前を、栗色の髪がさらりとなびいて、きらめきながら細剣が吸いこまれていった。その流れる動きのあまりの美しさと、エフェクトの輝きに、一瞬気を取られる。

……そのせいかもしれない。いや、初めから、この緊張感の中を長時間神経を切り詰め、なおかついくつものことに気を配るなんて

芸当、ヒトに出来るわけがなかったのだ。

いつかはそのしわ寄せが己に牙をむく。

「あっ……！」

「……っ！？」

何が起きたのか、咄嗟に判断が出来なかった。右に思い切り飛び退いたその瞬間、全く予期していなかった斥力が全身に加わったのだ。

視界は回り、足元は崩れる。

「……く」

それでも歯を食いしばってなんとか視線をあげれば、……なんてことだろう。私と同様に傾くルークの体と、——迫ってくる野太刀が視界に入った。

「……だめ……っ」

それは、反射的に。右手を千切れんばかりに伸ばし、彼の体を攻撃の範囲外へ押し出す。

同時に、景色が飛んだ。

近くで核爆発でも起こったのかと錯覚するほどの衝撃が襲い、爆音に近いそれが体を振動させ、耳元で轟く。一番上のHPバーがガクンと減ったのを律儀に捕えた時、全身が忠実な重力によって叩きつけられた。

「ぐ、……はっ」

腹が押し上げられ、吐き気のような強い不快感が迫り上がる。だが、目の前がぼやけるのを感じながらも、両手をつき上体を押し上げた。

——黒いコートが、ひるがえっている。

ちょうど、ボスの巨体を「彼」が斬りかかっていた。それを見て、内心ホッと息をついた。

よかった、と、つぶやく。

……だって、そうじゃないか。あそこで鉢合わせをしていたら、まず間違いなくバレていた。不本意ではあったが、ボスにぶっ飛ばされてしまって「良かった」と思ったのだ。

そんな、誰かには言えないようなことを思いつつ、何気なしに自分のHPバーを見て、ギョツとした。さっきの攻撃でガクンと減っていたのは解っていたが、それ以前にも少しずつ減少していたらしい。もうレッドゾーンに差し掛かっていた。

これは、その他もろもろの事情で戻れないな、と思い、傍観することを決め込む。

そして、一応ポジションは飲んだが、やはり出番はなく、私のHPがグリーンに入ったところで大量のポリゴン片が四散した。

第10話 黒染めの化け物（後編）

痛いほどの冷氣が包む。私はルークのうしろに身を隠しながら、何も出来ずに、ただ存在を無くそうとしていた。

目の前には、一人の黒い少年。先ほどのボスからドロップしたのであろうコートを纏っている。……刺すような視線は、すべて「彼」へ向いていた。

事の始まりは、ボスがその姿を光の欠片に変えてすぐのことだ。歓喜の雰囲気そのまま終わってしまえばよかっただろうに、いや、どう足掻いてもそういう結末にはならなかっただろう。一人の命が掻き消えたという事実はいまにむごく、精神を切り刻む。

それが、今回のリーダーであつたのならば、なおさら。

誰が最初だったかは、いまいち記憶にない。おそらく、ディアベルのパーティーメンバーだったと思う。その人が、ぶつけたのだ。ディアベルの死に対する怒りや、悲しみや、やるせなさを、元ベータスターに矛先を向けて。

むろん、ベータスターのせいだ、なんてとんだ言いがかりだ。もっとその脳みそをフル回転させて、状況を論理的に整理しろと彼らに浴びせたくなる。

しかし、頭に血が上っている状況では、焼け石に水だ。最悪、ベータスターへのわだかまりに火薬を足し、誘爆する結果に終わる。……おそらく、「彼」も解っているのだろう。哀しい事に、悟ってしまったのだ。その聡明な頭は、結論を弾き出してしまったのだ。このままでは、ベータスター全員に牙がむかれる、と。十中八九、ボスの攻撃を読んでいた「彼」も、そうなのだろうから。

だから、「彼」はそれを選択した。

あまりに身勝手なそれらを、すべて受け入れて。

「そうだ。俺は、《ビーター》だ」

冷笑を湛えながら、あくまで冷酷に、無慈悲に。……しかしそれでいて、悲しげに、苦しうに言い放った。

——なんていう、ことを。

体温が一気に上がった気がした。何かを詰め込んだ風船が膨れ上がっていき、針へ迫っていく。

「……馬鹿じゃないの……」

そんなことをすれば、非難の視線や声を一身に受けることは必至で、もしかしたら物理的な危害を加えられるかもしれないのに。

……たとえそれが目的だとしても、「彼」はなんて馬鹿なのだろう。本当に、どうしようもない。

だが、そんな馬鹿な人が起こした行動の裏に隠されたものに気づかないで、安易に悪意を向ける者たちは、彼よりも馬鹿だ。大馬鹿どもだ。

歯軋りをしながら俯けていた視線を上げれば、ちょうど黒い少年が螺旋階段の一番下の段に足を掛けていた。それを見止め、また視線を落とす。

私は元ベータテスターではないし、きっと今の場面で何も出来なかった。出ていけば一発で「彼」にバレてしまうのだから、それを理解している私は、私利を優先して一步も動けなかっただろうけれど。

それに、ああする以外の方法は私も思いついてはいなかった。——否、ディアベルの死に対する鬱屈だけならば、ベータテスターに対するそれを緩和、あるいは対象まで移す術を、私は持っている。

——もし分からず屋たちを大馬鹿と形容するのならば、私は馬鹿の極みだろう。

△ i 7 0 9 — 1 4 6 9 2 ▽

ルークの陰から出た。正面に周り、彼を見上げる形で目を合わせる。

「さっきはごめんなさい」

おそらく、先刻戦っている際に弾き返されたのは、彼と勢いよく接触してしまったためだろう。ほぼ同時にバランスを崩したのだから、確かなはずだ。

きっと、これっきりで縁は切れてしまうだろうから、ここで謝罪した方がいい。

「あ、ああ、いや、大丈夫……」

突然のことで首に手をやりしどろもどろになるルークをくすりと笑ってやってから、一步後ろへ下がる。けれども、わずかな変化に彼は気づかない。

ふと視線を外せば、先ほどまで栗色の髪が美しい少女と何やら話していたエギルが、こちらに歩いてきた。エギルは私たちを視界に捕え、表情を緩める。私は彼に向き直り、

「……エギル」

「ん、何だ？そんな真剣な顔して……」

「いえ……」

ごめんなさい、と心の中でつぶやく。

「……パーティーを組んでくださって、ありがとうございました。短い時間の間に色々あったけれど、あなたたちと一緒に戦うことが出来て、本当に良かった」

エギルが眉根をよせ、いぶかしむような表情になる。

「いや、別に礼を言われるようなことはしていないが。……ていうか、次のボス戦また……」

「いいえ、……もし組むのであれば、あの2人を入れてあげてください」

彼の言葉を遮り、言い放つ。その言葉にさらに表情を硬くして、
「2人？」

「ええ。……さっきの黒いソードマンの男の子と、栗色の髪でフェンサーの女の子よ」

「あ、ああ、それは構わないが……。しかし、お前は？」

私は、氣遣ってくれるその言葉に微笑みを作り、向けた。

……本当にこの人は、最初から最後まで。

「私は、しばらく身を隠すわ」

どうせ、「彼」の方面でもどうかしなければいけないし。

さらに一歩下がる。さすがに私の雰囲気が変わったことに気付いたようで、エギルをはじめとした、見開いた5つの目がこちらへ向く。

私はそれらを尻目に掛けながら、ウィンドウを操作し、――――
彼らのパーティーから脱退した。

それはすぐに、システム伝いで伝わったようで、彼らの目がますます開いていき、驚愕に顔を歪めた。ルークが何か言い寄ろうとしてきたので、それを小さな手の動きで制する。

「私は、最初からこのパーティーではなかった。「仲間」では、無

かった」

「……………は？」

左手に弓が現れ、腰に重みが増す。

「だから私が今からやることと、あなたたちは髪の毛一本分も関係ない」

今から起こす馬鹿の極みな行動で、私が一番恐れているのは、この人たちにも火の粉が飛んでしまうことだ。彼らには全く非は無いことなのに、巻き込んでしまうのは忍びない。

「さようなら」

私は、手を伸ばしてくるエギルをさっと避け、ポニーテールを揺らしながら背を向けた。後ろで何か言う声がしているような気がするが、意識は向けない。すべて関係の無いものとし、認知しない。矢を数本つがえた。今度は、スキルは発動させない。そのかわり、筋力値にものを言わせて弦を引いていく。

狙うは、たったひとつ。

誰かが、「あっ」と驚いたような、悲鳴のような、なんとも判断の付きにくい声を上げた。

ヒュッ。

軽い、そんな風を切る音を纏いながら、自らのウィンドウを開いて難しそうに話しこむ男たちの足元へ向かう。そして、狙いと寸分違わず、ずかずかと突き刺さった。

その音によって、約40人の思考を強制終了させる。

「……………え？」

皆、信じられない、とでも言いたげな顔をしてたり、状況の理解が追いついていないのかきょんとしている。それは間抜けと言っているもので、笑いが込み上げそうになった。

さっきまで、たった一人の少年を糾弾していたというのに。思う

まま、毒を吐き捨てていたというのに。そんな顔していたって今の私には何も響かない。

———さあ、ここからが本番だ。

どんなふうに「演じる」？

いっそのこと、とことん悪役を突き詰めてみようか。……しかし、それで狂人として通り過ぎては意味がない。強い負の感情とともに、私を彼らの記憶に焼き付けなければならないのだ。

ならば、冷酷に。

ありのままの事実を、突き付けてやろう。そして、あの黒い少年よりも残忍で、冷淡に、残酷に。恐怖すら覚えるように。

「ビーター」の存在すらもかすれて、霧がかかって、塗りつぶされてしまうように。

私こそが「悪」だと、植え付ける。「ビーター」以上の存在になるのだ。

矢の標的に選んだ男たち——、ディアベルのパーティーメンバーだった者たちへ近づく。軽く睨みを利かせただけなのに、彼らはたじろぎ、全体的に後ろへ下がった。

しかし、黒い少年を強く糾弾していた内の一人だった男が一步前へ出てきて、こちらを睨み据えてくる。怯んでなんかいけないと言わんばかりに、その男が負けじと目に角を立てて、唸るように低い声音を発した。まあそれも、若干迫力は欠けていて、私にはあまり効き目はなかったが。

「……な、なんだ、お前」

「私が、ボス戦中にあなたたちへ矢を放った張本人よ」
ピクリと、男の眉が上がった。

「……「弓術」を習得したことを、自慢したいのか」

「そんなわけがないでしょう。わざわざそんな面倒くさいことはし

ないわ」

さらに、ピクピクと上がっていく。もう少しで青筋が立ちそうだが、けれども、私はそれを知らぬふりをして続ける。

「私が言いたいのは、私が放った矢のせいでディアベルが体のバランスを崩した、ということよ」

「な……っ」

まったく考えがついていなかったようだ。それなのにも関わらず、ベータテスターたちを中傷したのだから笑えてくる。腹がよじれそうだ。馬鹿馬鹿しい。

「私は危険を知らせるつもりだったのだけれど、ちょっと手元が狂ってしまっただけね。私が余計なことをしなければ、彼は攻撃を回避出来ていたかもしれないわ。……いえ、彼なら出来ていたでしょうね」
つまりそれは、彼が死ぬことは無かったかもしれない、ということ。

ただし、もちろん手元が狂ったなんていうのは嘘だ。確かに、命中率云々の関係で狙いよりも少しばかりずれたが、それも許容出来る誤差の範囲内だった。

だが、それでも、それが分かっている、私は平然と嘘を吐く。
そして、彼を嘲笑うような笑みを作り、嫌味たらしく、なおかつ毒針を突き刺すように言い放った。

「つまり、———ディアベルを殺したのは私よ」

しいんと、急に静まり返る。こんなにも大勢人がいるというのに、面白いくらい物音一つしない。けれども、うめくような声がそれを破った。

「……お前のパーティーはどこだ」

拳を握りしめ、震えさせながら、押し殺すように問うてくる。

私はそれを鼻で笑ってやってから、

「仲間はいないわ」

蔑んでるのがハッキリと伝わる口調で言ってやった。

瞬間、首元を強い圧迫感が襲った。目を瞬かせると、胸倉が掴みあげられている状況を認識する。

「そんなわけがないだろう！ ……リーダーは誰だ！ そいつが指示したんだろうが！」

「だから、仲間なんていないと言っているでしょう？ ……まあ確かに、組んではいたけれどね」

「だったら！！」

「あなた、相当な阿呆なのね」

「……どういう……」

「簡単よ。――――脅していたの」

「……は？」

力がすっと抜けた。その隙に、男の大きな手を払いのける。

「自分の利益のためだけにパーティーメンバーを脅して、しかも騙していたのよ。……だから、本当の意味でのパーティーは組んでいないわ。彼らのことは責めるより、こんな私に踊らされたことを憐れんであげた方がいいじゃないかしら？」

うぐ、と声を詰まらせる男は素知らぬ顔で、服の乱れを整える。

そして今度は、私が男の襟元をぐっと掴み、顔を近づけた。クスクス、と笑い声を作る。

「私を殴りたい？」

「んな、お前……」

「私がいなければ、ディアベルは今ここにいたのよ。さぞ頼もしく、みんなを率いてボス部屋から出て行っていたでしょうね」

「……………」

重いものがぶつかるような、鈍い音。左頬に鋭い衝撃が走る。視界が揺れた。首から上が、体の構造上の限界まで曲がる。

素晴らしいくらい忠実なシステムが、サウンドエフェクトを生真面目に発したのだと理解した後、自分が床に座り込んでいるのも続けて認識した。

視線を上げれば、男が苦虫を噛み潰したような表情で私を見下ろしている。顔を思い切り歪め、舌打ちした。だがそれ以上何もするつもりはないのか、身を翻してしまう。

「……………」まだ、足りない。全然、足りない。

「……………」これだけ？」

「……………」あ？」

ゆっくりとまるで幽霊のように、重い動作で男が振り返る。けれども、今にも吹き出しそうなものを必死に抑え込んでいるのは見え見えだ。コップの水が溢れるまで、もうひと押し。私は再びクスリと笑ってやってから、

「もう満足なのかしら。ずいぶん、お安いのねえ」

「お……………」まえ……………」

「ふーん、そう。あのディアベルって人、ご立派な騎士さんみたいだったけれど、結局はその程度だったのね」

ブチリ。

もし今の男の感情を正確にトレースしたいのならば、そんな効果音が一番適しているだろう。もはや感情のセーブは利かないようで、顔をこれでもかと……………」タコでも負けたことへの恥ずかしさに壺へ引っ込んでしまうだろう……………」真っ赤にし、ズカズカと苛立ちを隠しめせずに歩いてくる。

「このアマ……………」舐めた口利きやがって！ 出来るなら、殺して――

――」

私は、その言葉を待っていた。

自然と浮き立つ気持ちを抑え、内面とは対象に表情の色を意図的に消した。そして、声の抑揚を無くして機械的に言い放つ。

「殺せば？」

「……は」

ポカんと、呆けたように口を開けた。しかも、目の前の男だけではなく、私の視界に入る限りだと、全員だ。……どうやら、内容がいまいち呑み込めていないらしい。私は、解らせるべく口を開く。「そのままの意味なのだけれど……。なんなら、デュエルでもする？もちろん、完全決着モードで」

それは、デュエルのモードの内の一つ。言わずもがな、これはどちらかのHPが0になるか、同様にどちらかがリザインするまで続く。

つまりこのモードは、この世界で最も選んではならないもの。理由は小学生でも解ることだ。にもかかわらずやろうとするヒトは、相当の阿呆か、感覚がおかしい者だろう。

すなわち、その「おかしい奴」というのが私ということだが。

「……狂ってる」

誰かがそうつぶやいた。それを皮切りに、だんだんとざわめきの波が大きくなっていく。

ひそひそ、ひそひそと周囲の者と話しながら、私を睨みつけてくる。奇怪なモノへ向ける、恐れが滲んだ目。その瞳には、明らかな嫌悪の色が宿っていた。

何だ、アイツは。どうしてこんな女が、俺たちと一緒に居たんだ。何で、どうして……………。

「お前……、自分が何をしたのか分かっているのか！」

「私は、ただ危険を知らせようとしたただけだもの。何も悪いことはしていないわ。上手く避けられずに死んだディアベルが悪いのよ」
「こ、……いつ……！」

男がとうとう我慢の限界を迎えたのか、憤怒を前面に出し、額に青筋を立てた。瞬間、腕が私へと伸び、ガシッと首を掴まれる。瞬きほどの時間で空中に吊り上げられた。両脚が完全に浮いて、足先がブラブラと揺れている。息が詰まって、さすがに顔をしかめた。
これが、仮初の世界で良かった。

「……っ」

「お前が、お前がいなければ……ッ！」

「また……、そう、やって、全体の責任を、押し、つけ……る、のね」

言葉が途切れ途切れになりつつも、今は下の位置にある男の両目をしっかりと見据える。私は特に抵抗などしていない。けれど、首へ掛けられていた圧力が僅かに緩んだ。

「意味が分からない！」

「……ふふ、愚か……で、可愛い、そう」

「……………く、そが！」

視界がグルンと回った。背中を強かに打ち付ける。一瞬、全ての感覚が遠ざかった。

「謝罪も、反省すらしないなんて……、何て奴なんだ！ 自分でやったこと、何とも思っていないのか！」

「……………」

バラバラと散らばった自身の黒髪が、視界いっぱいに見える。石畳の床を背景に、自身の白い手も映り込んでいた。

ああ私は、今、地面に転がされているのか。

認識出来たところで、腕に力が入りそうにない。体の半身が、ひ

どく冷たかった。このまま寝てしまおうか。……いや、それは出来ないな。ふと浮かんで泡のように消えた滑稽な思考に、くつりと笑う。

それが、さらに男の神経を逆撫でたらしい。

大きな影が落ちてきて、その正体を確かめべく目だけをそろりと動かす。すると、凹凸の激しい、硬そうな靴底が、眼前に迫っていた。

これは蹴られるな。痛いのだろうか、ああでも、そうだ、この世界には痛覚は無いのだ。だったら大丈夫か。

ぼんやりと考えながら、近づいてくるソレを眺める。薄く笑って、目を閉じた。

訪れるだろう衝撃を、流すために――――。

「もう、その辺でいいんじゃないか」

その声に、パッと目を見開いた。慌てて視線を持ち上げれば、そこにはこの数日で見慣れた褐色の肌。

「どう、して……」

エギル。その後ろには、ルークをはじめとした、己がついさっきまでパーティーを組んでいた面々が居た。一様に表情を強張らせ、痛ましそうに私を見詰めている。

「お前は……、確か、エギル」

「ああ、そうだ」

――――まずい。咄嗟に、そう思った。

エギルは事前の攻略会議で、ベータテスターを庇う発言をしていた。堂々と話した内容のせいもあるだろうが、彼のその容姿も相まって、この男はエギルの名前を記憶していたのだろう。

いや、それは良い。良くは無いが、まあ良い。今現在、それほどベータテスターへ恨みは向いていない。大部分は「ベーター」へと対象が移ったし、その分も今この場では私へと集中している。だから、問題はベータテスターたちをエギルが庇ったことではない。

あの時、私もエギルの隣に座っていたのだ。エギルと、ルークたちと言葉を交わしていたのだ。もし、それも、この男が覚えていたら。

嫌な汗が吹き出す。まずい、まずい。

彼らには、余計な傷を負わせたくなかったのに。汚名を着せたくなかったのに。

「や、やめ……」

「キカ」

耳元で、自身の名が呼ばれた。ずいぶん音量が抑えられていたが、もし周りに聞こえてしまったらどうするのだ。

私の身体を支える腕の持ち主を、じりと睨みつける。

「……………」

誰かの耳に私の声が届いてしまうのが恐ろしくて、「ルーク」と、心配そうに眉を顰める彼の名前を呼べない。それは彼も分かっているようで、ルークは一つ頷き返してくるだけだった。

「大丈夫か？」

とても優しい声音だった。思わず溢れ出そうになるものをグッと堪えて、私も首を小さく縦に振る。

そのまま、ルークの腕に促されるままに壁へ背を付けた。思い切り体重を預けてしまえば、ずいぶん楽になる。

「……………そんな女助けて、どういふつもりなんだ」

氷の槍のように鋭く冷たい声が、頭上から降ってきた。怒りを隠そうともしていないそれに、肩が大きく跳ね上がる。

いけない。これは駄目だ。

どうしよう。どうすれば良い。どうすれば、エギルたちを守れる？
グルグルと回るのは、そんなとりとめない言葉ばかり。情けない
ことに、全く妙案が思いつかない。その間にも、エギルの言葉は続
いてしまう。

「助けるとかじゃない。ただ、暴力を振るわれているのを黙って見
ているわけにはいかなかっただけだ」

どうして、私を切り捨ててくれないの。見て見ぬふりをしてほし
かったのに。何ならその男と一緒に、私に手を上げてくれても良か
ったのに……。

「コイツが、何を思って矢を放ったのかは知らない。それに、お前
らがあの指揮官とどれくらい親しかったのかも知らない。だが」

「ふん。ベータテスターの味方をするくらいだから相当な物好きだ
とは思っていたが、こんな奴まで守ろうとするなんて……」

「俺は、そんなことを言っているんじゃない!!」

ガツンと、鈍器で殴られたような感覚。よく通る太い声が、空間
をビリビリと震わせた。

怒っている。あの、温和なエギルが。

未確認動物を発見してしまったような心持ちで、まじまじと彼の
横顔を見詰める。私の隣で片膝を付けているルークの方を見遣れば、
口をポカンと開けていた。

「一つ、いいか」

「な、なんだ」

「アイツに対して、お前は「何とも思っていないのか」と言ってい
たが」

エギルが一步前へ踏み込む。それに合わせて、男が後ろへ下がっ
た。

「……………人を殴って、首を絞めて、地面に叩きつけて。しかも頭を蹴ろうとまでして……、————お前こそ、何とも思わないのか」
間抜けな表情になった男の顔が、意味を理解したのかじわじわと赤く染まっていく。あれは、憤りではない。羞恥だ。そして少しの焦りと後悔。

「俺からすれば、お前の方がタチ悪い」

男は黙り込み、肩を震わせ、拳を握りしめると、獣のようにギラギラと双眸を光らせて始めた。ただ一点、エギルをねめつけながら、その凶悪な気配に、サーッと血の気が引いていく。

「…………お前、もしかして、あの女の…………」

「……………」

「答えろ」

どくん、と心臓が跳ねる。

どうにか、しなければ。私が、エギルを、みんなを————。

「失礼ね。そんな人と比べてほしくないわ」

突然割り込んだ私の声に、一気に視線が集まった。40対以上の瞳が、こちらに降り注がれる。中でも、体格のいい色黒の男が、信じられないものを見るような目をして、私の方を向いた。

…………ごめんなさい、とそっと心の中で呟く。

「エギル、って言ったわね」

「…………あ、ああ」

「どうやら私のことを助けようとしてくれたみたいだけれど、勝手なこと言わないでくれるかしら」

「……………は？」

啞然としたような顔をするいくつものそれを見渡し、口角を吊り上げた。嘲るように、突き放すように、恐怖を覚えるように。

肩に置かれたルークの手をパシリと払い落として、壁に背を預けた状態のまま、再び口を開いた。

「私とその男がしたことを並べるな、って言っているの」

私は何のために、こんなことをわざわざ繰り返したと思っているのか。お願いながら、邪魔をしないでほしい。最後までやり遂げさせてほしい。

手を差し伸べてくれた、あなたたちには申し訳ないけれど。

「私は後悔なんてしていないし、間違ったことをしたとも思っていないわ。もちろん、恥ずかしいとも思っていない。……その腑抜けと違ってね」

「な……っ！」

「あら、違うの？ ちょっと言われただけで、顔を赤くしていたくせに」

くすくす、くすくす。

ああ、おかしい。

「あなた、そのエギルって人に言われて、自分が暴力を振るったことを一瞬でも後悔したのでしょうか」

もはや何も言えないらしい。酸素を求める魚のようにパクパクとさせて、かなり傑作だった。

「……………ねえ、エギルさん？」

顔を俯けさせた青年から視線を外し、ごつい男の方へ顔ごと向ける。ゴクンと生唾を飲み込む彼は無視し、すーっと目を細め、絶対的な冷たさを纏わせながら放つ。鋭利な、刃物を。

「私が言いたいこと、分かったかしら」

言葉で、彼を射る。

とても長いとは言えないけれど、エギル率いるメンバーと過ごした時間が頭を過った。だが、だからこそ、エギルを傷つけなければ

いけないのだ。

「私ね、今、すごくあなたにイラついているの」

驚愕の色に染め上げられた厳つい顔が、茫然と私を見詰めていた。

「やめろ」と、その口が微かに形作られる。

「その人はただ阿呆なだけだから、内心笑っていられたわ。＼こんなことにムキになって馬鹿だな」、ってね。けれど」

ああ、力の入らない手足が悔しい。本当なら、もっと手酷くエギルを罵って、＼この女の仲間では無い＼と強く植え付けなければいけないのに。

「……けれど、自分がやったことを後悔するような奴と比べられるなんて、これ以上ない侮辱よ。ふざけないで」

———どうか、お元気で。

そっと瞑目し、心の中で祈る。

「目障りだわ。早く私の前から消えてちょうだい」

ボス部屋の空気が一気に硬直した。痛いくらいに静まり返る。誰一人として、動こうとしなかった。

だが、やがて、成り行きを見ていた男が人垣から歩み出てくる。ディアベルの隊だった人物だ。私は咄嗟に身構えるが、チラリと一瞥されただけで、特に何も言われることはなく、

「おい、リンド。もうよせ」

「シヴァタ……」

リンドと呼ばれたその男が、新たに前へ来た長身な男に肩を叩かれる。気まずそうにチラチラと視線を漂わせるリンドを、シヴァタが背中を強く押して促した。しかしリンドはまだ納得出来ていないらしく、私を不快げに睥睨してきている。

シヴァタという男がさらに出てきたことによって、場の時間が再び動き出したらしい。ざわざわと、ボス部屋に音が戻って来る。

ただしそれは、私への悪意だったが。

「なんだよ、あいつ。庇ってもらっておいて、逆に責めるとか……」

「考えられねえよ」

「こんなの酷過ぎる」

「おい、そんなやつ放っておこう！」

「……そ、そうだ！ 早く行こうぜ！」

「もう近づかないほうが良いだろ、俺たちとは違い過ぎる」

「頭おかしいだろ」

「正直、ビーターなんかよりも、コイツの方が——」

あまりに慣れ過ぎたそれらは、「私」や、私には届かない。

いくらでも言えば良いのだ。どうせ、効きはしないのだから。削られるものは何も無いのだから。

シヴァタが苦虫を噛み潰したような表情で座り込む私を一瞥し、リンドの腕を強引に引っ張った。だが当の本人は、彼の手を振り払い、私を蔑む目つきで見下ろし言った。

「……化け物め」

これまた、ありふれた暴言をありがとう。お礼に綺麗な笑顔に向けてやる。

「あら、今更気が付いたの？ 私は、ヒトの皮を被った化け物よ」

「……っ」

「それにあなたたちの中傷の言葉なんて、私にとって街中の喧騒と等しいわ」

リンドはさっと顔を歪め、唇をギリギリと音がしそうなほど噛み締めた。

だが、これ以上言い争うつもりは無いようで、バツと背中を向けると、乱暴な足取りで先刻入ってきたのと同じ扉へ向かっていく。その背中を、まるで親鳥について行くアヒルの子のように、リンド

の仲間や他のパーティーの者まで、こちらをちらちらを見ながら釣られるように追っていった。それを確認にして、「私」はふう、と息をつき、視線を落とした。多くの足音が、どんどん遠くなっている。

しかし耳朵を打ったその足音に、自分の耳を疑った。

数にして、おそらく5人分。それが、近づいてくるのだ。けれども、誰かは予想できてしまったので、顔を上げずに棘のある声を作って言った。

「……聞いていなかったの。あなた達は、「脅されて」いたのよ」
「だ、だが……」

私に落ちる影が増えていく。それを認識して、————否、認めて、ぐっと手を握りこんだ。

駄目だ。これ以上は、駄目。

私と彼らとの接点を、リンドが覚えていなかったから良かったのだ。かなり無茶苦茶な言い分ではあったが、何とかエギルが巻き添えを食らうことを防ぐことが出来た。だが、直接こうして話しているのを見られたら、もう言い訳のしようが無い。

「……行って」

「————き……」

「行きなさい！」

ビッと出口を指差す。息を詰まらせる気配があった。しかしそれきり、彼らは動こうとしない。

「………お願いよ、早く行ってちょうだい。何のためにパーティーを解除したと思っているの」

何のために、わざわざあなたたちを傷つけたと思っているの。

私は、あなたたちに感謝をしているのだ。こんな私を見切らずに傍に置いてくれた。それだけで、十分だった。

そんな彼らまで私の下らない茶番に巻き込むことは、自分自身が許さない。

やがて、大きく息を吸い込む音がした。ハッキリとした、重みのある声から落ちてくる。

「……解った」

それはズシンと響き、私の中でこだまして、掻き消えた。ゆっくりと、一步一步踏みしめるように、足音が遠ざかっていく。

それをぼんやりと感じながら、　「私」はひっそりと、誰にも視えないように、笑みを「零した」。

これで良い。良いのだ。

悲しみも、悔しさも、恐怖も、苦しさも、何も無い。大丈夫。だいじょうぶ。

私は、正常に、動けている。

身体がまだ上手く動かせないのは、少し疲れてしまったから。思考がぼんやりしているのは、さっきまでボス戦をしていたから。戦闘が終わった安心感と達成感に、脱力してしまっただけなのだ。

『大丈夫、キカちゃん？』

「……う……っ」

ああ、とうとう幻聴まで。これは意外と疲れが溜っているのか。早く帰ろう。さっさとあの村まで行こう。

思い出の残るあの村まで、帰るのだ。

『やっと、僕の目を見て笑ってくれたね』

どうして、身体が動かないのか。足先も、指先も、何故ピクリとも出来ないのか。

早く立て。歩け。時間は有限なのだ。無駄には出来ない。

「はや……く」

足に、腕に、力が入らない。

「――俺たちとは違い過ぎる。」

痛む胸のコレは何だ。厭われることは慣れているのに。

「――ごめんね。約束、守れそうにないや。」

せり上がってくるコレは何だ。私は、こんなもの知らない。知りたくない。だから分らない。分からなくて良い。

「やだ……もう、なんで」

私の中で何かが暴れまわる。肉を内側から引っ掻きまわされる。痛い。

理由なんて、原因なんて、何も無いはずなのに。

いたい。きもちわるい。……いたい。

服の裾を鷲掴む。ぐしゃりと皺が寄っているのが分かるが、気にすることなんて出来ない。

ただ、痛みを紛らわせたい。胸の中の暴風雨を止ませたい。その一心で、未だぎこちない動きをする手へ無理やり力を入れる。

これ以外に、やり方なんて知らなかった。唇を噛み締める。

私は、荒れ狂うものを収める糸口をつかめないまま、ただやり過ぎすために、「私」から目を逸らした。

「――あなた」

澄んだ、鈴のような声が飛び込んで来た。全く予想していなかったそれに驚きながら顔を上げ、そちらに視線を向ける。

栗色の髪が、さらさら、きらきらと揺れていた。光を弾いて、瞬いていた。

息を呑みながら、突然現れたその少女をまじまじと見つめる。

もう、この場に居た人たちは全員出て行ったと思っていたのに。

すばやく目を動かし時刻を確認すれば、あの集団がいなくなっからそれほど経過していなかった。体感時間的には、ずいぶん経って

いたのに。

予定外だ、これは。まさか、まだ人が居たなんて。

「……………あら？ フェンサーさん、まだ残っていたのね。黒い人と一緒に、2層へ行ったと思っていたのに」

彼女の首が、ゆるゆると横に振られる。

「いいえ、私は行かなかったの。…………でも、どうしてあなたは一人で……………」

流れていく視線が、私の隣に転がる弓を見て止まった。端正な顔が、ひそめられる。私はそれを認め、軽く笑みを作ってから、

「別に嘘を言ったわけではないのだけれど、彼らにちょっと教えてあげたのよ」

「教えるって……、あなた、何を」

ああ、なんて滑稽なのだろう。笑えてくる。

「ディアベルを殺したのは私です」、って」

さらりと、しかしいたずらっぽいや色を混ぜて言った。けれども、ますます哀しそうに歪められてしまった。どうしたのだろう。

それからしばらく、何かに迷うように彼女の目線が動いた後、小さな、つぶやきのような声が聞こえた。

「……………どうして」

「責める対象を間違えていたからよ。私は、ただ修正しただけ」

淡々と、事実を口にする。

そう、彼らは嫌悪を向ける対象を完全に誤っていた。ディアベルが死んだ責任をベータテストに押し付け、愚かにもたった一人の少年を責め立て悪者にし、満足しようとしていた。その姿があまりにも馬鹿らしかった。無様だったのだ。

だって、ゲームを全く嗜まない私が、ボスの武器の異変に気付けたのだ。もし剣に関する知識を持っていれば、ベータテストでなくとも気付ける可能性は十分にあった。つまりこれは、ディアベルの死は、全体で背負うべきもののはずだったのだ。全員が、抱えるべき「死」だったはずなのだ。

それなのに彼らは、認めたくない、目を逸らしたい、責任を負いたくない———そういったものに駆られ、矛先を、ベータテストを経験した者たちへ向けたのだ。何故なら、「簡単」だから。言い逃れのしにくい人たちへ———手頃な対象へ押しつけて、自分たちは逃げようとしたのだ。特にあの少年の場合、記憶力が良く、ボスのスキルを読むことが出来てしまったから、拍車を掛けることになってしまった。

結果、あの少年が全てを引き受けることになったのだ。

向こうの世界では、良くも悪くも、頭の回転が速かった彼のことだ。このままいけば元ベータテストが危険に晒されると、勘付いてしまったのだろう。

……まあ私は、彼が「ベーター」と呼ばれようがどうでも良いのだけれど。

もし私が矢を放っていないければディアベルは生きていたかもしれない。これは別に彼らを挑発するために発した言葉ではなく、私が実際に思っていることだった。

C隊は、自分たちの横をスレスレで通り過ぎた矢に驚いて後ろへ跳び、後退した。しかし急な動きだったためバランスを崩し、結果ディアベルは死亡した。これは事実だ。何も間違っていない。

そりゃあ、私が手を出さなくても、彼が死ぬ未来は変わらなかったかもしれない。しかし、寸でのところで気付いて後退していた可能性だってあるのだ。だが、こんな「もしも」をいくら考えたところ

ろで何も変わらない。大切なのは「事実」だけ。未来を予測して行動するのは重要だが、終わったことをあれこれ考えていても時間を無駄にするだけだ。

今回必要なものは、「私が矢を放ち、ディアベルが死んだ」、という至極簡単な現実のみ。

彼の死の責任は全員で負うべきなのかもしれないが、原因を作ったのは明らかに私だ。

ディアベルの死を目の当たりにしたメンバーが、誰かに責任を押し付けて楽になりたいのなら仕方がない。どうせ真正直に「これはみんなの責任だ」などと説いたところで、頭に血が上った人間たちに受け入れてもらえるわけがないのだ。

ならば残された方法は一つ。それが向かう対象を、より正しい者へ向けさせるのだ。

だから私は、訂正した。この状況へ追い込んだのは《ビーター》ではないのだと。正しいことを、教えてやったのだ。

「私が彼を殺したのよ。私の、せいなの」

——あの人のせいじゃない。

限界まで目を見開く少女から逃げたくて、視線を外した。口元に笑みを刻む込む。

△ i 5 5 2 6 | 1 4 6 9 2 ∇

彼女がこちらにゆっくりと近づいてきた。

怒るのだろうか。それとも、罵るのだろうか。けれど、どんなこ

とても甘受しよう、と思って顔を俯けると——、予想外のことが起きた。

「……大丈夫。一緒に街まで帰りましょう？」

頭の上に、あたたかい手が乗せられた。優しく、慈しむように、ゆっくりと私を撫でる。じんわりと、かわいた何かに染み込めなかった。

そして、彼女もしゃがみ込んで私と視線を合わせる。茶色の瞳の中に、私の姿が映った。

「私はアスナ」

ずっと、躊躇いなど感じさせない手が差し伸べられてきた。

真っ直ぐで、よどみのない光。

どうしてこの世界には、こんな人が多いのだろう。

あんなに動かなかった腕を持ち上げ、「私」は、吸い寄せられるようにその手を握った。

小さくつぶやく。

「……キカ、です」

* * *

迷宮区を出て、フィールドをアスナと連れ立って歩く。やはり暗くて閉鎖的な所よりも、風が吹き抜ける外の方が気持ちがいい。

そんなことを思いつつ、途中モンスターと遭遇しながらも、彼女と話しながら歩いていた。そして、話題は先ほどのこと——と

言ってもほぼ愚痴りだが―――に移り―――、

「……って、キカ、その男がデュエル申請を受諾していたらどうしていたのよ！」

「……どうって……、開始後すぐに、リザインしていたわよ」

当然でしょう、と付け足すと、アスナはポカンと口を開け、呆れたのか深いため息をついた。

「それ、すごく怒るんじゃ……」

「最初から、"怒りを買うこと"が最終目的よ。別に戦うことではないわ。……むしろ、それで頭に血が上ってくれた方が、達成されたと言えるもの」

彼女の綺麗な眉が寄せられる。

「あなたねえ……」

また一つため息をつき、そして何か言おうと口を開きかける。

私はそれをすばやく手を動かし、遮った。

これ以上続けると、彼女のお説教が始まりそうだった。それはさすがに面倒だったので、聞こうと思っていた話題へ無理やり方向転換する。

「……そ、そういえば、あの黒い男の子の名前、なんて言うのかしら？」

「え？」

虚を突かれたのか、アスナが目を丸くする。しかし、すぐに訝しむような表情になった。私はそれを見て、慌てて真顔で手を振りながら、

「別に何かしようってわけじゃないわよ。あの男の子、ずいぶん肝が据わっていると思ったから……」

「それ、キカが言えるようなことじゃないでしょ」

もう、と言いながら、軽くこちらを睨んでくる。やっぱり無理が

あったか。

だが、出来れば　「彼」のこちらの世界での名前を知っていた方が都合がいい。彼とパーティを組んでいたアスナなら、十中八九、……というか必然的に知っていると思うのだが。

しかし、ゴリ押しはしたくない。どうしようか、と思いながら、間を埋めるために頬を掻き、次の手を考えていると、

「キリト」

それを、見事に遮断された。まさにクリーンヒット。思考が止まる。

「え？」

口からそう音が漏れ、思わず隣を見ると、空を遠い目で見上げているアスナの姿があった。そっと、彼女を盗み見ると、どこかやるせなさが漂っていて、しかし再び引き結ばれていた唇が開いた。

「だから、「キリト」よ。あの人の名前」

「……そう。教えてくれてありがとう、アスナ」

目を伏せ、彼女から目の前の風景へ顔を向ける。

——キリト、ね。

音には出さないように、その名前を刻み付けるように心の中でつぶやいた。

なんて単純なんだろう。本名の最初と最後を取って3文字。

まあ私も同じように単純と言えば単純だ。ただそれが、自分の名前ではないだけで。

「……私も、同じようなものね……」

ぽつりと、水滴が一滴落ちるように小さくこちる。

「……ん、何か言った？」

なんと、落ちたしずくが掬い上げられてしまった。けれども、指の隙間から零れさせる。

「いいえ？ 何も言っていないわよ」

不思議そうにアスナが首を傾けるので、「幽霊じゃないですか」と冗談めかして言ってみた。すると、予想以上に彼女の顔が引きつり、

「……や、やっぱり気のせいかも！」

上ずった声を上げ、途端に必要な以上に手の振りが大きくなり、歩き方もどこか硬い。

……あ、こういう話題弱いんだ。

意外過ぎる一面で、なんだか得をしたような気分になる。私は含み笑いを作りながら、助け船を出すように正面を指差した。

「ほら、もうすぐ主街区に着くみたいよ」

「そ、そうね。早く休みたいわ」

まだ若干口調が不自然だが、平静を装いたいのか腰に手をあて、ふう、とアスナが息をついた。そんな彼女を横目で見て、苦笑いを作ってから、息を浅く吸った。「じゃあここで」、と、そう別れの言葉を音にするため口を開く。

「……あれ、どうしたのかしら。ちょっと様子が変わよ」

だが、アスナの一言によって閉口することになった。彼女が見ている方向を釣られるように見遣る。

そこには、何人かのプレイヤーが頭を捻りながら何事か話し込んでいる。その雰囲気は、どこからどう見ても異様だ。

すると、その数人の内、一人の男がこちらに気付いた。必然的にバチリと視線が絡まってしまう。そのことで、本能的に足が動き、後ろに半歩下がった。アスナと動きが完全に被る。しかし、次の瞬間。

びゅん！

そんな音がしそうな勢いで詰め寄せられ、すぐに意味はなくなって

しまう。

……ああ、この人敏捷型かな。なんて、あまりに呑気に、場違いなことが脳裏をかすめる。だが、すぐにそんなことを考えている場合ではないと、思考回路を修正して、だがしかし、

「な、なあ、君たち、さっきのボス戦攻略戦のメンバーか!？」

「……え、はい」

質問の意図が全くもって分からないが、過剰なほどの勢いに圧きれるようにして、思わず肯定してしまった。心の中で舌打ちする。隣を見れば、アスナが顔を先ほど「幽霊」という単語を聞いた時以上に、しかも不快そうに顔を顰めている。私も同じような表情になっていると思うけれど。

だが、すぐに軌道修正し、私はにこやかな笑顔を作る。そして、なるべくこれ以上は面倒事を起こしたくないので、波風立てないように和やかに聞いた。

「それが、いかがなさいました？」

「あ、ああ……、実は、さっき他の攻略メンバーが帰ってきたんで、アクティベートしたのは誰だって聞いたんだ。そうしたら、かなり不機嫌そうに「そんな奴いない」って言われちゃって」

……どうということ？

その内容に呆気にとられ、思考が停止する。しかし、そう首を傾げたのはほんの少しの間だけで、すぐに状況を理解した。

おおかた、 $\wedge$ ビーター $\vee$ と蔑むプレイヤーが、イラつきながらつい言ってしまったのだろう。

本当に、ごく一部の人間だけだろうが、大馬鹿だと思う。まだ言っているのかと、ほとほと呆れてしまった。

自然と手に力が入っていくのを感じながらも、表面は笑顔を保ち、クスリと笑みを作ってから、男に言った。

「ええ、そうですよ」

未だに目を丸くしているアスナの腕を引き、その場を逃げるように去った。

そのまま主街区のゲートを潜り、人の波からある程度離れた所でアスナに向き直り、先ほど言えなかった別れの言葉を口にする。アスナは残念そうに眉を顰めたかと思うと、

「ねえ、キカ。私とフレンド登録しない？」

「……え、ええ、良いけれど」

「決まりね。申請送るから、許可してよ」

言うが早いか、アスナとフレンド登録をするか否かを問うメッセージタブが現れて、思わず苦笑してしまう。「承認」をタップして、しっかりと彼女の目を見据えた。

「よろしく、アスナ」

「うん。こちらこそ、これからよろしくね。キカ」

くすくす、くすくす。

和やかに笑い合って、握手を交わした。

「じゃあ、またね」

「ええ」

アスナが身を翻す。彼女の背中がどんどん遠くなっていくのを目で追うが、人混みに吞まれ視認出来なくなったところで視線を外した。小さく息をつく。

闇が増してきた空を見上げてみるが、今日の天気は曇りと設定されたようで、濁っていて星は望めそうにない。

「……さて、どうしましょうか」

“彼”——、キリトから、どうやって身を隠すか。

それは、キリトの姿を見つけてから考えていることなのだが、これがなかなか良案が思いつかない。

極論、どこかに必要最低限以外は引きこもってしまえばいい。幸い、私は食事を取らなくても平気だし、泊まれるような場所をなんとか確保さえ出来るよう、度々フィールドへ出れば、それだけでおそらく半永久的に身を隠せるだろう。しかし、それをやればこの世界に來た意味が無くなるし、私のポリシーにも反する。よって、考える間もなくコンマ5秒で却下だった。

それ以外ならば、一番手っ取り早いのは、容姿を変える――、たとえば髪型を変えることだろう。案外、思い込みでなんとかったりするものである。

だが、それだけで済むのならば、今日一日中あんなに神経をすり減らしながら、キリトの事を気にはしていない。

あの人のことだ。やけに聡い所もあるのだから、中途半端には出来ない。本気でやらなければ、足元をすくわれる。

故に、もし髪型を変えるのであれば、色をピンクやらオレンジやら、私のイメージに絶対に合わないものを選んで変えなければならぬだろう。だがそのためのアイテムは、おいそれと手に入るものではないだろう。今こうしている間にもばったり会う可能性が十分にあるのだ。

私の存在――、たとえばそれがまだ「紅葉」であるとは認識されていなくても、「黒髪の少女」がいると、おそらく知られてしまっている。あまり考えたくはないが、最悪の場合、私の位置取りが失敗して、あるいは人伝いに、「弓使いである」、という情報もキリトに渡ってしまったかもしれない。

だからこそ、悠長には構えてはいられないのだ。ことは急を要する。即刻対応するべきことなのだ。

……………ほんの、十数秒でいい。

それだけ誤魔化せば、他人のふりをしてすれ違ふことが出来る。

あとは、私の腕次第だというのに。この壁が、高いのもまた事実。
「性格」さえ決まってしまうえば、そこからは私の得意分野なのだけれど……」

するりと、そんなことがこぼれた。そんなことを言っても現状は変わらないのに、と自分で突っ込む。しかし、すぐに、別の事から自嘲的な笑みを作った。

「……得意分野、か……」

昔は、純粹だった。ただ真っ直ぐに、「それ」を楽しんでいた。けれど、今は唯一、別の意味で手放せないものとなっている。

——ふと、幼い日の事を思い出した。

あれは、家族全員で出かけた日の事だ。とても印象的だったので、全く色あせることなく、鮮やかに記憶に残っている。

その日、私たちは女性のみで構成されている歌劇団の公演を見に行った。とても優美で、凛々しくて。そして、繊細さや力強さも兼ね備えている。私はすぐにその独特な世界に引き込まれていて、その空間が始終輝いて見えていた。

そして、和人——キリトに出したクイズ。あのことも、はつきりと覚えている。といっても、彼は答えが解ることはないだろうし、私が正解を教えることもないだろう。

「……何、思い出しているのかしら」
今更。

そう、今更だった。

息を深く吸い、落ち着くためになるべく長く吐き出す。空から視線をはずし、流れるように足元へ視線を落とした。

瞬間、発作的にあることが浮かんた。

「……あ、ああ……!!」

口から、自然と音が漏れる。どうして、こんな簡単なことに気が

付かなかったのだろう。

昔家族で観たその歌劇団では、女性が男性役もやっているのだ。

———そう、男性役。

人間の思い込みは、なかなか拭うことが出来ない。外見だけでも男として振る舞っていれば、面と向かわない限り、キリトは私を紅葉だと気付かないはずだ。もしかしたら、女であることすら認識出来ないかもしれない。つまり、第一印象を勝ち取ってしまえばこちらのものだ。

私ならば、システムの助けなど無くとも、性別をひっくり返すことなど可能だ。余程取り返しのない失敗をしない限り、誤魔化し切れるという自信がある。

それは、私の得意分野なのだから。

方針を決めた私は、さっそく動き始めた。とりあえず今は何でも良い。別に服装に拘るつもりなんてないのだ。NPCの服屋に入り、適当に購入する。

店からほど近い宿に滑り込んで、用意された部屋に足早に向かう。おそらくキリトは今第二層にいるだろうが、それでも早く終わらせたかった。

部屋を閉め、念のため誰も入って来られないように設定する。

簡素なベッド一式と、机に椅子。最低限のものしか置かれていない、薄暗い部屋は、実際の面積よりも余計に狭く感じさせる。けれど十分だ。休息を取るだけの場所なのだから、そんなご立派な設備は必要ないだろう。

ウィンドウを開き、まず上着やらインナーやら、上に着ていた装備を外した。その分の重みは無くなり、冷たい空気が晒された上半身に刺さる。自分一人しかこの部屋にいないと解っていても、何と

なく居心地の悪さを感じてしまう。さっさと済ませてしまおう。

そのまま手元を動かし、ここに来る前に購入したアイテムをオブジェクト化する。

手元を見れば、なんて素晴らしいことでしょう、向こうではありえないだろう早さで、普通のものとは比べるとかなり幅の広い―――おそらく目算で幅30センチ程度―――の包帯が現れた。長さは、とぐろ状に巻かれているのでこれも目算だが、おそらく200センチ程度のもの。

それを、胸部へ巻いていく。静かな室内に、シウルシウルという音がやけに響いた。

そして、そこがなだらかな曲線を描いた所でちょうど布の端になったので、ぐっと内側に押し込んだ。

「……ふう」

第一段階終了。

巻けるかどうか多少不安があったが、「包帯」はもともと「巻く」と設定されているアイテムのようで、部位に指定は無いらしく、何ら問題などなかった。杞憂に終わって良かったと思う。

次、第二段階。

ウィンドウをさらに操作し、先ほど着ていたTシャツやキャミソールのアイコンを装備フィギュアへ移動させる。そして、包帯と一緒に購入した新しい服も、続いて操作し装備した。

一瞬の光が包んだ後、すぐに着替えが完了した。この辺りはどうしても現実味が欠けてしまうが、これはこれで便利なので良いだろう。

部屋に備え付けられている、大きめの鏡を見遣る。自分の胸の高さほどもであり、上手く距離を取れば頭の天辺まで写すことが出来た。

ブカブカで、カーキ色のフード付きパーカー。そして、丈が余りまくり、同じくブカブカとしている黒いズボン。どちらも男物だ。

ネージュが身に付けていた服装を彷彿させるそれらに、己が選んだものながら苦笑いを浮かべる。けれど仕方ないだろう。一言で男装と言ったって、どういう格好をすれば良いのか分からなかった。そんな中で彼を思い出せる色を見てしまったから、思わず選び取ってしまったのだ。

いやしかし、全体的にボツタリとしている。とりあえず動けるし、ダボダボとしている方が体形を違和感なく隠せるだろうから、問題は無いだろうけれど。

先ほどのアスナとの会話で「キカはもう少し服に気を使ってみたら？」なんて言われていたから、何となく彼女に申し訳なくなる。彼女の助言とは正反対の方向へ突き進んでしまった。今の私の姿を見れば、アスナはどんな顔をするだろう。心の中で詫びた。

まさに馬の尻尾と言えるポニーテールを、服の内側へ入れ込む。こうしなければ、実際は髪が腰の下まで伸びているので、少々つらい。髪をショートヘアにしてしまうという手もあるのだが、この髪型は本当に、何となく落ち着いてしまうし、長い髪の毛の方が私にとっては便利なので、このままにすることにした。それに、フードは割とピツタリとしているので、被ってしまうと少し長めの前髪くらいしかのぞかない。これだけなら、十分短髪に見えるだろう。

「—————終了だ」

さらに、この世界では、女性にしては低い声になった。……まあ、それでも、混声四部合唱のアルトに分類されるものだろうが、この容姿で行けば変声期前の少年の声に聞こえるだろう。

さて、どんな人物にするか。

野蛮？ 温和？ ……それとも寡黙？

あまりに突飛すぎると、どこかにほつれが出てくるだろうから、そこは考えなければならぬ。あくまで、「私」の性質と寄り添うように。……あの日と同じことをすればいいだけのことだ。

だが、今はとりあえず、この件については保留にしておいていいだろう。

ここは、孤独な舞台だ。

客なんてもちろんいないし、私の他には出演者もない。完全な一人。

内臓まで凍りつきそうなほど冷たくて、皮膚が捲れるほど熱くて、……だからこそ優しい、そんな空間。

独りぼっちの世界はいつだってそんな風で、流れて、温かくて、寒くて、熱くて、痛くて、冷たい。だから何物にも干渉されない。

なぜなら、「私」の存在はないし、私自身でさえそれから目を隠してしまっているのだから。お互いに知らぬふりを続ける。偽られているのは、ホンモノなどないことは、解りきっているから。

そんな場所に、他のヒトは入ってこない。入れさせない。

ホールの中は荒れ果てていて、4年分のホコリが溜まっている。

これは片付けられることはない。ありえない。

それを解っていても、解っているからこそ、目を逸らす。「私たち」はそれぞれのニセモノを隠し、底い合い、知らぬ存ぜぬを突き通す。そうしなければ、何もかもが壊れて、崩れて、終いにはまた幻想を打ち砕かれて、初めからになってしまいうから。歪に捻じ曲がったそれが無くなれば、瞬く間に崩れ去ってしまうだろうから。

しかし、それでも、……いやだからこそ、「私」は嘆く。

——ああ、今日もガラクタばかり。

網目状に割れた鏡の中で、「私」が見つめている。

これは、明日も、明後日も、きっといつになっても変わらない。

月日が増すのと比例して、根を深く張り、もうすでに私から引きはがすことは出来ないのだ。

。

「——さて、大変長らくお待たせいたしました。役者の入れ替わりが済みましたので、これより……。」

開幕を知らせるブザーが、音もなく私の中で、黒い世界で、暗い室内で鳴り響いた。

そして、私は笑みを作る。

また明日も、明後日も、いつまでも、この表情を浮かべ続けるのだ。

番外編1 彼女の笑顔

もったいない。

ネージュは彼女と話した時、真っ先にそう思った。

それは今も変わらず、伏し目がちに話す彼女を横目でチラチラと見ながら、内心で「もったいない」と呟く。

夕日に紅く染まる肌。風でふわりふわりと靡く美しい髪。ほっそりとした顔の輪郭。すっと通った鼻筋。形の良い唇。

女性をジロジロ見るなんてかなり失礼だけれど、しかしそうせずにはいられないほど、彼女は美しかった。

———そう、美しい。

可愛い、とは少し違う。

幼さが色濃く残る顔に、不釣り合いなほど大人びた表情。オブラートに包みながらもハッキリとした言葉。一歩どころか何十歩も後ろに引いた態度を取りつつも、冷淡になりきれない彼女の優しさ。それらが、彼女のことを「可愛い」と形容させない。

外見の幼さと、凜とした表情。毅然とした態度と、今にも溶けて消えてしまいそうな儚さ。あまりにアンバランスで、不安定で、脆い。まるで氷彫刻のようだ。少しの衝撃で欠けてしまう芸術品。短命で、すぐ消えてしまう。幻のように無くなってしまふのに、記憶に残る美しいもの。

それが、ネージュの瞳に映る「キカ」という少女の姿だった。

「ちよっと、ネージュ。何急に黙ったのよ」

「あ、ごめん。ちよっと考え事」

「あなたって本当、いつもぼうつとしているわよね」

「あはは……」

キカのことを考えていた、なんて言ったらどんな表情をするのだろう。少し意地悪を試してみたくなった。しかしこれで嫌われてしまったら、多分、落ち込むどころの話じゃない。

彼女と出会ったのは一週間くらい前。道に迷い、どうしようかと思案していたところで、彼女——キカの後ろ姿を見つけた。

見つけた時、思わず、息を呑んだ。それほどの衝撃だった。鈍器で思い切り殴られたような、そんな激しい衝撃。

煌々と光る草原にポツンと座り込むキカは、有名な芸術家が描いた一枚の絵のようだったのだ。

しかし、非現実的な雰囲気の内包していた少女の影からは、今にもあの外周の向こうへ飛び込んで行ってしまいそうな、危うさを感じた。けれどそれに引き寄せられるように、吸い寄せられるように、ふらりと足は前へ傾いたのだった。

そして、真後ろに來た瞬間、バツと振り返った彼女の瞳に、"美しい"を体現したかのような少女に、ネージュは文字通り射抜かれてしまった。

濡羽色の髪。カモシカのような足に、白魚のような手。意志の強さを滲ませる柳眉に——、彼女の全てに目を奪われた。

そう、それを一言で簡潔に表すのならば、"一目惚れ"というやつだろう。

それほどあっさりと、地面で口を開けた落とし穴に気付かずはまるように、ピッタリと合わさるのが当たり前のパズルのピースのよう、に、ストンと心の奥まで落ちてきた。

ああ、僕は、彼女のことをもっと知りたい——、と。

それからのネージュは、笑えるくらい必死だった。何とかしてキカとの関係を繋ぐことが出来ないか、彼女の心の中に少しでも良い

から居座れないか……。

結果としてキカとの距離を縮めることには成功したと……と思うのだけれど、いかんせん上手くいかない。

笑わないのだ。

確かに、彼女は大口を開けて笑い声を上げるようなイメージは無い。しかし、それにしただって、笑わないのだ。浮かべるのは、良い所をだけを切り取った「美しい」笑顔だけ。ネージュは、もっと、色々な表情を見せてほしいのに。

警戒されているのか、緊張しているのか、本当は嫌われているのか、嫌々付き合ってくれているのか、それは分からない。判断する材料を彼女は与えてくれない。

だけど、そうやって悩めば悩むほど、ますますキカという少女に惹かれている己がいるのも事実だった。決して底を見せないキカを、楽しませようとあれこれ考える時間は、ひどく心が躍る。

呆れられたくない。疎ましく思われたくない。だが、何もしなければ、前へは進めない。それどころか、キカのような人だったら、どんどん距離が空いてしまうだろう。そんな、確信めいた予感があった。

幸い、まだ嫌われてはいない……と、思う。特に約束を交わしたわけではないのに、あの出会った草原にキカは現れるのだから。

でも、そうは言っちゃって不安なものは不安だ。

キカは優しい。見知らぬ人間をわざわざ主街区まで送ってくれるくらいには。まあ本人にそれを言えば、多分もの凄い勢いで否定されるだろうけれど。

「ねえ、ネージュ？」

「……ん、何？」

「あなた、大丈夫？ 疲れているなら……」

ああ、やっぱり君は、すごく優しいじゃないか。何でその言葉を拒んでしまうのだろう。

いくら頑張ったって、冷たくなりきれないというのに。

「キカちゃん、一つ聞いていい？」

対して、自分はなんて酷いのだろう。醜いだろう。

「え？ ……ええ」

「…………キカちゃんはさ」

こんなこと聞いたって、キカを困らせるだけなのに。

「毎日ここに来て僕と一緒にいてくれるけれど、…………どうして？」

「どうして、って…………、それは」

ほら、やっぱり。

案の定、彼女は不可解気に黙り込み、目を細めて僕の方を見た。

強い眼差しに、ネージュはさっと視線を逸らす。聞くべきではなかった。

ここへ来ることに、それほど深い意味は無かったのかもしれない。冷静になって考えてみれば、あの日と同じ時間帯にこの草原に座っていたではないか。

もしかしてこれはキカの生活に組み込まれた習慣の一つで、ネージュはそこへ無理やり入り込んでしまったのではないか。彼女はネージュのことを、本当は迷惑に感じているのではないか。そうでなくとも、景色の一部とも思っていたのかもしれない。

ネージュは一気に恥ずかしくなった。あまりに見当違いな方向へ突き進んでいたことに。自分だけ楽しい気分に浸っていたことに。

「…………ごめん。今のは忘れ……………」

「あなたがここへ来るからよ」

「へ？」

ネージュの声に上から被せる形で発せられたキカの言葉に、顔ご

と逸らしていた視線を戻す。けれどキカは広く紅い空を見上げていて、表情は分らない。

耳がかすかに赤く染め上げられているように見えてしまっているのは、さすがに良い方向へ考え過ぎだろうか。

「そ、それって……」

「私がわざわざ時間を割いて、こんな所でのんびりするとでも思っているの？ 時間の無駄だわ」

「……ッ」

口調や言葉選びはキツいの、その内容は。

改めてキカの横顔をまじまじと見つめてしまふけれど、氣遣っているような雰囲気は無い。その代わりに、すごく不機嫌そうだ。

ネージュは震える唇を何とか動かし、さらに言葉を紡ぐ。

「き、キカちゃん、もういっこ聞いてもいい……？」

「何よ」

「その理由って、夕日を見るため？ ……それとも」

キカがこちらに顔を向けてくる。その眉は、ぎゅっと吊り上げられていた。いつもの、あの美しい笑顔は無い。

「愚問ね。私、一言もそんなこと言っていないじゃない」

「でも」

「ああもう、面倒くさいわね。……私、景色を眺めながら休むことなんてほとんどしないわよ」

ツンと尖った口調で言い放つと、スカートの裾を直しながら立ち上がってしまう。ネージュも慌てて腰を上げ、村へ向かって歩き出した小さな背中を追った。今日はもう帰ってしまうのだろうか。

ここで有耶無耶にしたくない。ちゃんと聞きたい。知りたい。

強い気持ちに突き動かされ、ネージュは腹の底から声を出した。

「待って、待ってよ！ キカちゃ……ッ」

「―――私は、自分のしたいことをするの」

振り返ったキカの顔には、いつになくイライラとしたような色が浮かべられていた。足を止めた彼女に合わせてネージュもその場に立ち止まり、正面から見据える。

「必ずそうしなければいけないようなものだったらまだしも、行く、行かないの、そんな下らない問題でわざわざ自分の意思を曲げないわ」

そうして、コテンと首を傾げ、

「……悪い？」

問いかけてきたキカの声は、どこか楽しげだった。

「う、ううん！ 全然！」

「そう」

ああ、でも。

笑ってくれたなら、もっと嬉しかったのに。

* * *

好きだった。心の底から愛していた。

その細い身体を抱き寄せて、あたためてあげたかった。ずっと一緒にいたかった。

キカの心の拠り所になりたいと、本気で思っていた。

「……………ごめんね。約束、守れそうにないや」

死なないって言ったのに。

ずっと、守っていたかったのに。

そんな顔を、君にさせたくはなかった。笑顔が一番似合うだろう顔を、歪ませたくは無かった。苦しい思いも、哀しい思いも、キカにはしてほしくなかったのに。他でもない己が、それを与えてしまう。

ごめん。ごめんね。守ってあげられなくてごめんね。一人残すことになってしまつてごめんね。

———ああもう、時間が無い。

死の宣告が、視界に浮かぶ。キカの目が、落ちてしまふんじゃないかと一瞬危惧してしまうほど見開かれた。その悲痛な表情に、身体が挟られる。喉が痛い。目の奥が熱い。

けれど同時に、溢れそうな愛おしさに胸を突かれた。彼女の頬に触れる。ほとんど無意識のうちに、自身の口から言葉が滑り落ちた。「キカちゃん、好きだったよ」

僕の眼に映ったあの瞬間から、きっとこの後すぐ訪れる最期まで。好きだったんだ。

偽りもなにも無い。ただ純粋に、キカのことを思っていた。

———だから、どうか。

どうか、笑っていて。

音の無い言葉は、ちゃんと伝わってくれたかな。

……伝わっていると、いいな。

キカの笑顔は、どんなに高価で美しい宝石よりも、夜空で瞬く星々よりも、輝いているのだから。

* * *

キカちゃんへ

キカちゃんがこの手紙を読んで、もし嫌じゃなかったら……、今日のフロアボス戦が終わった後伝えたいことがあるので、いつもの草原に来てください。待っています。

面と向かって誘えなくてごめんね。きっと言葉が出なくなっちゃうと思ったので、手紙にしました。

……あのね、僕は、キカちゃんと出会えて本当に幸せだったと思うんだ。

キカちゃんと一緒にいるだけで、僕はとてもあたたかくなるんだよ。この前笑ってくれた時は、嬉し過ぎて倒れそうだった。

多分君は知らないだろうけど、僕、結構必死なんだ。キカちゃんに笑ってほしいなって、どうすれば笑ってくれるかな、って。

どうすれば、キカちゃんと少しでも長く時間を過ごせるかな、って。

僕たちが初めて出会った日のこと、覚えていますか。

君はすごく僕のことを警戒していたよね。けれど、それでも主街区まで送ってくれて、正直驚いたんだ。あの時は、自分から「送ってほしい」って言うおうと思っていたから。

キカちゃん、あのね、絶対否定しちゃうだろうけど、君はすごく

優しいと思うんだ。

君が何故そこまで頑ななのかは分からない。でも、無理やり知ろうとは思わないよ。出会ってまだそんなに時間が経っていない相手に、全部曝け出させていうのは無茶だし。

だけどねそうは言っても、キカちゃんのこと、もっともっと知りたいです。キカちゃんと、もっとずっと一緒に居たいです。隣に立っていたいです。

だからそのために、僕も一步踏み出したいと思います。

ネージュより

「キカちゃんは、どんな反応をしてくれるのかな」

怒るかな。それとも、照れてしまうのかな。

うん、でも、どんな反応でも良いや。……この手紙を読んだ上で僕と会ってくれるなら、何でも良い。

ネージュはペンを机の上に置き、息を吐きながら肩を回した。すでに日付は変わっている。宿の外は、確かな闇に包まれていることだろう。

「……う……ん」

すると、ベッドの方から気持ちよさそうな少女の声が寝息とともに漏れてきて、思わず苦笑してしまう。よく眠っているみたいだ。モゾモゾと動く布の塊に、こちらまで和みそうになる。

よし、決めた。今度キカに彼女を紹介しよう。前は食事を断られてしまったけれど、今度は受けてくれそうな気がする。

いつにしようかな。

今日のことが終わったら、誘ってみようか。予定聞いてさ。無事に2層に行けるようになったなら、そっちで良いお店を探すのも……。

「はは……」

というか、告白が上手くいかなかったらどうするんだ。会ってくれなくなるかもしれないのに、変な余裕がある。

これはあれかな。テスト前の根拠の無い自信みたいなものか。……いや、ちょっと違うか。

完全に脱線したどうでも良い自問自答を脳内で回す。再び苦笑いを浮かべながら、先ほどまでペンを走らせていた便箋を二つ折りにする。白い封筒に入れ、封をした。明日は多分主街区に出てきているだろうから、その時に渡そう。

しっかりとストレージに入ったのを確認し、ホッと胸を撫で下ろした。無事に書いて良かった。机の上に目をやれば同じような紙が何枚も積み重なっているけれど、すべて文面が若干違う。けれど自分の名前まで書き入れたのは、さっきの一枚だけだ。これらは全て、納得いかなくて途中で書くのをやめたもの。間違えて渡してしまう前に捨ててしまおう。

容赦なく削除作業を進めながら、ふと視線を滑らせる。そこには、淡い光を反射して輝く銀色の物体があった。

———雪の結晶のチャームが付いたネックレスと、一对の指輪。ネージュはその内から指輪を一つ手に取り、自身の指にはめた。

決意の意味を、込めて。

彼女がネージュの気持ちを受け取ってくれなくても良い。キカの隣で、支えになりたいのだ。

だけど、もし、もしもこれからの未来で、彼女がネージュに応えてくれるなら。

「……この指輪を、いつかキラちゃんに渡せるといいな」

そんなことを思いながら、もう一つの指輪をスタンドライトにかざして、ネージュは笑った。

その時は、この指輪に刻む文字をキラちゃんに決めてもらおう。君は、どんな言葉にするのかな。

∧ i 5 5 2 7 | 1 4 6 9 2 ∨

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
http://www.akatsuki-novels.com/stories/index/novel_id~3464

ソードアート・オンライン 舞えない黒蝶のバレリーナ （現在修正中）

2016年07月04日 18時00分発行